HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大構内の遺跡 11 平成7・8・9・10年度
Issue Date	2000-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62680
Type	other
File Information	HokkaidoUniversityCampusSites11_H07-10.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

HOKKAIDO UNIVERSITY CAMPUS SITES／2000

北大構内の遺跡

平成7・8・9・10年度

11

北海道大学

北大構内の遺跡

平成7・8・9・10年度

11

序

北海道大学では，創基120周年を1996年（平成8年）に祝ってから5年後の2001年（平成13年）に至る間に，19世紀末から近代化を求めて働いてきた一世紀余の歴史をこえて，地球環境制約時代の新しい文明の創生を目指す21世紀の新しい大学への脱皮を試みようとしている．来る平成13年に創基125周年を，新しい大学の始まる年としたいと考えている．

この大学の展開は，明治9年の日本最初の学士号を授与する近代大学である札幌農学校に始まるが，その地は長い人類の活動を育んできた北辺の大地である．本学の中を流れているサクシュ・コトニ川は，古い卒業生が鮭の遡上を見ていること（館脇名誉教授談など）でも推測できるように，そのほとりの森には先住民族の活動があったであろうことが想像でき，アイヌ文化に遥かに先立つ二千年前前後の続縄文期の文化層と，千数百年前前後の擦文期の文化層が存在することが明らかになってきている．

北海道大学がこの北の大地に新しい展開を遂げていこうとするときに，大都市化して古い物を見ることのできなくなってしまった札幌の中心部にあって，いささかの空間であるにしても，文字に書かれていない古い歴史を求めることができれば幸いである．今回の一連の調査は，比較的小規模な工事にもかかわらず，多くの調査を精密に進めていただいたが，前回までのような大量の擦紋式土器やサクシュ・コトニ川での漁労の跡とも考えられるような新しい発見は得られなかった．キャンパス最南端の国際交流会館新営にかかわる調査では，プラウの農耕跡が昭和40年代の物であるという．私にとってさえこの間のことが，発掘で記録に戻ってくるということが驚きであり，また人間活動と歴史というものの記録，記憶価値の評価の難しさを感じる一こまであった．

平成11年から北海道大学総合博物館が設置され，その中に北大構内の埋蔵文化財調査の成果も収められることになっている．サクシュ・コトニ川は豊平川扇状地末端の泉群（メムライン）の一つに源を発する安定な流況を有していたと考えられる川であるだけに，その畔に歴史をたどれば，長い時間にわたり人が住み続けてきたのではないかと思う．そして，その後どのように北大がそこに活動を展開してきたのかを自然・人文史的に知ることができれば幸いであると思う．擦紋文化以後の遺跡や生活の跡はないのだろうか．ないとしたらどうしてなのだろうか．河畔の湿地で近年では，まとまった集落が作れなかったのだろうか．どこか周辺に近い時代の遺跡があるのであろうか．これからの調査で明らかになると良いと思う．札幌農学校が農場を開いた時，この空間はどうなっていたのだろうか．大学が北十八条道路のトンネル化で北キャンパスに大きく展開しようとしている21世紀にも，先人からのつながりを求めてしっかりとした調査を将来も続けたいと思う．

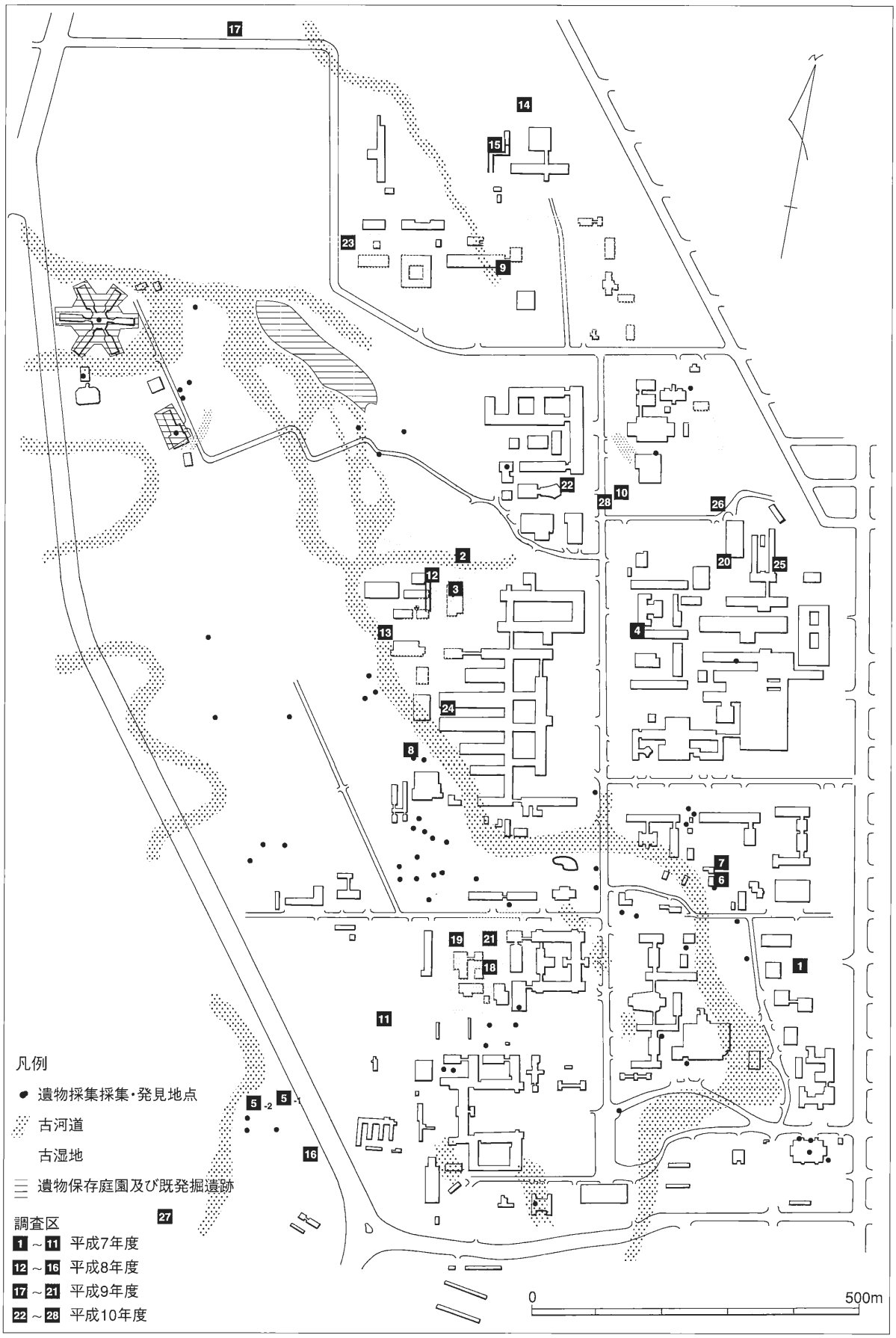
今回の調査にあたっても，たゆまず地道な仕事を進めてくださった調査に関係した皆様のご尽力に深い感謝と敬意を捧げます．ありがとうございました．

西暦2000年（平成12年）3月

北海道大学　総長

丹保憲仁

図１　北大構内全体図


凡例
遺物採集採集・発見地点
古河道
古湿地
遺物保存庭園及び既発掘遺跡
調査区
1 ～ 11 平成7年度
12 ～ 16 平成8年度
17 ～ 21 平成9年度
22 ～ 28 平成10年度
0
500m

《目次》

序 ―― 1
北大構内全体図 ―― 2
目次 ―― 3
凡例 ―― 5

第Ⅰ部　試掘・発掘調査の概要
Ⅰ-1．はじめに ―― 7
　a）調査の概要
　b）北大構内の基本層序
Ⅰ-2．平成7年度に実施した試掘調査及び発掘調査 ―― 9
Ⅰ-3．平成8年度に実施した試掘調査 ―― 24
Ⅰ-4．平成9年度に実施した試掘調査 ―― 30
Ⅰ-5．平成10年度に実施した試掘調査 ―― 35
付編-1．北海道大学札幌団地構内埋蔵文化財関係調査リスト平成7年～平成10年度 ―― 42
付編-2．地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地および薬学部校舎改修（プレハブ）新営工事予定地出土遺物一覧表 ―― 45
付編-3．地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地内出土遺物観察表 ―― 49
付編-4．土層対比図 ―― 50
付編-5．北大構内の遺跡一覧表 ―― 51
付編-6．北大構内の遺物出土一覧表 ―― 53

第Ⅱ部　考　　察
1．農場三角地の埋蔵文化財らしき農耕跡地の歴史考察 ―― 54
2．擦文期の北大構内遺跡群 ―― 62

まとめにかえて ―― 68

写真図版 ―― 69

《図目次》

第Ⅰ部

図1　北大構内全体図 ―― 2
図2　ゲストハウス地点の基本層序 ―― 7
図3　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地 ―― 14
図4　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地（つづき） ―― 15
図5　工学部パワーセンター新営工事予定地 ―― 16
図6　工学部パワーセンター新営工事予定地（つづき） ―― 17
図7　工学部実験棟増築工事予定地 ―― 17
図8　医学部附属病院中央診療棟新営工事予定地 ―― 18
図9　国際交流会館新営工事予定地 ―― 18
図10　国際交流会館新営工事予定地（つづき） ―― 19
図11　国際交流会館新営工事予定地（つづき） ―― 20
図12　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地
　薬学部動物舎新営工事予定地 ―― 21
図13　工学部ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟新営工事予定地 ―― 21
図14　工学部ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟新営工事予定地（つづき） ―― 22
図15　獣医学部校舎新営工事予定地 ―― 22
図16　学生部福利施設新営工事予定地 ―― 22
図17　学生部福利施設新営工事予定地（つづき） ―― 23
図18　農学部附属実験実習棟新営工事予定地 ―― 23
図19　基幹整備共同溝設置予定地（工学部パワーセンター地点） ―― 26
図20　工学部新世代先端材料研究実験棟新営工事予定地 ―― 26
図21　工学部新世代先端材料研究実験棟新営工事予定地（つづき） ―― 27
図22　低温科学研究所研究棟新営工事予定地 ―― 27
図23　低温科学研究所研究棟新営工事予定地（つづき） ―― 28
図24　基幹整備共同溝設置予定地（低温科学研究所地点） ―― 28
図25　国際交流会館家族棟新営工事予定地 ―― 29
図26　先端科学技術共同研究センター新営工事予定地 ―― 32

図27　理学部校舎新営工事予定地
（大学院理学部研究部）――― 32
図28　理学部校舎新営工事予定地
（大学院理学部研究部）（つづき）――― 33
図29　理学部校舎新営工事予定地（つづき）――― 34
図30　医学部附属病院液化貯槽設置予定地 ――― 34
図31　総合メディア交流棟新営工事予定地 ――― 37
図32　獣医学部焼却炉上屋新設予定地 ――― 38
図33　工学部研究実験棟新営工事予定地 ――― 39
図34　医学部附属病院消防用防火水槽新設予定地・
医学部附属病院自家発電装置上屋新設予定地－40
図35　総合メディア交流棟に伴う樹木の移植　学生部
福利施設（ハルニレ）――― 40
図36　総合メディア交流棟に伴う樹木の移植　農学部
附属第１農場苗場 ――― 41
図37　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地
出土遺物(1)――― 46
図38　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地
出土遺物(2)――― 47
図39　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地
出土遺物 ――― 48
図40　土層対比図 ――― 50

第II部

１．

図１　プラウ耕時のれき土の動きとれき条の形態 ― 54
図２　明治 41(1908)年の農場概要図 ――― 57
図３　大正７(1918)年の農場概要図 ――― 58
図４　昭和 12(1937)年の農場概要図　右に昭和７
(1932)年を一部挿入 ――― 59
図５　昭和 37 (1962)年の農場整備計画図　同 42 年
にほぼ計画どおり完成 ――― 60
図６　昭和 49(1974)年の農場概要図 ――― 61

２．

fig.1　北大構内の遺跡群 ――― 63
fig.2　擦文期の構内遺跡群の関係概念図 ――― 67

《表目次》

表１　北海道大学札幌団地構内埋蔵文化財関係調査
リスト　平成７年～10 年度 ――― 42
表２　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地お
よび薬学部校舎改修（プレハブ）新営工事予
定地出土遺物一覧表 ――― 45
表３　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地内
出土遺物観察表 ――― 49
表４　北大構内の遺跡一覧表 ――― 51
表５　北大構内の遺物出土一覧表 ――― 53

《写真図版目次》

第Ｉ部

写真１　ゲストハウス地点の基本層序 ――― ６
写真２　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定
地全体写真（北より）――― 70
写真３　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定
地セクション（東より）――― 70
写真４　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定
地セクション（南より）――― 71
写真５　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定
地遺物出土状況 ――― 71
写真６　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定
地出土遺物(1)――― 72
写真７　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定
地出土遺物(2)――― 73
写真８　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地
（東より）――― 74
写真９　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地
遺物出土状況（北より）――― 74
写真10　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地
出土遺物 ――― 74
写真11　国際交流会館新営工事予定地気球写真 ― 75
写真12　国際交流会館新営工事予定地耕作跡 ――― 75
写真13　理学部校舎新営工事予定地（北より）― 75
写真14　理学部校舎新営工事予定地（北より）― 75

第II部

写真１　検証地のれき土断面 ――― 54
写真２　検証地のれき土平面 ――― 54

凡　例

(1)　この報告は平成７・８・９・10年度に実施された北海道大学構内の埋蔵文化財調査に関するものである．

(2)　上記の期間に実施された調査業務の中，埋蔵文化財の包蔵が確認されなかったものについては，第Ⅰ部付編-１に一括して記載してある．

(3)　平成10年度までに発見された，大学構内の遺跡及び遺物出土地点の一覧表を第Ⅰ部付編-５に一括して記載してある．

(4)　構内各地点の主要なテストトレンチのセクションを基にした土層の対比を第Ⅰ部付編-４に記載してある．

(5)　第Ⅰ部は椿坂恭代が執筆し，林　謙作が監修した．なお，図・表の作成には高倉　純，高瀬克範，小野哲也，宮塚雅子の協力を得た。
　第Ⅱ部の各研究報告は，高井宗宏氏，小野裕子氏が執筆した．

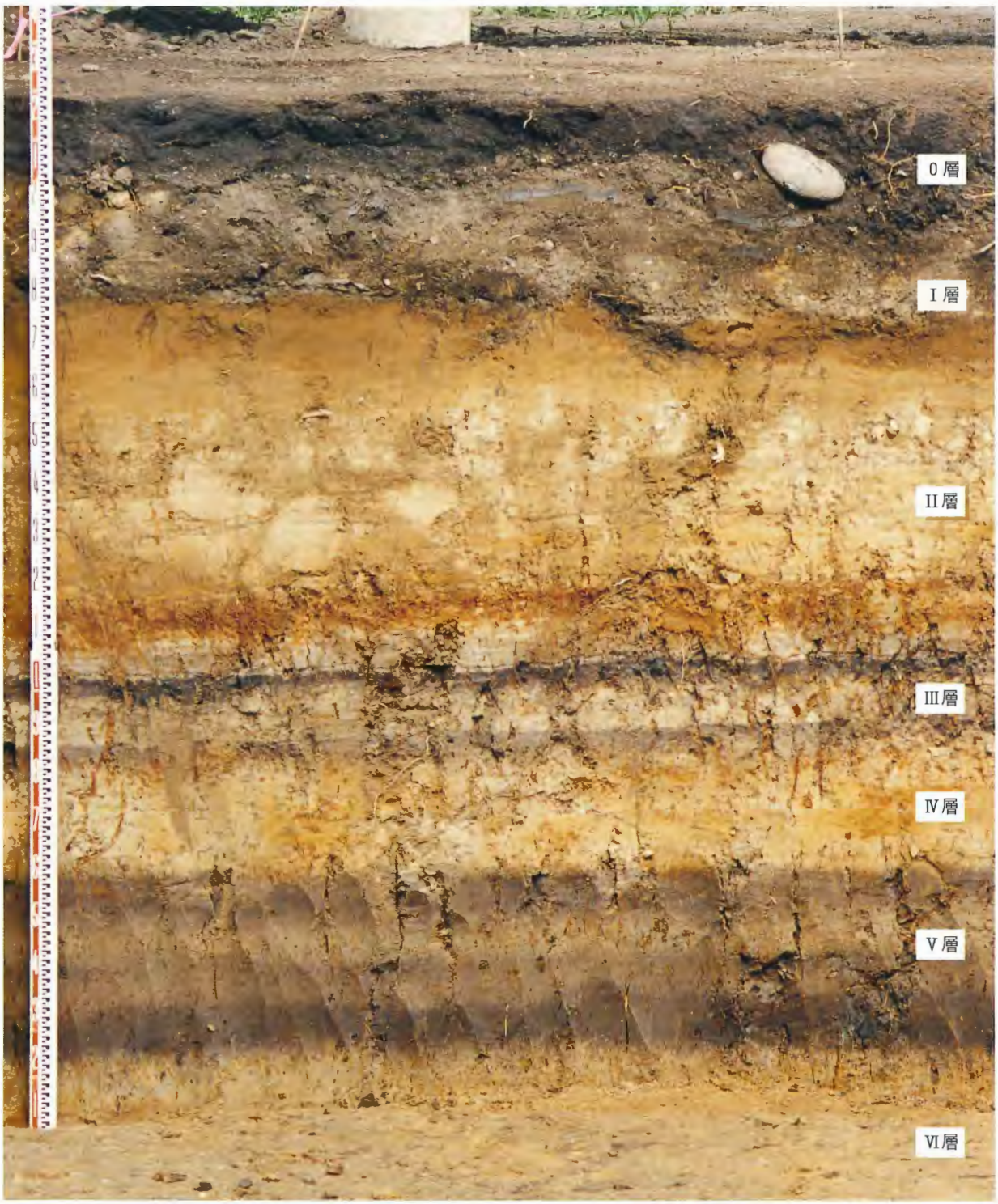
(6)　出土遺物は，すべて北海道大学埋蔵文化財調査室に保管してある．

(7)　北海道大学埋蔵文化財調査室が所属する部局は，北海道大学事務局施設部である．住所，連絡電話番号等は下記の通りである．

〒060-0811
札幌市北区北11条西７丁目
北海道大学埋蔵文化財調査室
電話　011-706-2671（直通）
FAX　011-758-7531（直通）

第Ⅰ部　試掘・発掘調査の概要

写真Ⅰ　ゲストハウス地点の基本層序



I-1　はじめに

a）調査の概要

北大校地はその大半が遺跡として認定されている(K 39 遺跡).「K 39 遺跡」は 1 つの遺跡ではなく，正確には「遺跡群」と呼ばれる相互に関連しあった複数の遺跡の集合体である．これまでの発掘調査によって，現在よりも約 2000 年前前後の続縄文期の文化層と約 1000 数百年前前後の擦文期の文化層とが存在することが明らかになってきた．

そこで開発工事に先立っては試掘調査が実施され，当該地点での遺構・遺物の有無を確認することが必要となる．その存在が認められた場合には，引き続いて本調査を実施することになり，また遺物等の出土が見られない場合でも，遺跡群全体の立地傾向を把握するとともに，今後の試掘調査等の計画・実行をより的確なものにするために，調査地点の地層堆積の状態を観察しなければならない．このような方針の下になされた平成 7 年度から平成 10 年度にかけての 4 年間の調査結果を本書において報告する．

平成 7 年度には 11 件，同 8 年度 5 件，同 9 年度 5 件，同 10 年度 7 件，計 28 件の試掘調査，並びに 1 件の本調査を実施した．試掘調査で遺物等が確認されたものは，平成 7 年度の 2 件のみであるが，その内の 1 件については，引き続き本調査を行った（地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地).これらはいずれも擦文期のものであり，従来の知見とあわせて北大校地遺跡群（K 39）の内容をより具体的に論じることが可能になってきた．

また，平成 7 年度の国際交流会館新営工事予定地（農学部附属農場三角地)での試掘調査では，昭和 40 年代と推定される「プラウ」による耕作痕の存在も確認された．これを直ちに遺跡として評価することは現状では難しいが,北大の沿革誌を物証をもって確認できるものとして，大いに有意義な発見である．明治・大正・昭和の各時代のこのような各種の痕跡は，これまでにも多く発見されており，北大の歩んできた道筋を，あるいは北海道の近代化の過程を，新たな角度から明らかにしうるものとして，この方面での今後の成果にも期待が寄せられる．

b）北大構内の基本層序

平成 6 年度に発掘調査を実施した際，北大構内の堆積土層の統一化が検討され，構内の堆積層は大きく 9 層に分類された(ゲストハウス地点遺跡)．今回，報告書をまとめるにあたりそれに従った．

0 層：盛土，埋土
　建築廃材，ガラス容器等が多く含まれる．

Ⅰ層：黒色土層（旧表土）
　低地では白色火山灰（樽前 a，有珠 b）が検出されることもある．
　Ⅰ層下位から擦文土器が出土．

Ⅱ層：灰色シルト層
　上位に茶褐色砂層が部分的に分布する場所もある.この層の中に炭化物層が見られることが多い．地域によっては本層の下位に洪水堆積層が見られる．
　Ⅱ層の上位，あるいは炭化物層の中から擦文，北大式などの土器が出土．

Ⅲ層：白色粘土層と有機物の多い黒色土層の互層
　上位に褐色リモナイト層が発達する場所が多い．地域によってはⅢ層に挟まれて洪水堆積層が認められる．
　黒曜石製の石核，剝片などが出土．

Ⅳ層：灰褐色シルト層と粘土層の互層
　粘土層とシルト層の互層の場合もある．かなり厚く堆積している箇所もあり，緩やかな洪水堆積層と考えられる．リモナイトの凝集が認められる．

Ⅴ層：黒灰色粘土層
　有機物を多く含む黒色粘土層が 2～3 枚存在する地域と，白色粘土と炭層の互層をなす地域もある．リモナイトの凝集が認められる．
　Ⅴ層の上位と下位から続縄文時代の遺

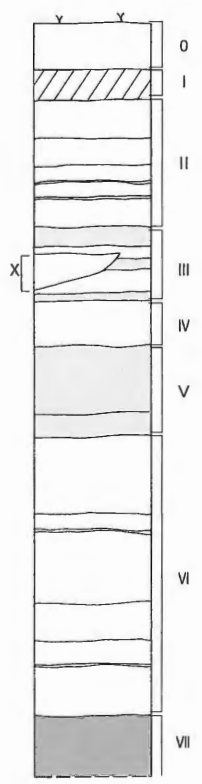


図 2　ゲストハウス地点の基本層序

物が出土.

Ⅵ層：灰褐色シルト層と粘土層

柔らかいシルト層と粘土層の互層．地域によって茶褐色の砂利層を挟む．リモナイトの凝集が認められる．

Ⅶ層：青色粘土層

上位に泥炭化の進んだ２～３枚の黒色有機質層が存在する．この層中に支笏降下軽石礫が検出される場合もある．

Ⅷ層：河川堆積層

砂利・砂・シルト層の互層，急激な洪水があったことが窺える．

I-2　平成7年度に実施した試掘調査及び発掘調査

1．地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地

[試掘調査]
調査日時　平成7年4月17日,18日
調査面積　700 m²
調 査 区　地球環境科学研究科敷地内

調査方法
建物建設予定地内に3箇所のテストトレンチ，付属する共同溝設置予定地に3箇所のテストトレンチを設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果
共同溝設置予定地のテストトレンチからは，遺構・遺物は発見されなかった．
建物予定地のテストトレンチからは遺構・遺物が発見された．遺物は，盛土下層にある旧表土層（構内基本層序Ⅰ層）と現地表から約2m下位の粘土層（Ⅴ層）から発見された．Ⅰ層からは，擦文時代の土器片，また，Ⅰ層の旧表土層から掘りこまれたと考えられるピット，溝跡が検出された．Ⅴ層からは焼骨？と炭化材が発見された．
テストトレンチ内は，撹乱層が多く，昭和22年の航空写真図，昭和27年の構内の配置図から，法経学部が存在していることが確認された．撹乱の位置はこれらの建物の配置とよく一致しており，建物の解体時に撹乱を受けたものと考えられる．
しかし，全体としては遺物包含層の残りは良く，ピット，溝の他に竪穴住居等の存在が予想される．よって，発掘調査が必要と考えられた．

[発掘調査]
当予定地での，平成7年4月17日,18日の調査の結果を受け，5月29日～6月9日まで発掘調査を実施した．

1．基本層序
調査区内の基本的な層序は以下の通りである．
① 盛土層（1m前後）
② 黒色土層（Ⅰ層：旧表土，樽前a土層を含む．下位は柔らかくボソボソ）調査区の北側断面には，黒色土中に黄灰褐色シルト層が介在しており，遺構の排土と考えられ，調査区の北側に遺構の存在が考えられる．
③ 黄灰褐色シルト層（Ⅱ層）
④ 灰褐色シルト層（Ⅱ層下位？）
⑤ 赤褐色シルト層（Ⅱ層下位？）
⑥ 黄褐色シルト層＋粘土層（Ⅳ層）
⑦ 灰白色シルト層＋粘土層（Ⅳ層）
⑧ 灰白色粘土質シルト層（Ⅴ層）炭化材片含む
⑨ 灰白色シルト＋粘土層
⑩ 黄褐色砂＋シルト層（互層）

2．調査の方法
1）グリッドの設定
調査区内に5×5mのグリッドを設定した．北から南に向かって，1，2，3……，東から西に向かって，A，B，C……と名づけ，北東の交点をグリッドの名称とした．（図3・4）

2）掘り下げ
調査は，盛土層と旧表土層の上面を重機で掘削し，遺物が包含されていると考える旧表土の下部，地表下1.0～1.2mについては，人力による掘り下げを行った．
Ⅱ層上面を遺構の確認面とした．Ⅱ層上面は西から東に向かって傾斜しており，調査区内の南東部では，帯水し，Ⅱ層は青く変色している．

3．検出された遺構と遺物
1）遺物の出土状況
遺物は，構内の基本層序Ⅰ層（旧表土層：樽前aを含む）の下部から土器破片103点，紡錘車破片1点，陶磁器破片3点，鉄破片1点，礫6点が出土した．Ⅱ層（黄褐色シルト層）以下からは発見されなかった．遺物は，調査区の北半分に多く分布していた．なお，出土遺物の概要は第Ⅰ部付編-2に記載してある．（図4），（表2），（写真6・7）

2）Ⅴ層の調査
試掘調査の段階では，Ⅴ層と考えられる灰白色粘土層から焼骨？，微細な炭化材が出土しており，Ⅱ層上面の調査終了後，重機を使用してテストトレンチをいれ深掘を行ったが，遺物・遺構は発見されなかった．

3）遺構
Ⅱ層上面から検出された遺構は，径20cm，深さ10cmの浅いピット1箇所と，長径20cm，短径15cm，厚さ3cmの範囲に焼土跡1箇所である．また，昭和22年より

古いと思われる溝跡1箇所を確認した．調査区の北西部を中心に地震による墳砂・クラックが認められた．（写真3）

調査区は，昭和27年の北大構内配置図にみられる法経学部の位置に該当し，その建造物の基礎がよく残っていた．墳砂の位置が建造物の基礎に生じたクラックと一致しており，昭和27年の石狩地震でこの建物も損壊したと考えられる．

2．工学部パワーセンター新営工事予定地

調査日時　平成7年4月19日，20日
調査面積　1,100 m²
調 査 区　原始林南側（駐車場）

調査方法

パワーセンター建設予定地内は，現在駐車場になっているため，放置車，建設資材等が置いてあり，不規則に14箇所のテストトレンチを設定して，重機による掘り下げを行った．

調査結果

現地表下2.5 m前後の深さまで掘り下げ，観察を行った．本地区は，旧地形が湿地であると考えられていた．調査の結果，構内基本層序のIII層以下の保存状態は良く，III層の特徴であるリモナイト層，黒色土層が薄層ではあるが存在していた．黒色土層は，平面的に人力による精査を行ったが，遺物・遺構は発見されなかった．

現地表下2 mの地点に埋木層が存在し，層の厚さの変化はあったが，すべてのテストトレンチ内から検出された．（図5・6）

3．工学部実験棟増築工事予定地

調査日時　平成7年4月21日
調査面積　900 m²
調 査 区　工学部敷地内

調査方法

本地区は以前に工学部改修工事に伴う埋蔵文化財の試掘調査を実施している．平成4年度に実施した西実験棟建設の試掘調査では，旧サクシュコトニ川に沿う湿地のわずかな微高地から擦文時代の土器片が検出されている．今回の調査では，西実験棟の試掘トレンチと対応するように東西方向にテストトレンチを1箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

遺構・遺物は発見されなかった．

現地表下2.5 m前後まで掘り下げ土壌堆積の観察を行った．盛土が約2 mと厚く，それ以下の土層の堆積状態はきわめて悪く，遺物の包含は認められなかった．また，調査区内の一部に盛土が厚く敷かれ，調査が出来ない部分があった．そこは旧地形が湿地であると考えられる箇所にあたる．（図7）

4．医学部附属病院中央診療棟新営工事予定地

調査日時　平成7年4月21日
調査面積　30 m²
調 査 区　医学部附属病院敷地内

調査方法

医学部改築工事予定地内の北側にトレンチを設定して重機による掘り下げを行った．当初，予定地の東側にもう1箇所テストトレンチを入れる予定であったが，大型の浄化装置が埋設されており，1箇所のみとなった．

調査結果

遺物・遺構は発見されなかった．

本地区は，約1.05 mの盛土層に覆われており，盛土層の下部の黒色土層（I層：旧表土）は保存状態は良好である．旧表土層よりも下位にはシルト質，砂層，砂利層と続き，いずれも洪水による堆積層である．（図8）

5．国際交流会館新営工事予定地

調査日時　平成7年4月24日，25日　1回目
　　平成7年6月12日～17日　2回目
調査面積　1,100 m²
調 査 区　農学部附属農場三角地

第1回目試掘調査（平成7年4月24日，25日）

調査の方法

調査区は農学部附属農場三角地で，現在，実験圃場として使用しているため，作物に支障の少ない場所に10箇所のテストトレンチを設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

調査区の西側隣接地は，札幌市埋蔵文化財センターが平成6年度に札幌市立病院建設に伴う試掘調査を実施しており，河川堆積物がほとんどを占めているとの見解から，遺跡地の可能性が十分考えられた．また，調査区内では黒曜石の剝片が表面採取されている．

現地表下2～4m前後掘り下げ，土層堆積の観察を行った．表土層（耕作土）直下に黒色土層（旧表土）がわずがに残っており，その中に火山灰（樽前a，あるいは有珠b）が観察できた箇所もある．地点によっては，表土層直下に粘土・シルト層が安定して堆積しており，遺構の存在が予想された．しかし，黒色土層(旧表土層)以下の堆積土層はほとんどが洪水堆積層ある．砂利層，流木を含む砂層が現地表下3～4m前後から発見された．

以上の所見から表土層の除去時に立会あるいは，作物の収穫後にテストトレンチを設定して，遺構の存在を再度確認する必要があると考えた．

2回目試掘調査（平成7年4月24日，25日）

調査方法

1回目の試掘調査では，作物の関係から，詳細な遺構の確認が出来なかった．今回は，調査区全面に7mピッチで南北にテストトレンチを設定して調査を行った．火山灰を含む畝状の遺構が確認されたので，範囲を確定するために，一部分のトレンチ間に，さらにテストトレンチを設定し，調査を実施した．

調査結果

畑「粗おこし」跡と考えられる遺構が約1,100m²確認された．畑跡は，旧河川（セロンベツ川？）の支流と考えられる浅い沢部に存在する．遺物は，表層（耕作土）からは陶磁器の破片，黒曜石の剝片が数点検出された．畑跡の土層断面から火山灰を採取して，分析をすることにした．畑跡は，標高のやや低い部分のみで確認され，上部が撹乱のため欠落していた．

畑跡の年代について,昭和22年以降の航空写真で調べてみたが該当する畑はなかった．明治末～昭和中ころの陶磁器が出土しているが，時期の確定は出来なかった．そこで，一部状態の良い畑跡部分を航空写真の撮影と測量を行って記録することにした．

土層断面の観察結果から，畑「粗おこし」跡は最下部の砂・シルト層の上に堆積する粘土層，黒色土層，火山灰層，黒色土層(旧表土層)，4枚の土層を掘り起こしたものであり，場所によっては，4色の縞模様がみられる．畝の痕跡は現在までの耕作,あるいは圃場整備によって，上部が削平されており，下部のみが残ったということが判明した．詳細は第II部－1を参照されたし．
(図9-11)，(写真12)

6．薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地

調査日時　平成7年8月21日,22日
調査面積　1,000m²
調 査 区　薬学部敷地内

調査方法

仮設（プレハブ）建物の，基礎部分の掘り込みの深さが約60cmのため，基礎部分を調査対象としてテストトレンチを5箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

調査区の南側（T4・T5）は薬学部の実験圃場として使用されていた．現地表下40cm前後までは，耕作による撹乱を受けていた．耕作土の直下は構内基本層序のI層（旧表土層），その下位の層は灰褐色シルト層（II層）となる．各トレンチを現地表下1mまで掘り下げた．

旧表土層の上面からは人力による精査を行った．T3，T4，T5の旧表土層下部から擦文時代の土器片6点，礫3点，陶磁器破片1点が出土した．

今回は，仮設(プレハブ)建物の基礎部分の調査であったが，今後，この地域に恒久的な建物を建設する場合は，発掘調査を必要とする．(図12･39)，(表2)，(写真8・9・10)

7．薬学部動物舎新営工事予定地

調査日時　平成7年8月22日
調査面積　200m²
調 査 区　薬学部敷地内

調査方法

建物建設予定地内の盛土層を重機を使用して掘削し，精査を行った．調査区のほとんどが埋設物などで撹乱を受けていた．東西にテストトレンチを1箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

遺構・遺物は検出されなかった．

現地表下60cm前後までは盛土層で，直下は砂質シル

ト層，以下の堆積土層は砂層となり，現地表下2.8ｍまで掘り下げたが，堆積状況に変化が見られず調査を打ち切った．（図12）

8．工学部ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟新営工事予定地

調査日時　平成7年10月24日
調査面積　600 m²
調 査 区　工学部敷地内

調査方法

建物建設予定地内に4箇所のテストトレンチを設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

現地表面下3ｍ前後まで掘削を行った．調査区は，サクシュコトニ川の旧河道に当たり，調査した4箇所のテストトレンチのうち，3箇所までは河川内であった．テストトレンチ2・4で，樽前ａ火山灰層を確認した．

テストトレンチ3のみで，台地上に堆積した5枚の黒色土層（黒色バンド層）を確認した．黒色土層の面を人力による精査を行ったが，遺構・遺物は発見されなかった．（図13・14）

9．獣医学部校舎新営工事予定地

調査日時　平成7年10月25日
調査面積　30 m²
調 査 区　獣医学部敷地内

調査方法

建物建設予定地内に，2箇所のテストトレンチを設定して，重機による掘り下げを行った．

調査結果

調査区は，航空写真の判読から旧河川の右岸にあたり，現地表下2ｍ前後まで掘り下げた結果，湖沼堆積層が確認された．湖沼堆積層の下位は青粘土層，泥炭層に移り，遺構・遺物は発見されなかった．（図15）

10．学生部福利施設新営工事予定地

調査日時　平成7年10月25日～27日
調査面積　500 m²
調 査 区　第二体育館南西側

調査方法

建物建設予定地内に6箇所のテストトレンチを設定し重機による掘り下げを行った．うち7箇所で深堀を実施した．

調査結果

遺物・遺構は発見されなかった．

調査区は航空写真の判読から旧河川の左岸にあたる．

現地表下3ｍ前後まで掘り下げ，土層堆積の観察を行った結果，ほとんどが河川堆積層で埋められていた．T 1-3では，河川堆積層が東に傾斜しており，写真判読で推定した流路に繋がるようである．調査区の北東に建設されている第二体育館の発掘調査では，南西部に河川を確認している（1988：北大構内の遺跡［6］pp 24-25）．今回の調査では，河川は確認できなかったが，河川に繋がると思われる傾斜を確認した．これによって，河川は上端で幅25～30ｍと考えられる．

最終的な河川は，上記したとおりであるが，それ以前に，古い河川のかなり氾濫した痕跡が残されている．体育館の発掘調査では，続縄文時代の遺構・遺物が発見されており，続縄文時代には安定していたことが窺える．また，調査区の西側にも，河川堆積層が確認され，西側に向かって傾斜している．また樽前ａ火山灰を含む表土層が残っている．西側にも河川の存在が予想される．（図16・17）

11．農学部附属農場実験実習棟新営工事予定地

調査日時　平成7年11月20日
調査面積　180 m²
調 査 区　農学部附属第一農場内

調査方法

基礎工事の布掘りを行う部分を調査対象として，建物の東縁・北縁にＬ字形のトレンチを設定し，重機による掘り下げを行った．さらに，周辺の堆積状況をとらえるため，建物敷地の外側にもトレンチを設定し，深掘りを行った．

建物東側に設定したトレンチをＴ1，南側に設定したトレンチをＴ2とする．

調査結果

遺構・遺物は検出されなかった．

現地表下30 cm前後までは，常時耕作による撹乱を受けている耕作土で，現地表下60 cmまで掘り下げても，40～50 cm間隔でプラウの爪痕が認められ，土層断面の観察では，現地表下1 m前後におよんでいる．

T 1・T 2ともに，現地表下1.65 m～1.9 mの範囲に2枚のシルト質粘土層が検出された．いずれも上面に多量の炭化物の集積がみられる．それぞれ構内基本層序のⅣ層・Ⅴ層に対比できよう．さらに現地表下2 mのところで，厚さ30～40 cmの黒泥層が検出され，その下は砂のラミナをはさむグライ化した粘土層となる．T 1では現地表下3.6 m，T 2でも現地表下3.3 mまで掘り下げたが．堆積状況に顕著な変化はみられず，調査を打ち切った．(図18)

図 3　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地

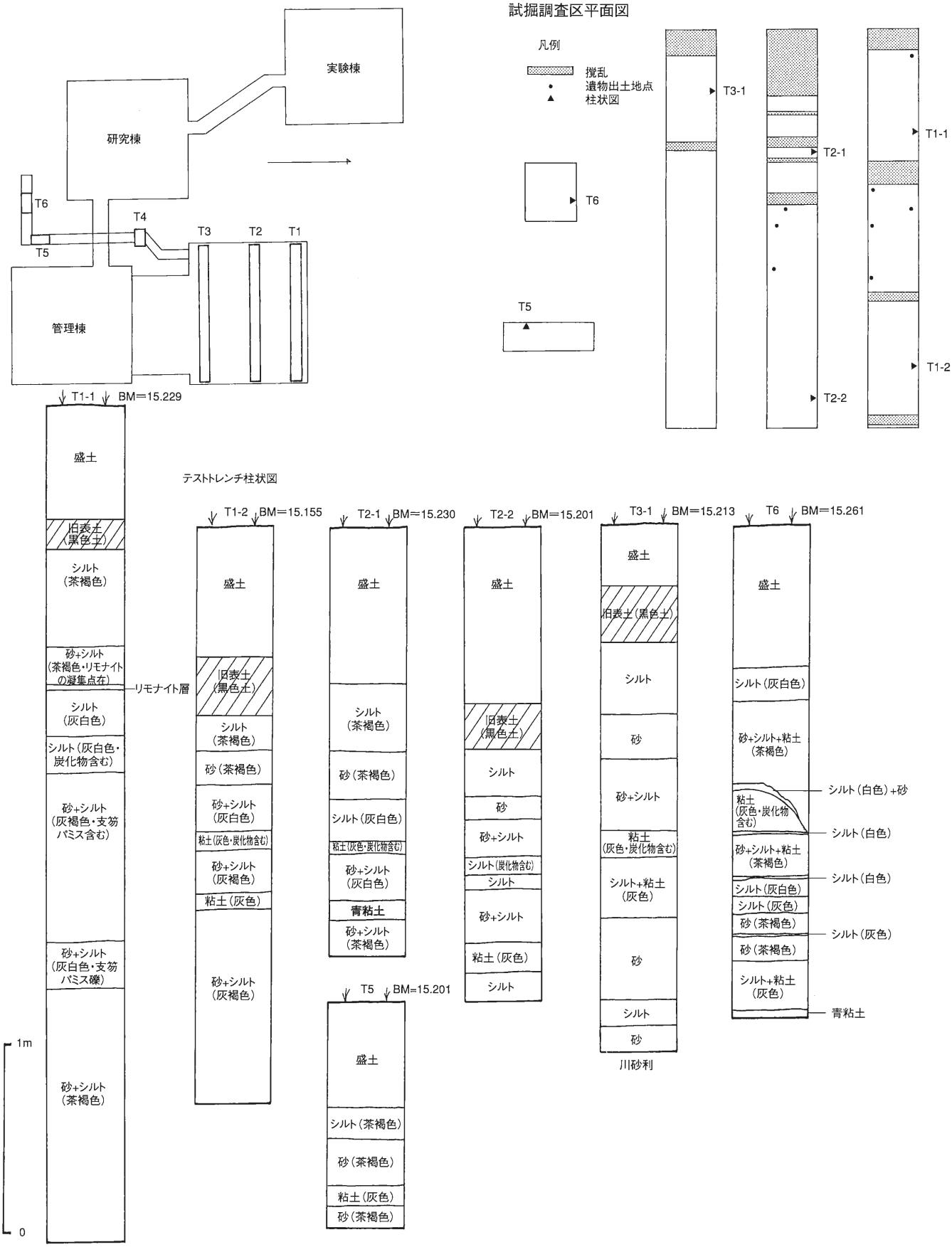


図 4　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地（つづき）

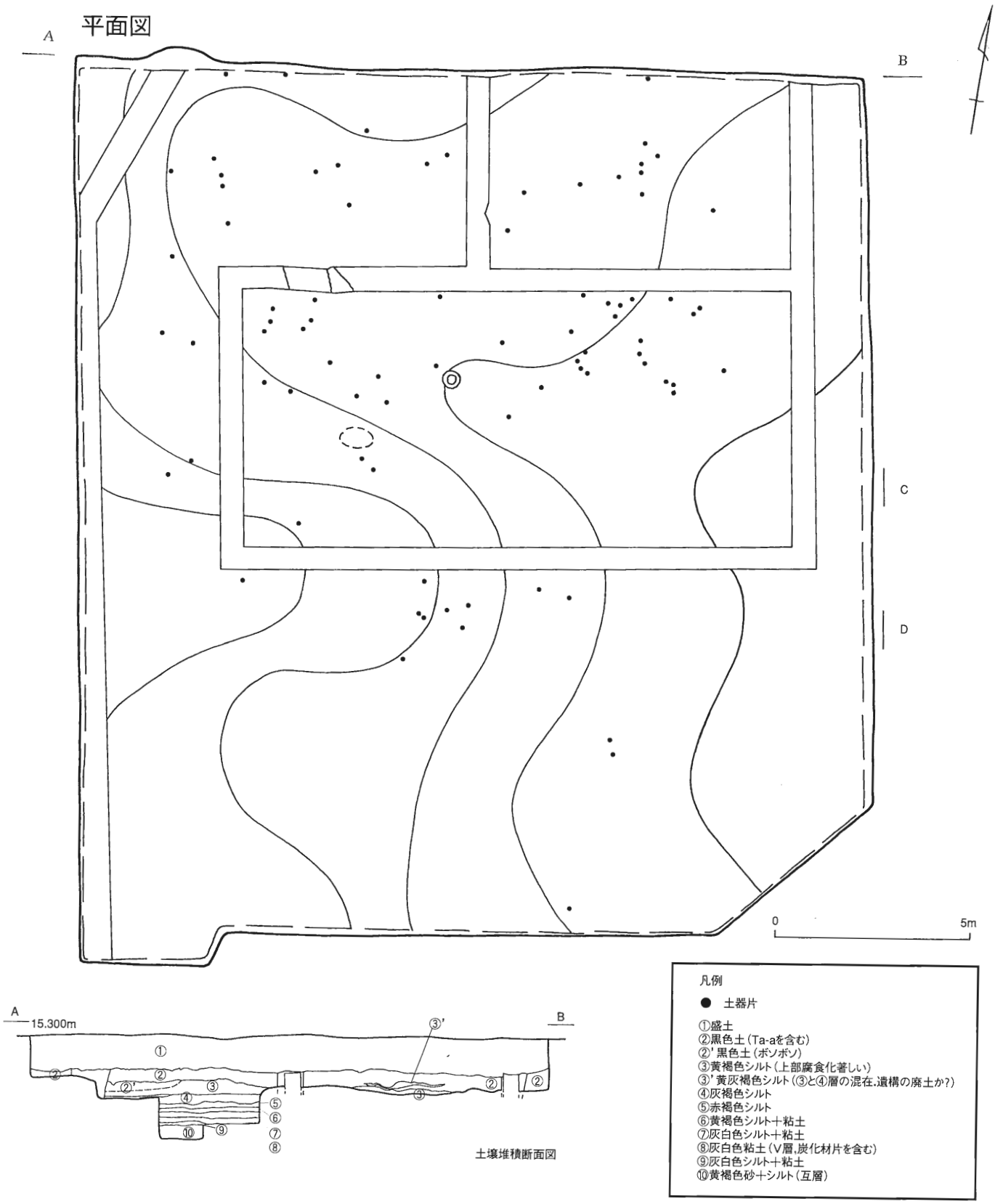


図５　工学部パワーセンター新営工事予定地

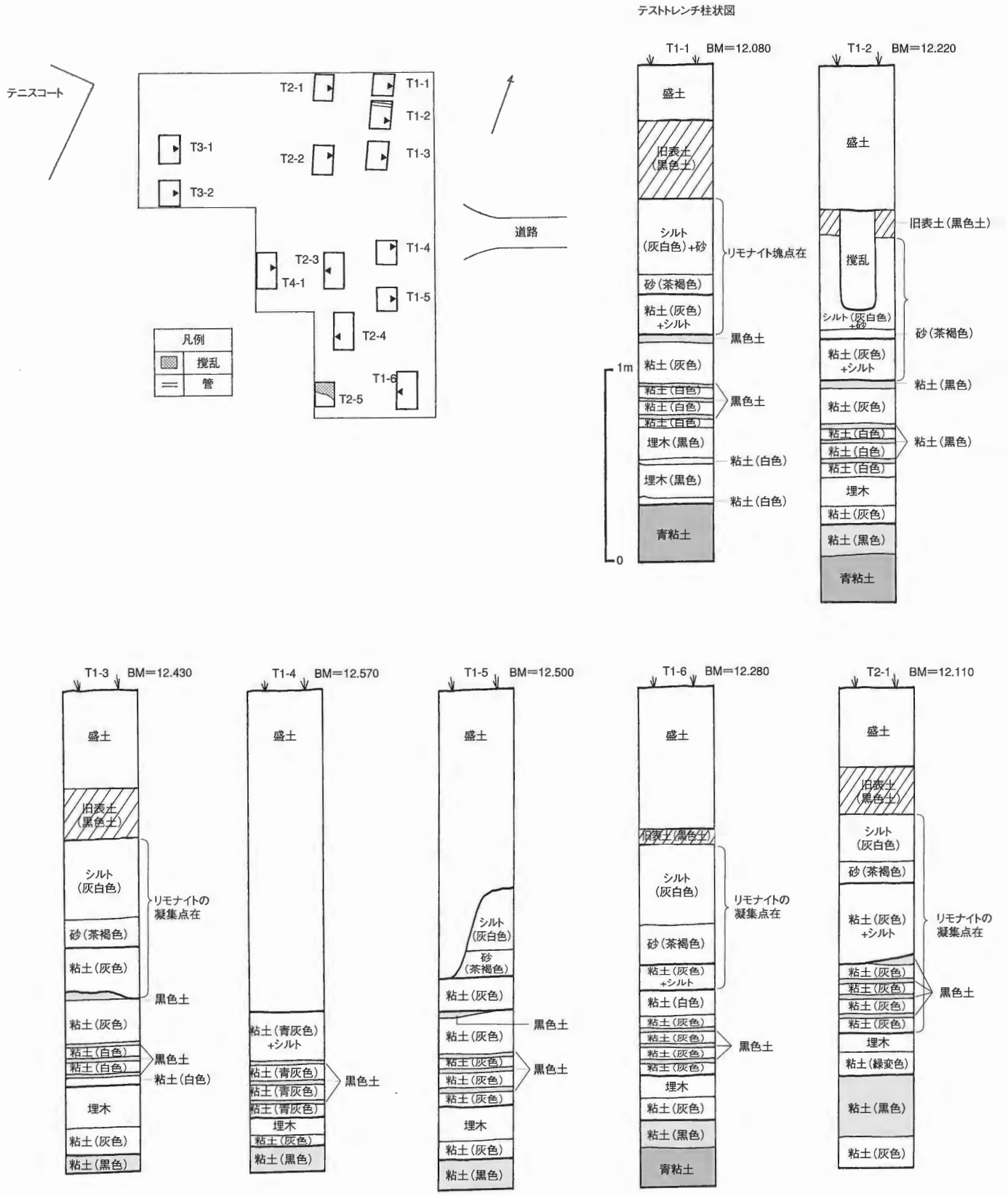


図 6　工学部パワーセンター新営工事予定地（つづき）

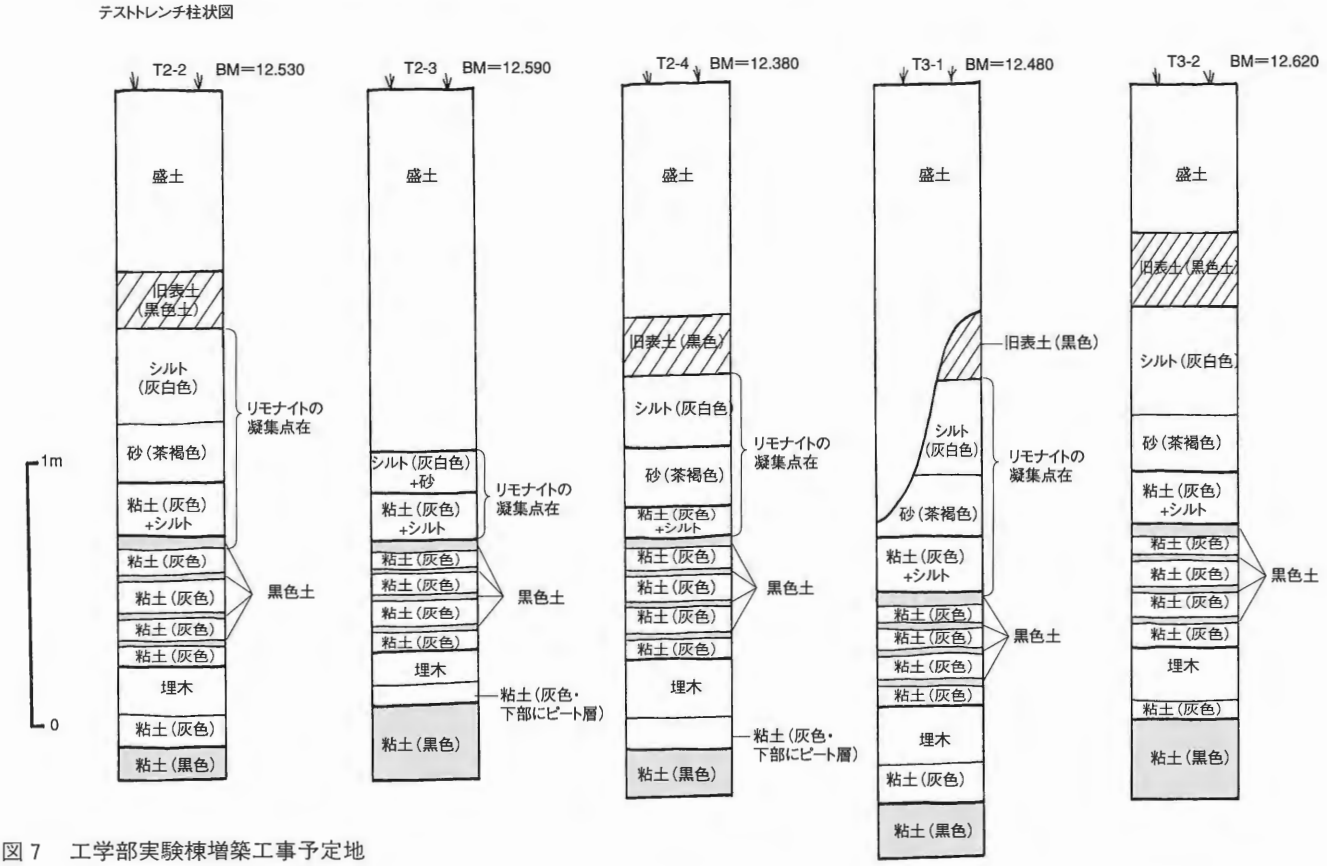


図 7　工学部実験棟増築工事予定地

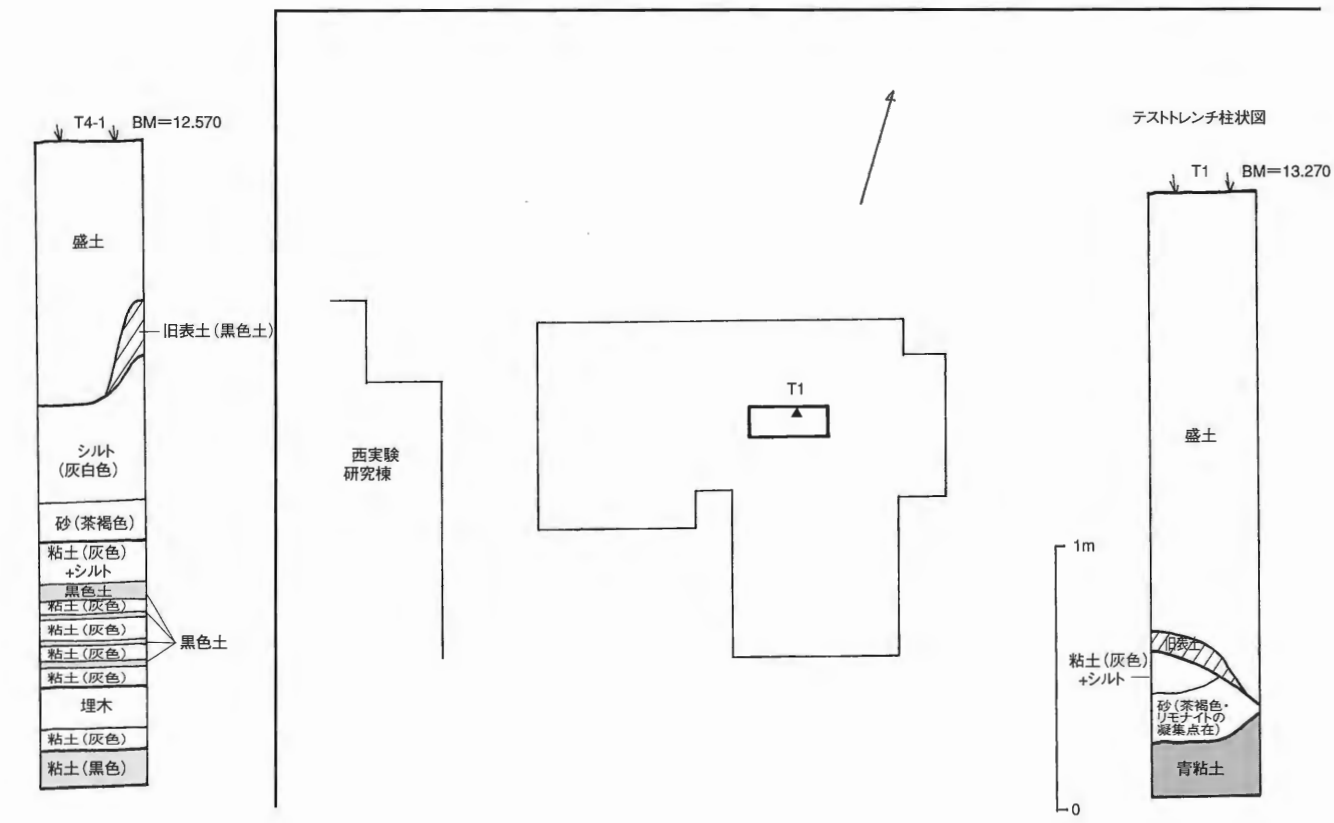


図 8　医学部附属病院中央診療棟新営工事予定地

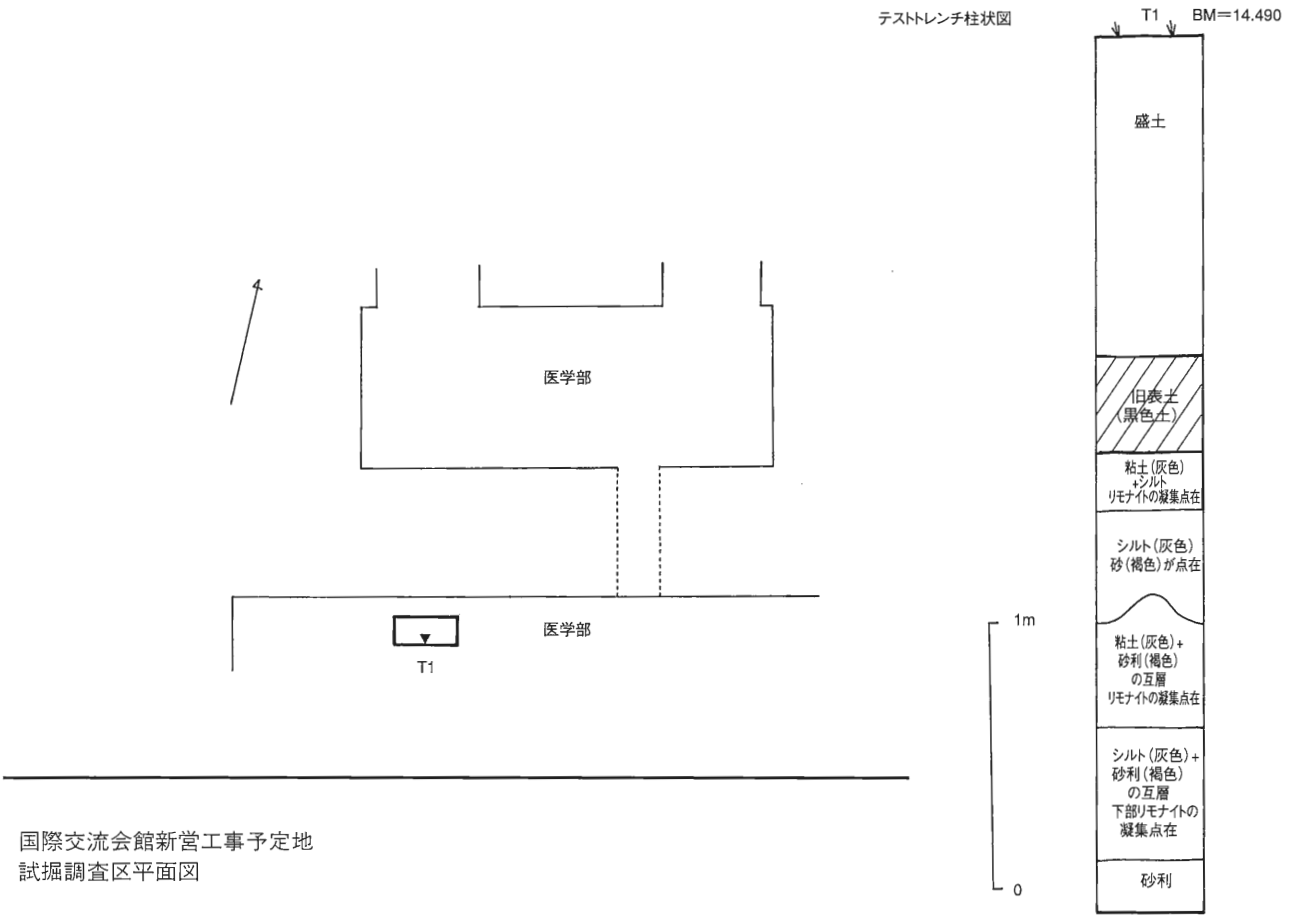


図 9　国際交流会館新営工事予定地
試掘調査区平面図

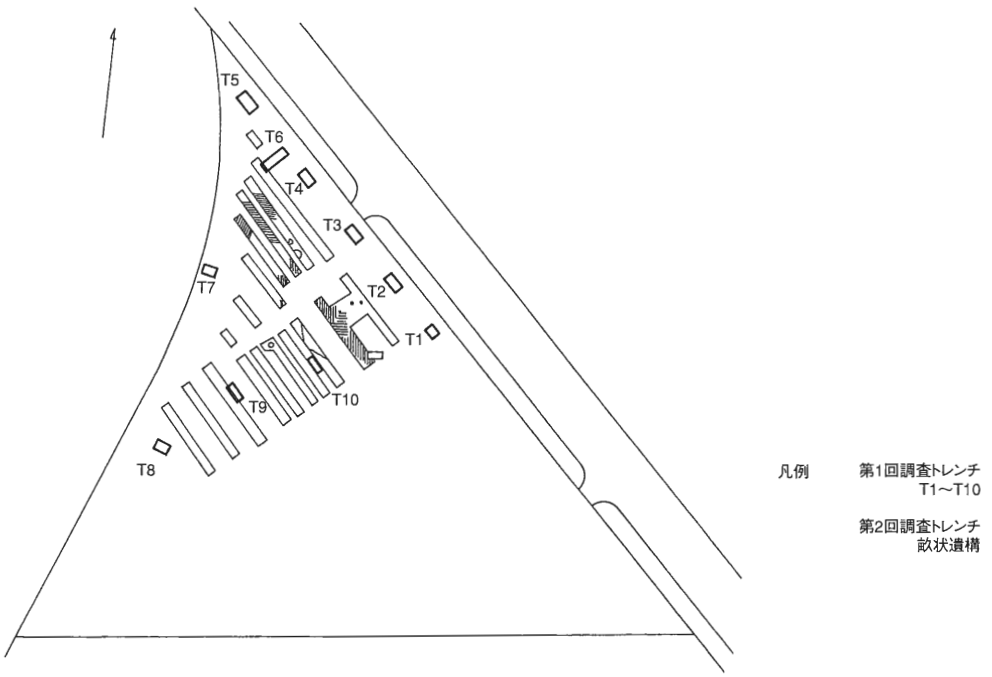


図10　国際交流会館新営工事予定地（つづき）柱状図

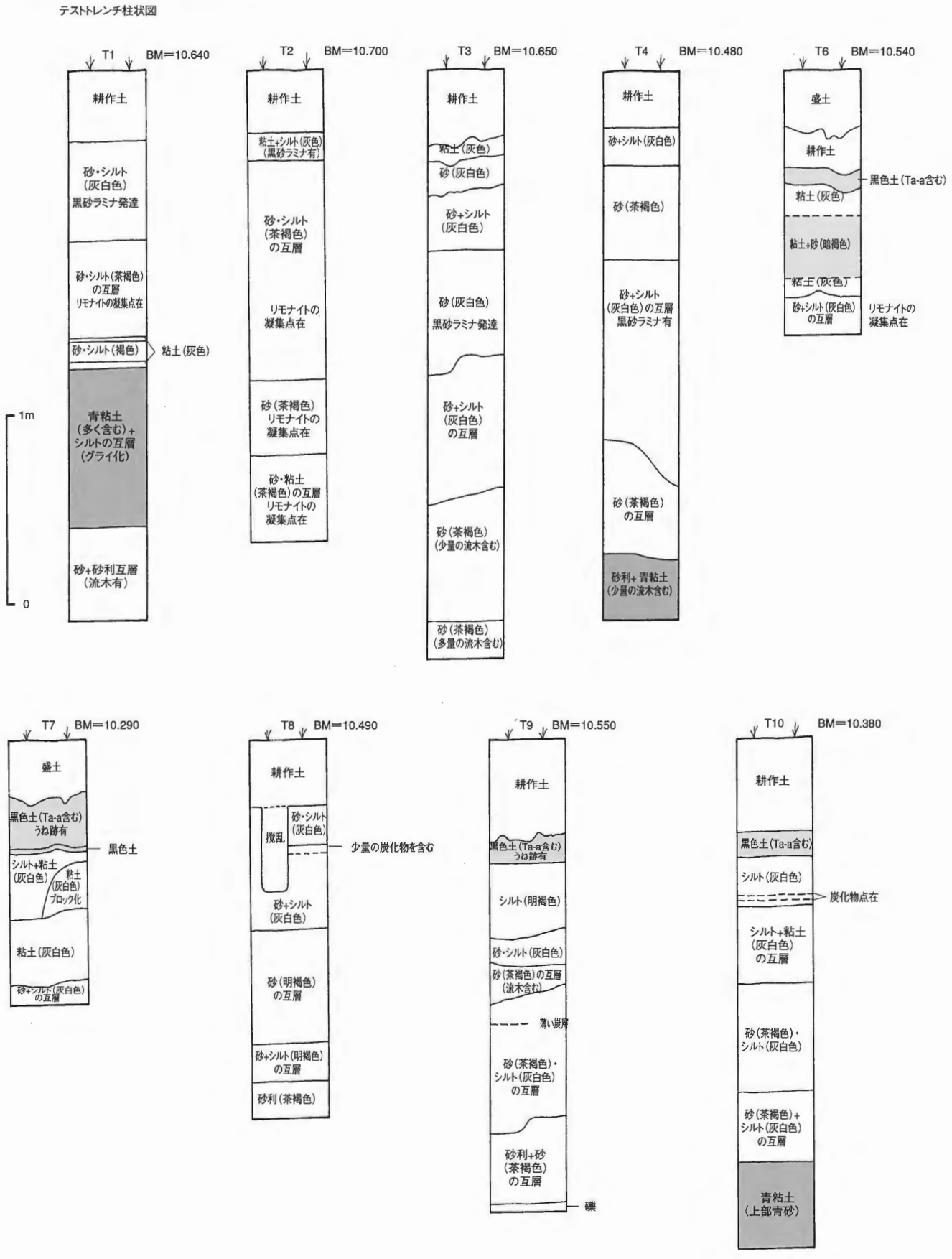
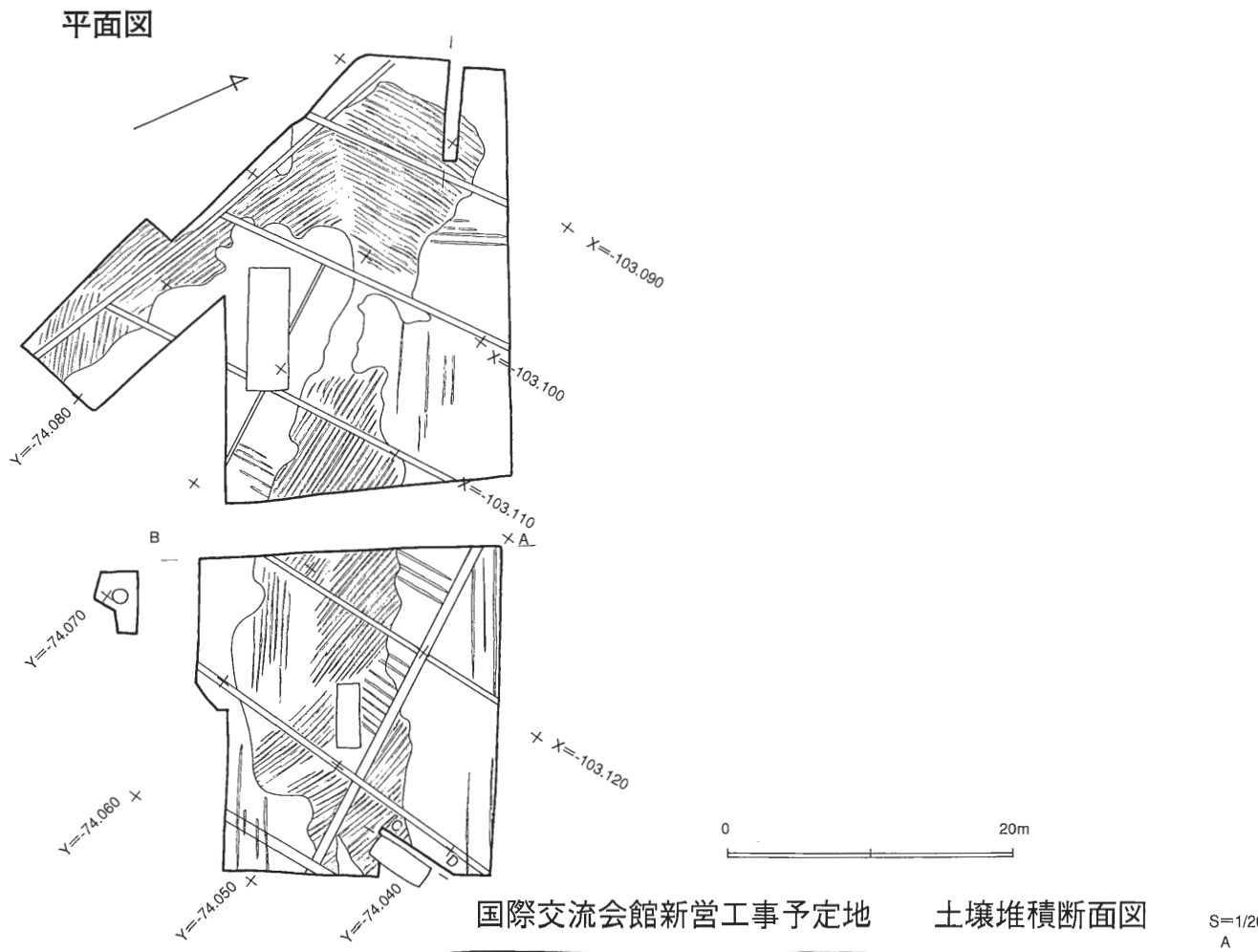
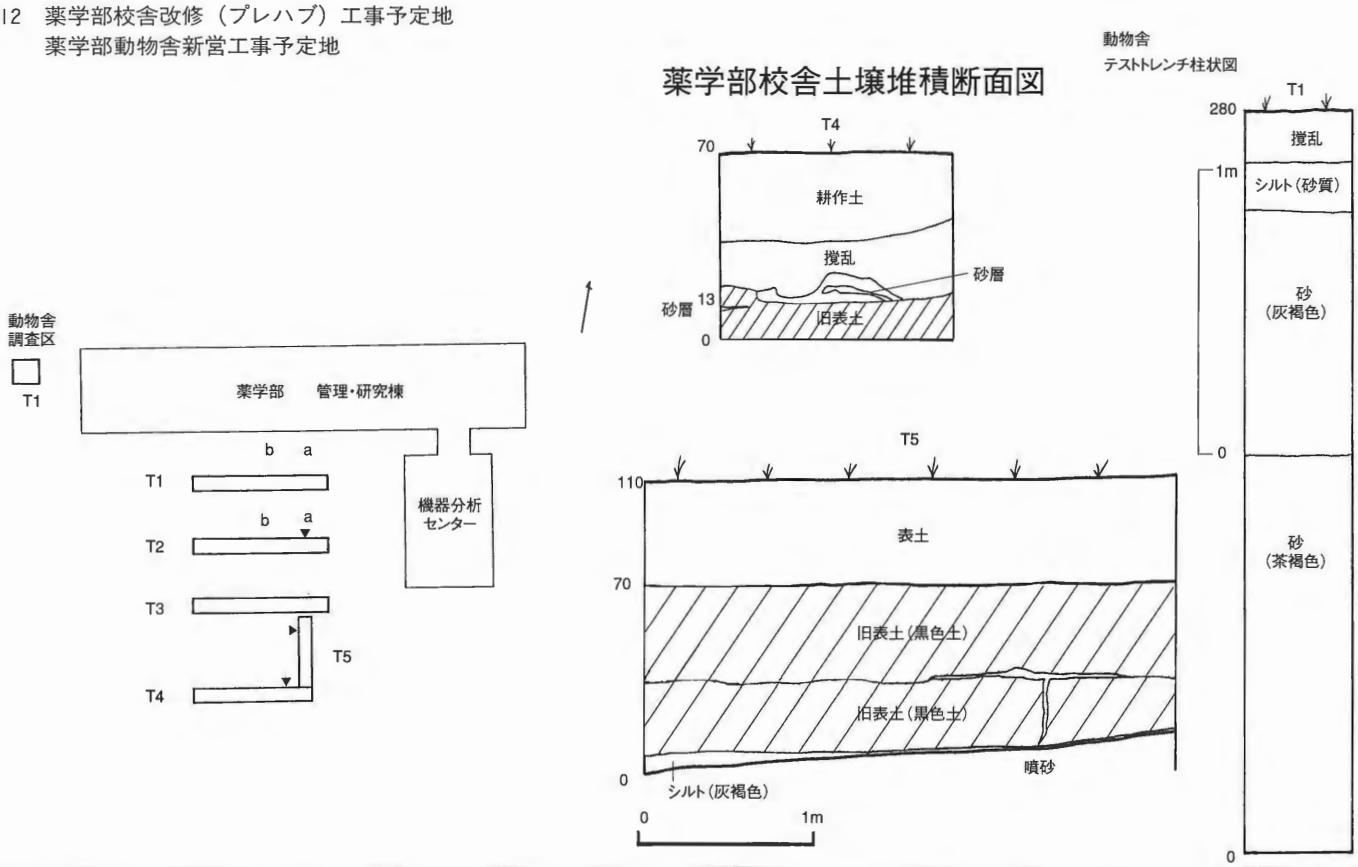


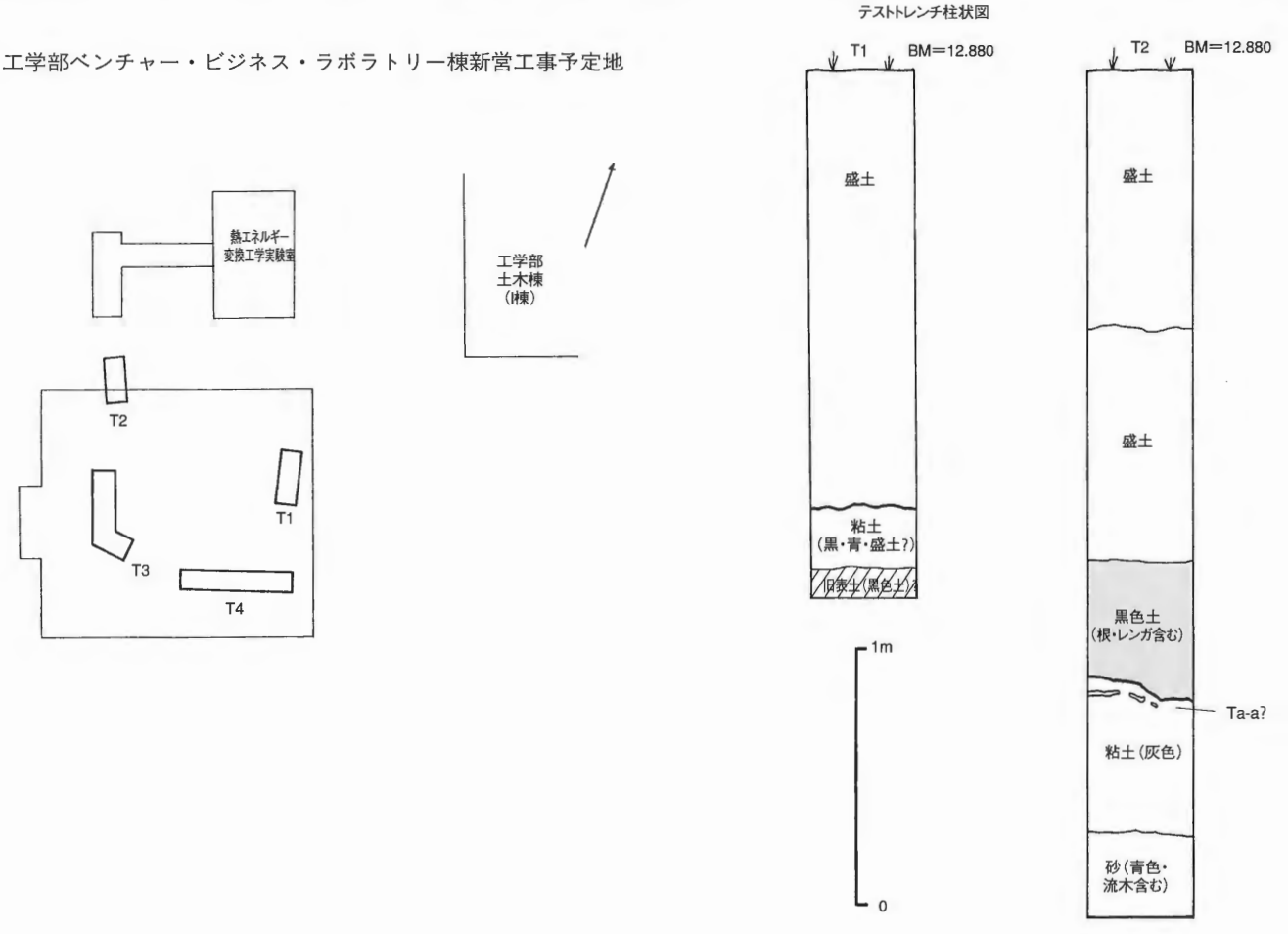
図11　国際交流会館新営工事予定地（つづき）



図I2　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地
薬学部動物舎新営工事予定地

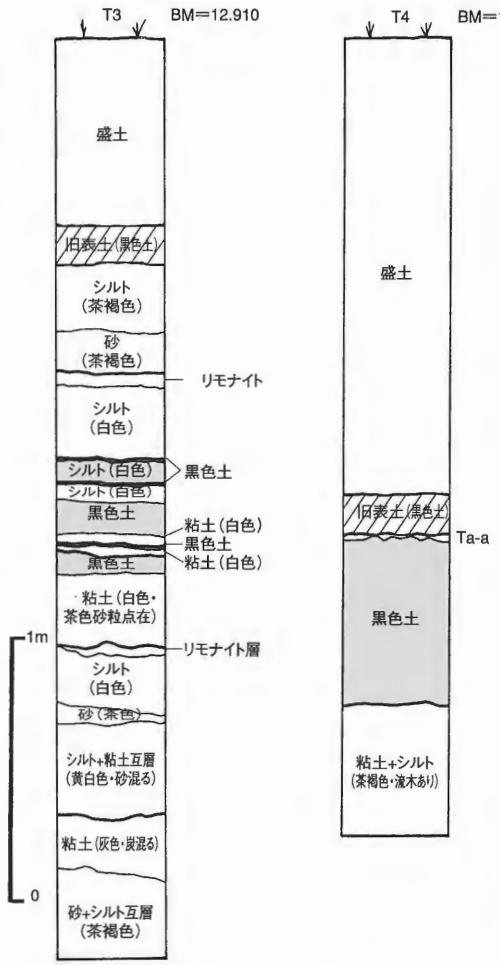


図I3　工学部ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟新営工事予定地



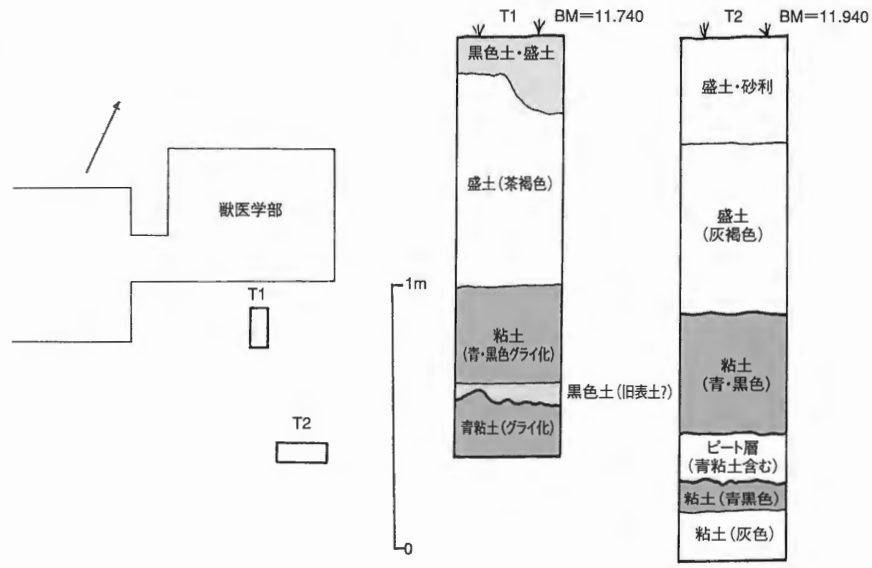
図I4　工学部ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟
新営工事予定地（つづき）

テストトレンチ柱状図

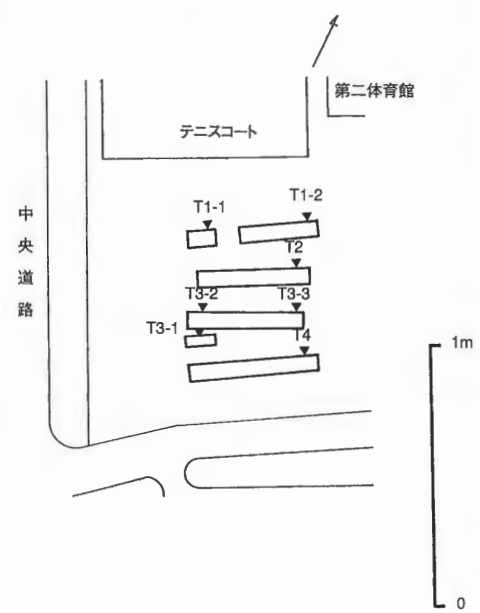


図I5　獣医学部校舎新営工事予定地

テストトレンチ柱状図



図I6　学生部福利施設新営工事予定地



テストトレンチ柱状図

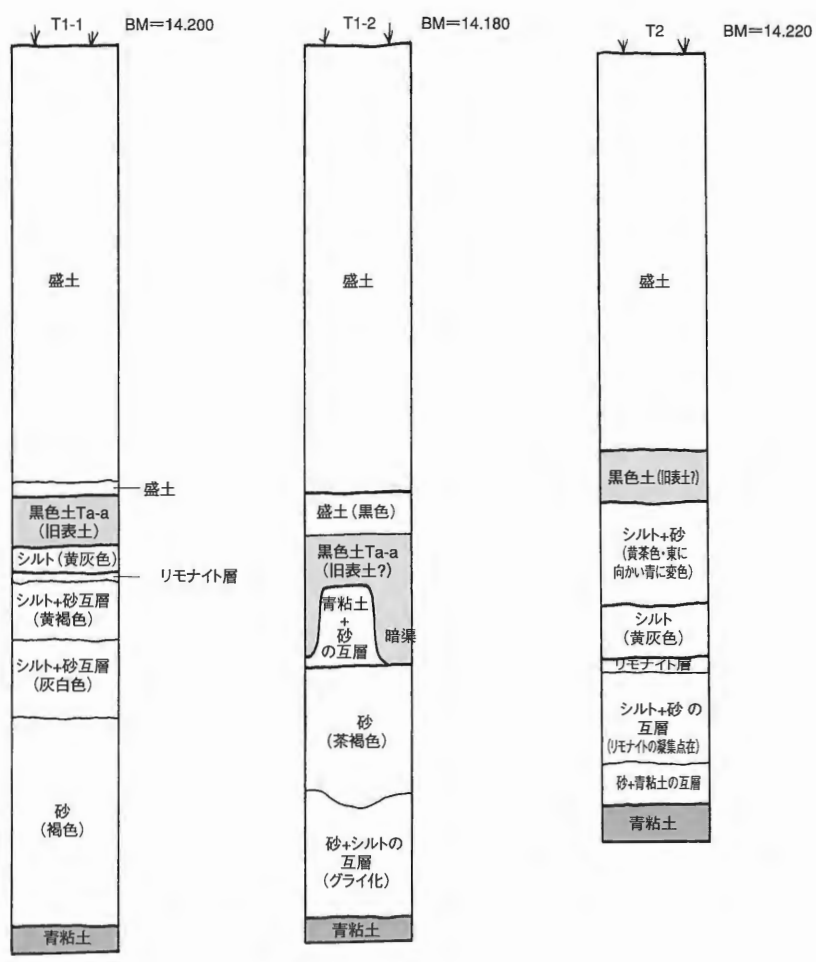


図17　学生部福利施設新営工事予定地（つづき）テストトレンチ柱状図

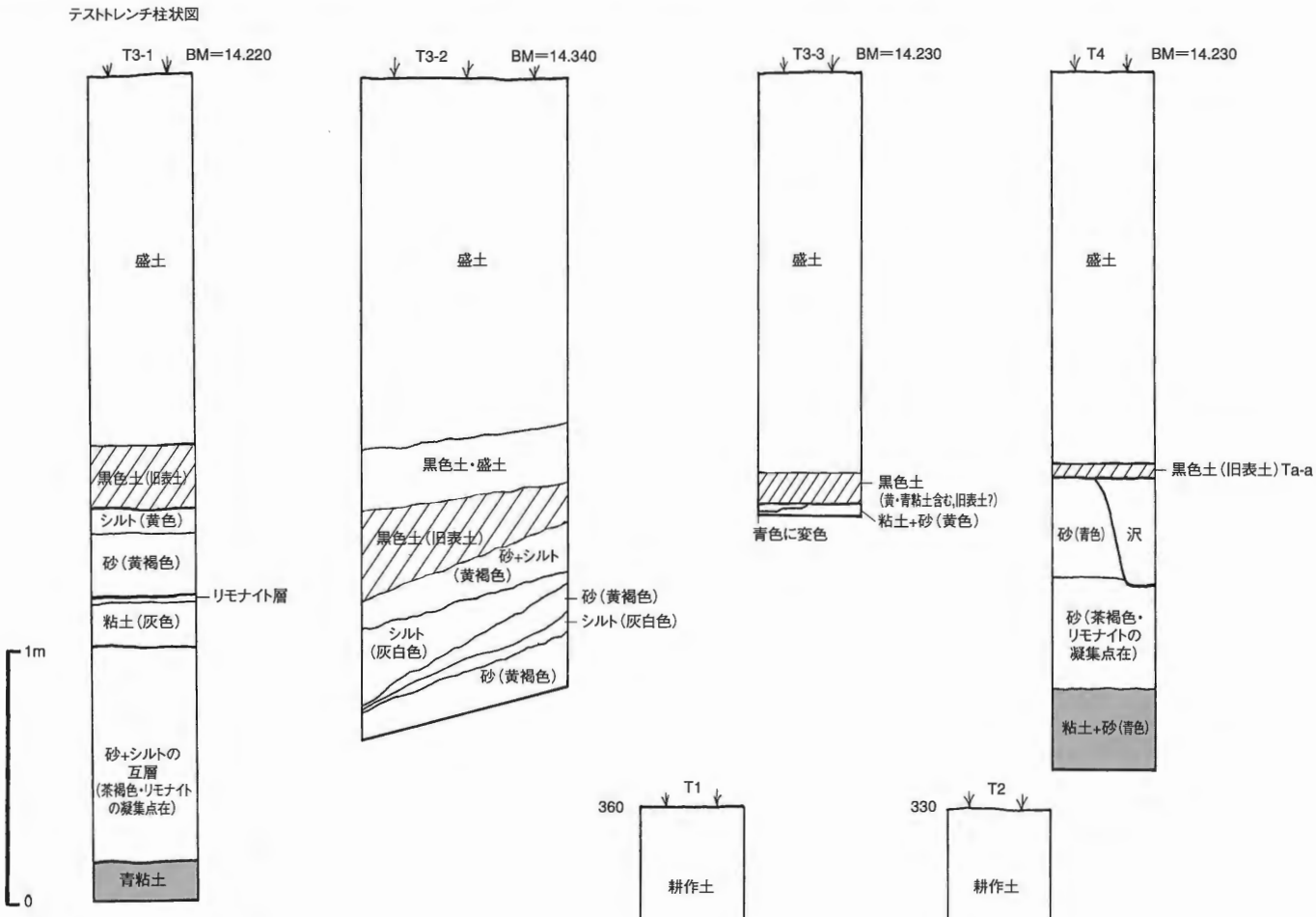
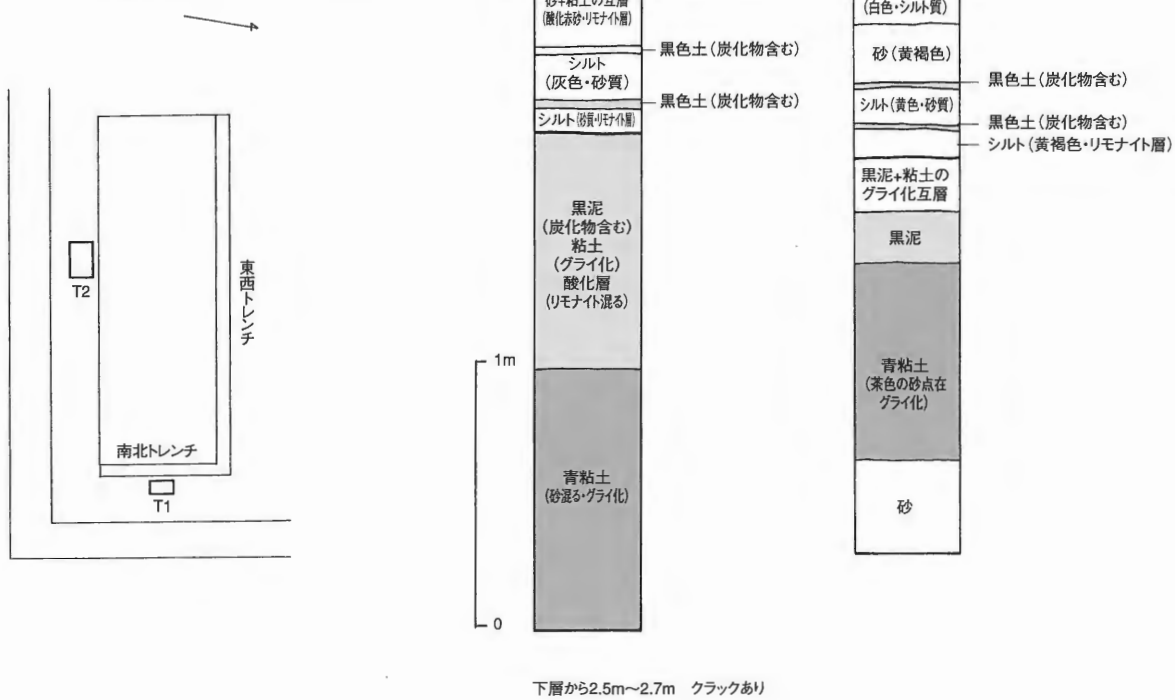


図18　農学部附属実験実習棟新営工事予定地



I-3　平成8年度に実施した試掘調査

1．基幹整備共同溝設置予定地

調査日時　平成8年4月8日～10日
調査面積　約200㎡
調 査 区　工学部パワーセンター地点

調査方法

調査予定区内に4箇所のテストトレンチを設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

遺構・遺物は検出されなかった．

調査区は，現在，道路になっており道路造成時の撹乱層が1m以上あり，その下位にはグライ化した粘土層と砂質シルトの互層となる．各トレンチとも現地表下3m前後まで掘り下げたが，堆積状況に顕著な変化が見られず調査を打ち切った．(図19)

2．工学部新世代先端材料研究実験棟新営工事予定地

調査日時　平成8年5月8日
調査面積　500㎡
調 査 区　工学部敷地内

新先端材料研究実験棟建設予定地は，工学部の西に位置し，旧サクシュコトニ川を経て農場と接する．本地区は農場より一段高く，盛土されていることが予想された．

調査方法

調査区の南側には既設のプレハブがあるため，東西方向に1箇所のテストトレンチと，プレハブの南側にテストトレンチを1箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

調査区全体は，北西に向かって低く傾斜しており，約2mの盛土層に覆われていた．盛土層の下に構内基本層序のⅠ層（旧表土層）が確認され，火山灰（樽前ａ）が検出された．各トレンチ3m前後まで掘り下げたが，堆積状況に顕著な変化が見られなかった．遺物・遺構は検出されなかった．(図20・21)

3．低温科学研究所研究棟建設予定地

調査日時　平成8年5月9日,10日
調査面積　800㎡
調 査 区　低温科学研究所敷地内

低温科学研究所は北海道大学構内では，北に位置し，これまでに埋蔵文化財の調査は，周辺ではほとんど行われていない．平成4年度に実施した赤外線カラー航空写真による古河川等の判読調査からは，現在の低温科学研究所と獣医学部の間に，河川と考えられる痕跡が確認されている．北海道大学周辺の古地図からは低温科学研究所の南側，重要文化財モデルバーン地区は湿地帯となっている．

調査方法

上記の理由から，調査トレンチを多く設け，調査区内の情報をより多く入手することに心掛けた．

調査区内には，低温科学研究所の野外諸施設があり，長いトレンチを設定することが出来なかった．建物の間を縫って,東西方向に3箇所のテストトレンチを設定し，重機による掘り下げを行った．うち5箇所で深堀りを実施した．

調査結果

調査区内の基本的な層序は以下の通りである．

1．盛土層　50-60 cm
2．黒色土層（旧表土）　5-10 cm
　（リモナイト・火山灰を含む場所もある）
3．灰黒色シルト層　5-15 cm　（炭化材片を含む）
4．黄褐色シルト層　10-30 cm
　（場所によっては，砂層と互層になる）
5．茶褐色砂層　20 cm（帯水層）
6．灰色粘土層　10-20 cm
　（黒色土，未炭化植物を含む）

調査区内は複雑な地形をなしており，小河川によると考えられる堆積物が確認された．3の灰黒色シルト層は比較的安定しており，炭化材片が混じる地点もある．全体に水を被っており，4の黄褐色シルト層の一部は還元しており，灰褐色を呈する箇所もあった．遺構・遺物は発見されなかった．(図22・23)

4．基幹整備共同溝新設予定地(低温科学研究所地点)

調査日時　平成8年5月11日
調査面積　200 m²
調 査 区　低温科学研究所敷地内

調査方法

共同溝新設予定地内は現在道路になっている．道路範囲内は，埋設物が多いので，周辺の状況を考え3箇所のテストトレンチを設定し,重機による掘り下げを行った．

調査結果

調査区のほとんどが河川堆積層で占められ，遺構・遺物は検出されなかった．(図24)

5．国際交流会館家族棟新営工事予定地

調査日時　平成8年6月1日，2日
調査面積　1,000 m²
調 査 区　農学部附属農場三角地

調査方法

建設される建物部分を調査の対象範囲とし，建物の長軸に沿って，幅2mのテストトレンチを1本設定し，重機による掘り下げを行い，部分的に7箇所の深掘りを行った．

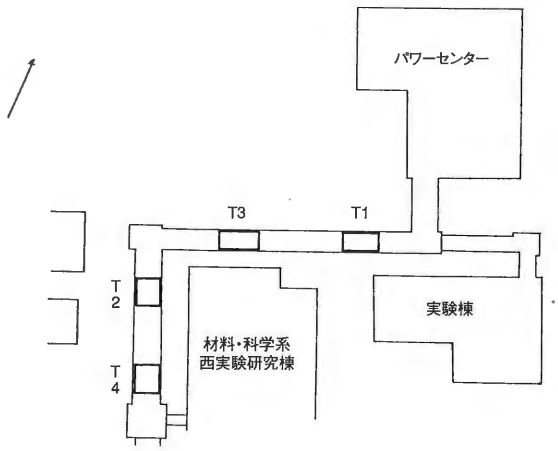
調査結果

調査区内の基本的な層序は以下の通りである．

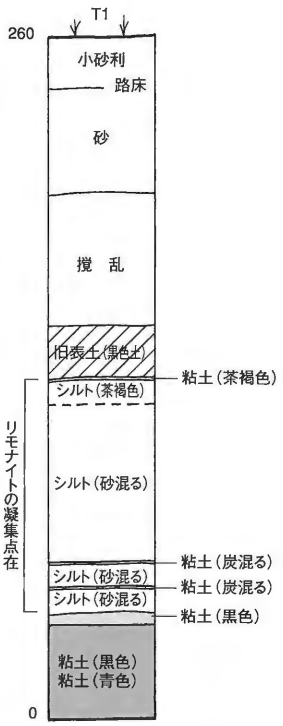
1．耕作土　20 cm
2．黒色土層(旧表土) 5-30 cm
3．灰色シルト層　20 cm
4．シルト・砂互層　10-30 cm
5．砂層　20-80 cm　(木材片含む)
6．青色粘土層　10-20 cm
　(未炭化植物含む)
7．砂利層　1 m
　(ボーリングのデータでは，15 m下位でも確認されている)

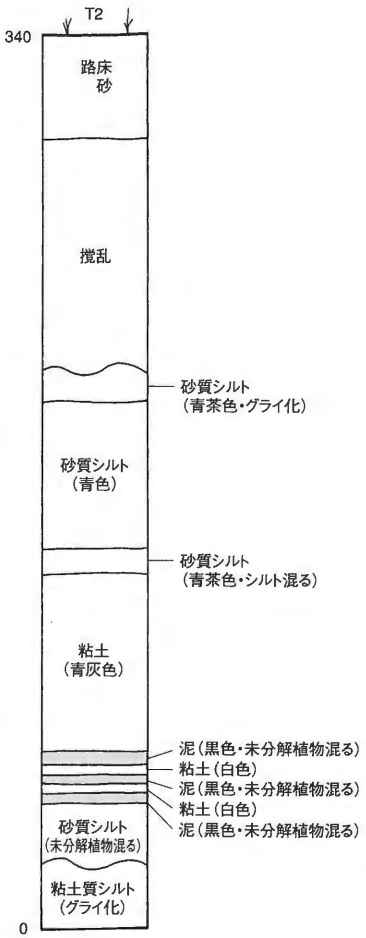
調査区内は，複雑な地形をなしており，沢が縦横無尽に走っている．一部，安定したシルト層・炭化物層が確認され，平面的に広げ，人力による精査を行ったが，遺構・遺物は発見されなかった．(図25)

図19　基幹整備共同溝設置予定地
（工学部パワーセンター地点）



テストトレンチ柱状図





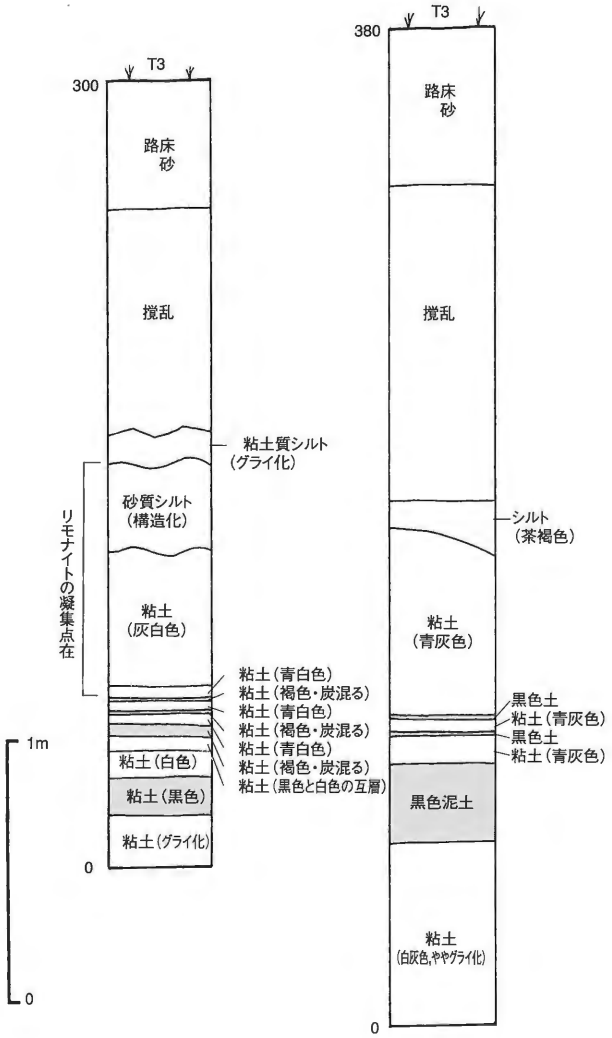


図20　工学部新世代先端材料研究実験棟
新営工事予定地

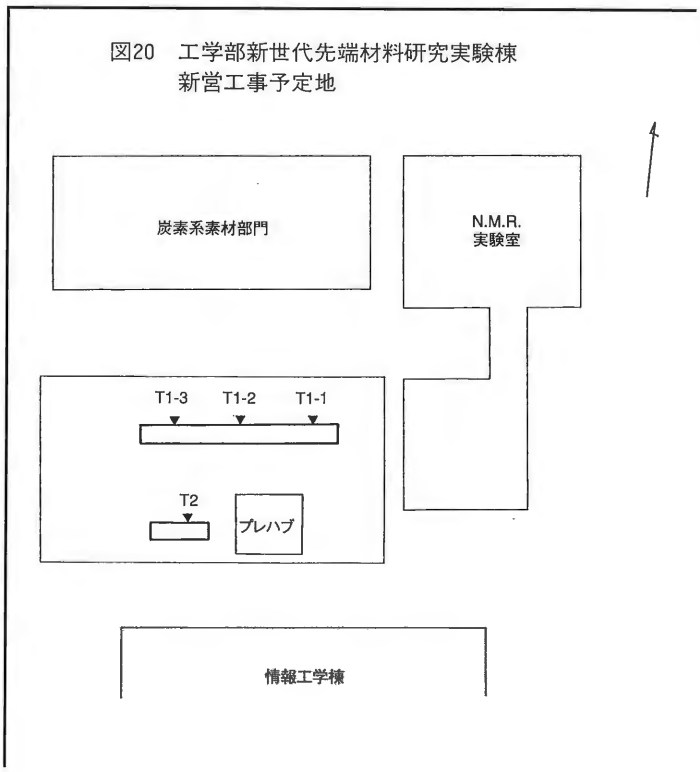


図21　工学部新世代先端材料研究実験棟新営工事予定地（つづき）テストトレンチ柱状図

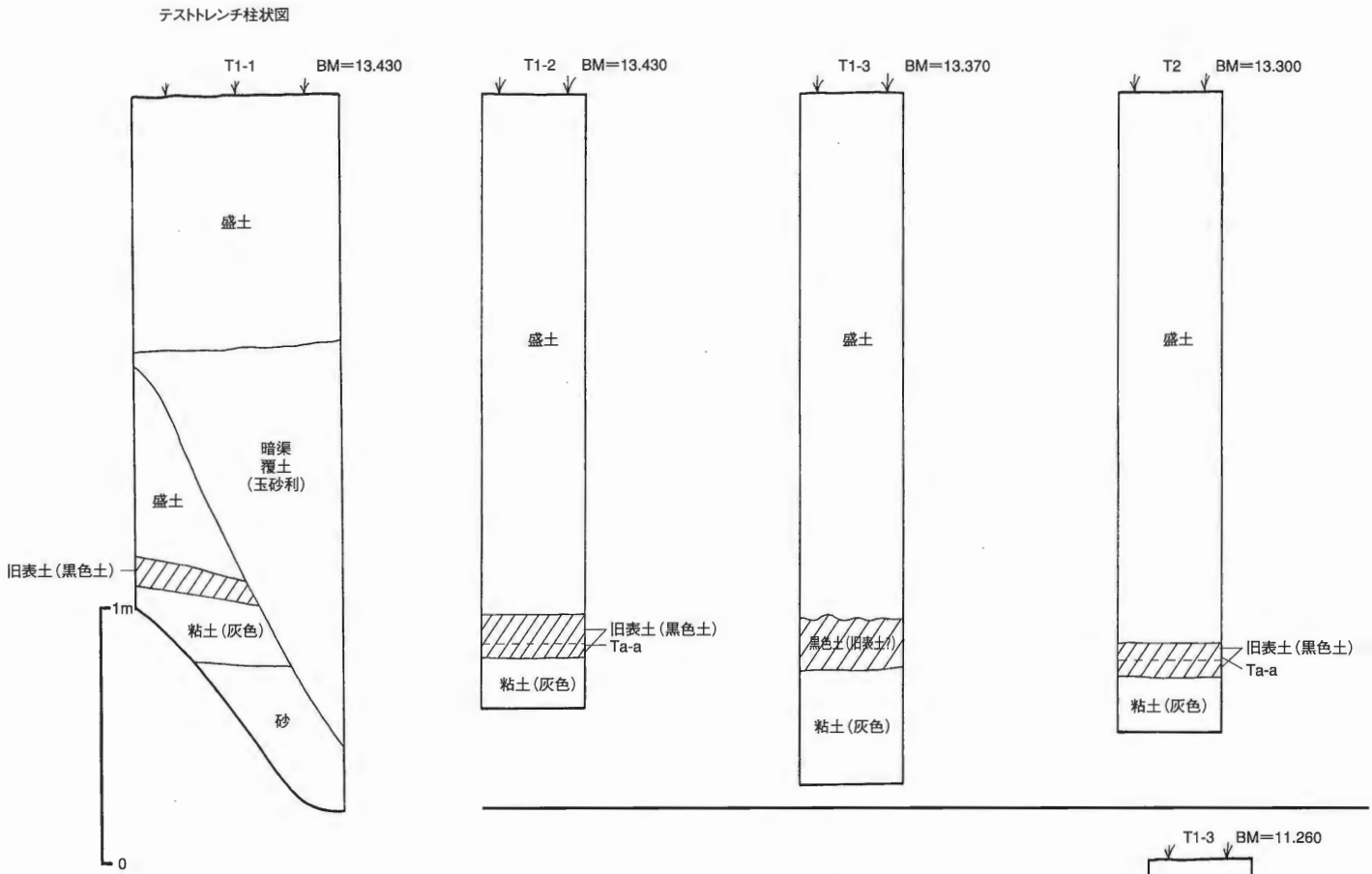
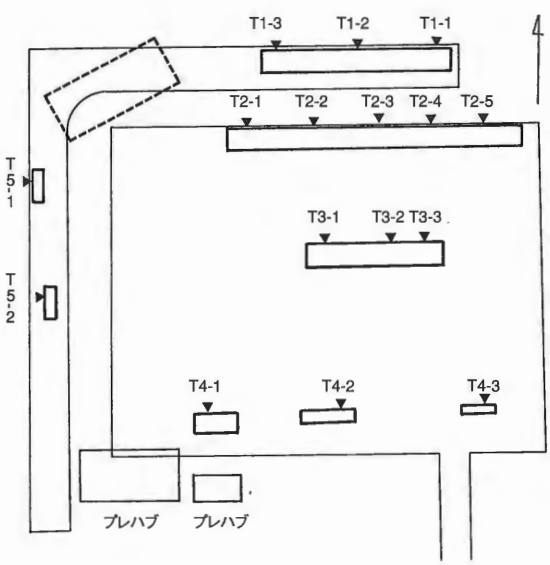


図22　低温科学研究所研究棟新営工事予定地



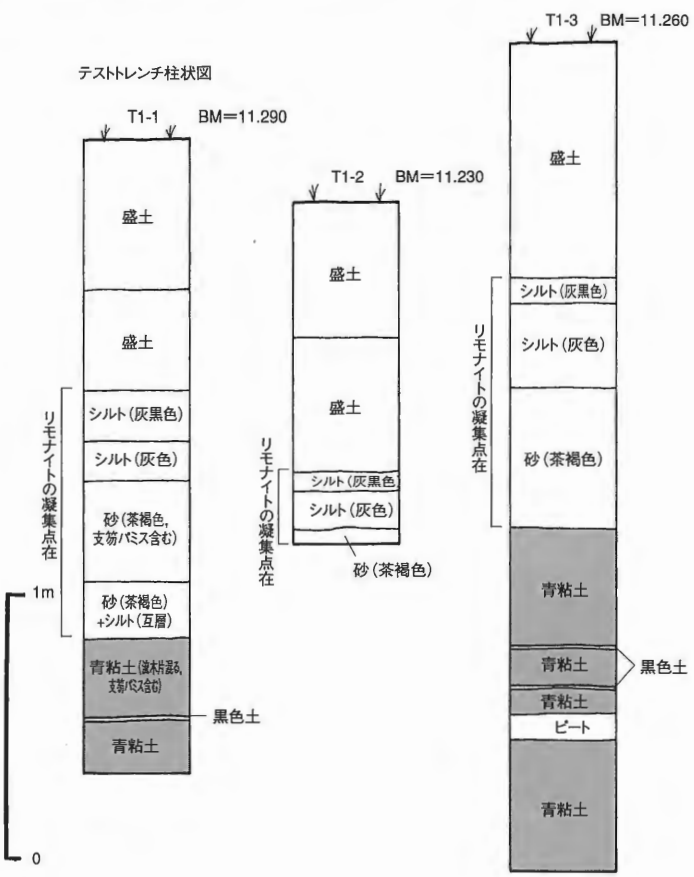


図23　低温科学研究所研究棟新営工事予定地（つづき）テストトレンチ柱状図

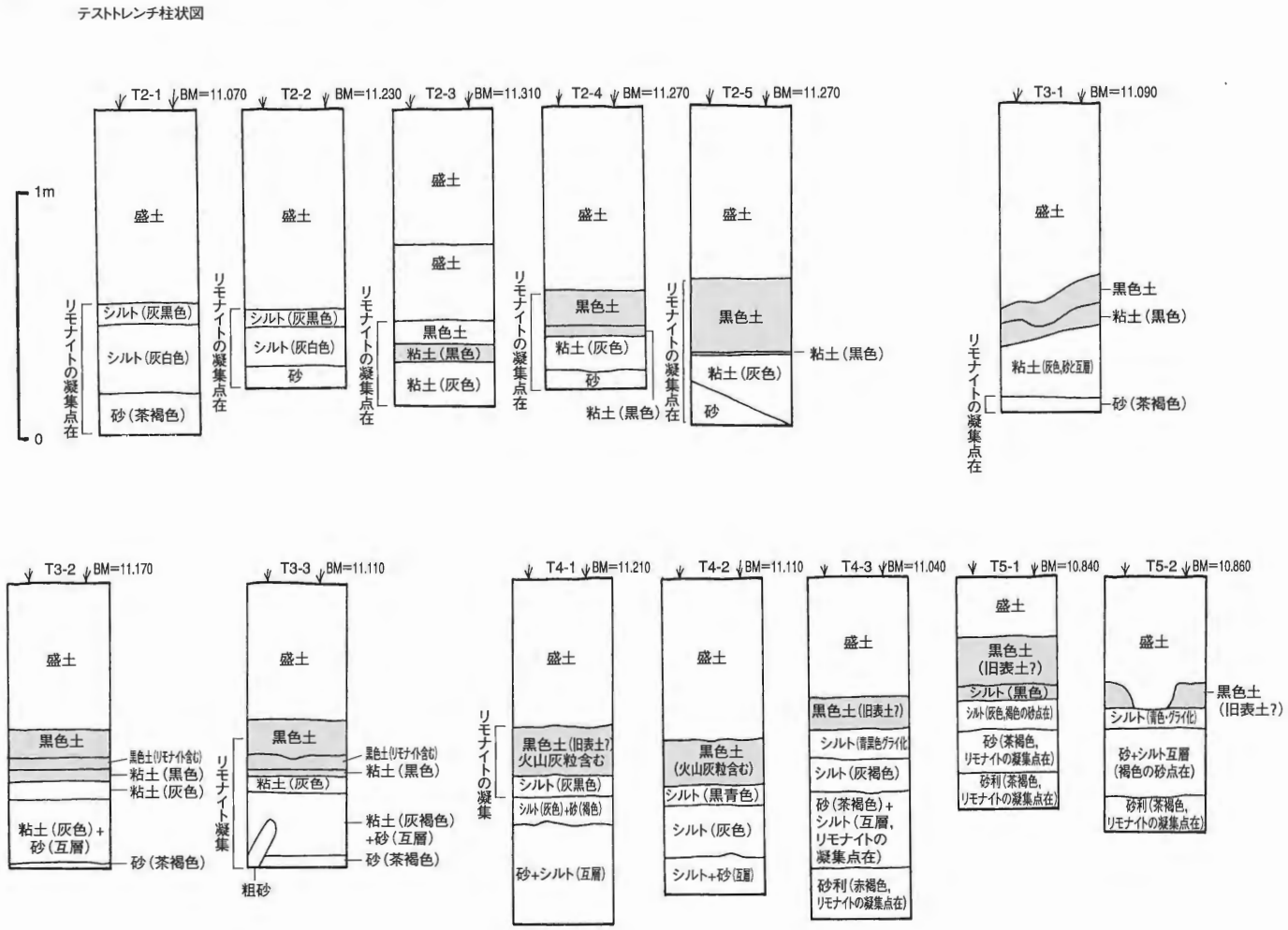


図24　基幹整備共同溝設置予定地
（低温科学研究所地点）

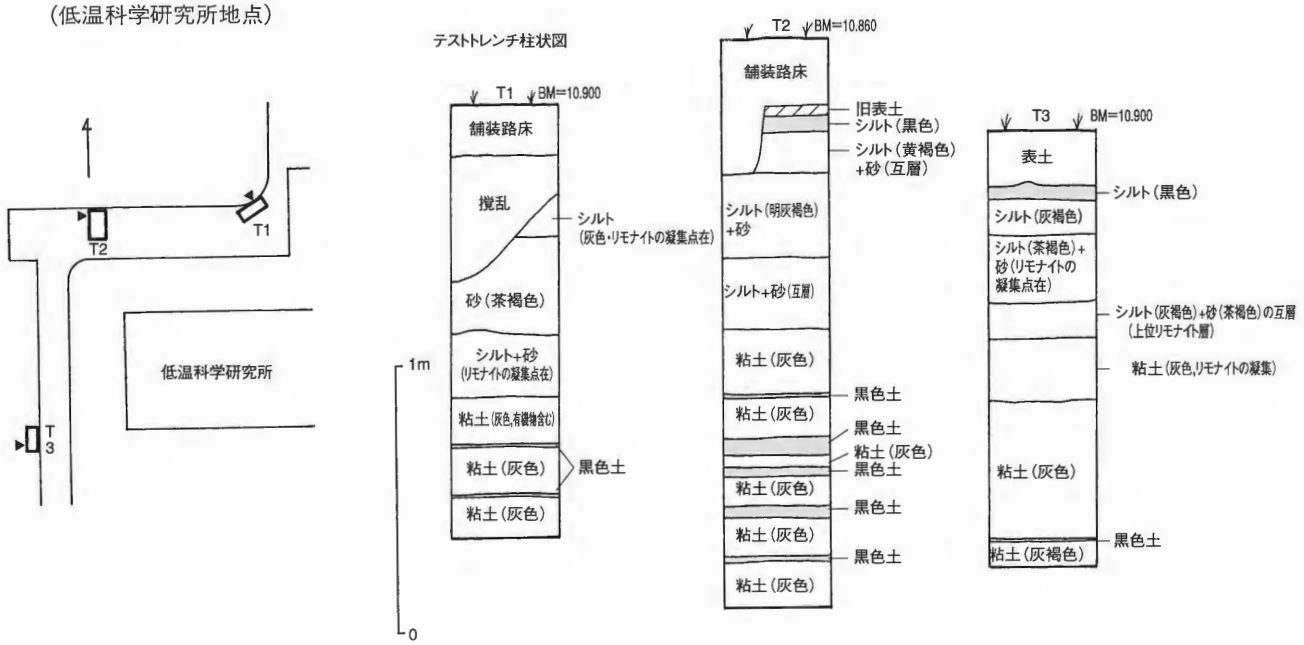
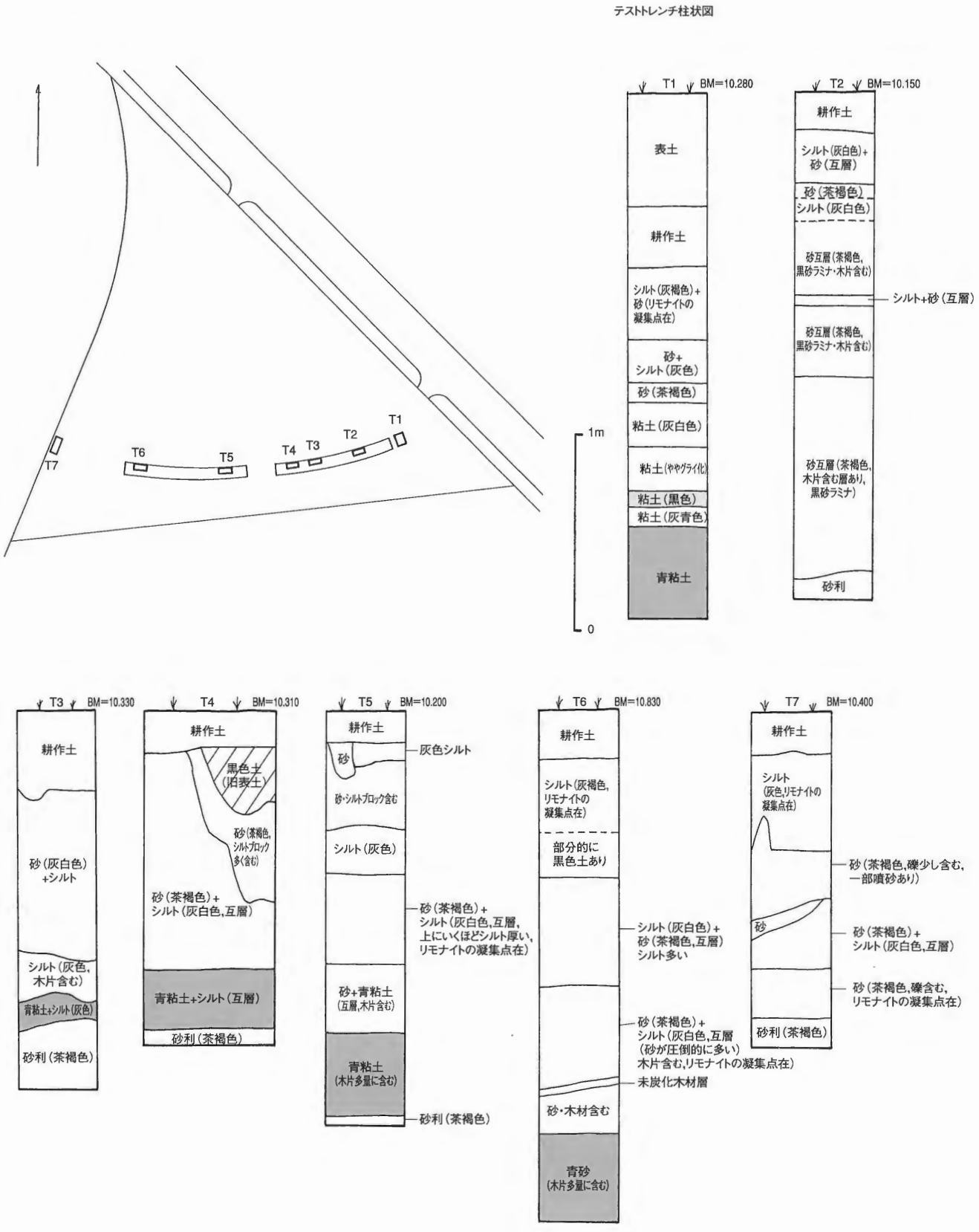


図25　国際交流会館家族棟新営工事予定地
試掘調査区平面図



I-4　平成9年度に実施した試掘調査

1．先端科学技術共同研究センター新営工事予定地

調査日時　平成9年5月6日，7日
調査面積　700 m²
調 査 区　農学部附属第二農場内

調査予定地は農学部附属第二農場の南側に位置し，実験農場として使用されている箇所である．

この地点は，平成4年度に実施した北大構内の赤外線カラー航空写真による旧河川等の判読調査から，旧河川跡内に位置していると判断されていた．

調査方法

調査予定区内に南北に3箇所，東西に1箇所のテストトレンチを設定し，重機による掘り下げを行った．また，部分的に2箇所の深掘りを行った．

調査結果

T1・T2ともに，現地表下30～60 cmまでは，耕作による撹乱を受けていた．その直下は細砂混じりの茶褐色シルト層，灰褐色シルト・粘土の互層で，上部の一部を除き河川関連の堆積層，その下位はグライ化したシルト・粘土層（やや大粒の砂混じる）となる．現地表下2.65 mまで掘り下げ堆積状況を検討したが，河川の止水域の青色還元性堆積層が続き，構内基本層序でいうIII，IV，Vの各層が完全に欠落している．つまり，航空写真判読の結果にみられるように，この部分は旧河川の堆積層で埋められていた．

また，耕作土より下位の層準から掘り込まれた溝跡が確認されている．ただし遺物は発見されず，溝跡の時代も特定できなかった．（図26）

2．理学部校舎新営工事予定地（大学院理学部研究部）

調査日時　平成8年5月9日～12日，19日，20日
（第一次調査）
調査面積　760 m²
調 査 区　理学部遺伝子実験施設前（北側）

調査方法

調査予定地には既設の建物等があり，これらを避け，南北に3箇所と東西に2箇所のテストトレンチを設定し重機による掘り下げを行った．また，必要に応じて各テストトレンチの部分に8箇所の深掘りも行った．

調査結果

遺構・遺物は検出されなかった．

調査区の基本的な層序は以下のとおりである．（第27-29図）

1層：現地表下90 cm前後までは撹乱層，
2層：10～20 cm前後の黒色土層（旧表土），構内　基本層序のI層に対比できる・
3層：60 cm前後の茶褐色シルト層，下部はやや粘性が強くなる．この間に二枚の炭層が不連続に点在し，下部に白色粘土層が入る．（構内基本層序II層）
4層：灰褐色シルト・砂層が20 cm前後，（構内基本層序III層）
5層：白色粘土層が10 cm前後，（構内基本層序IV　層）
6層：60 cm前後のグライ化した粘土層とシルト・砂の互層となる．（構内基本層序V層）
7層：灰色粘土層（構内基本層序VI層）

3層，4層の黒色土層中からは，未分解の腐植土が多く，炭化材片はわずかであった．また，地区によっては，同層は水酸化鉄と酸化鉄が混じった褐鉄の沈着物が多く包含していた．（図27・28）

3．理学部校舎新営工事予定地（大学院理学部研究部）

調査日時　平成8年7月28日（第二次調査）
調査面積　210 m²
調 査 区　理学部旧2号館跡西側

調査方法

調査対象地は，旧2号館の跡地で，撹乱を受けていた．調査予定地外にテストトレンチを南北に1箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

遺構・遺物は検出されなかった．

現地表下2.3 mまで掘り下げ，堆積層の観察を行った．第一次調査の堆積状況と変わらず，顕著な変化は見られなかった．（図29）

4．医学部附属病院液化貯蔵糟設置予定地

調査日時　平成9年11月4日
調査面積　51 m²
調 査 区　医学部附属病院パワーセンター北側

調査方法

調査区にトレンチを南北に1箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

調査対象地の約2/3は，共同溝設置の工事で破壊されていた．現地表下2.5 m前後まで掘り下げ，堆積層の観察を行ったが，遺構・遺物は検出されなかった．(図30)

5．理学部共同利用実験棟新営工事予定地

調査日時　平成8年12月5日（第三次調査）
調査面積　1,875 m²
調 査 区　理学部旧2号館跡地

調査方法

調査区は旧2号館跡地にあたり，調査対象区のほとんどは建物による破壊を受けている箇所である．撹乱を受けていない地区に3箇所テストトレンチを設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

第一次，第二次調査の堆積状況と同様，顕著な変化は認められなかった．

遺構・遺物は検出されなかった．(図27-29)

図26　先端科学技術共同研究センター新営工事予定地

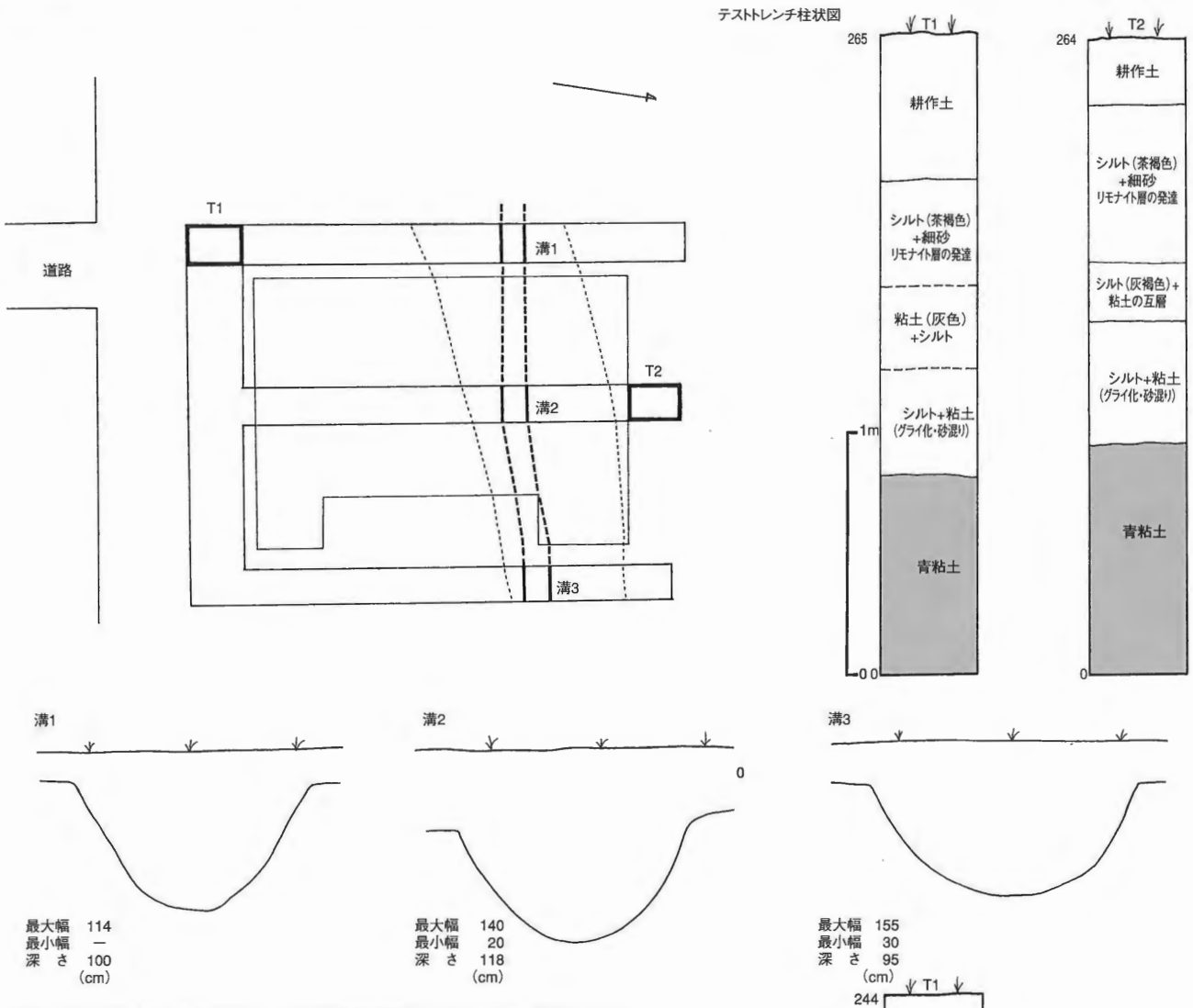


図27　理学部校舎新営工事予定地（大学院理学部研究部）

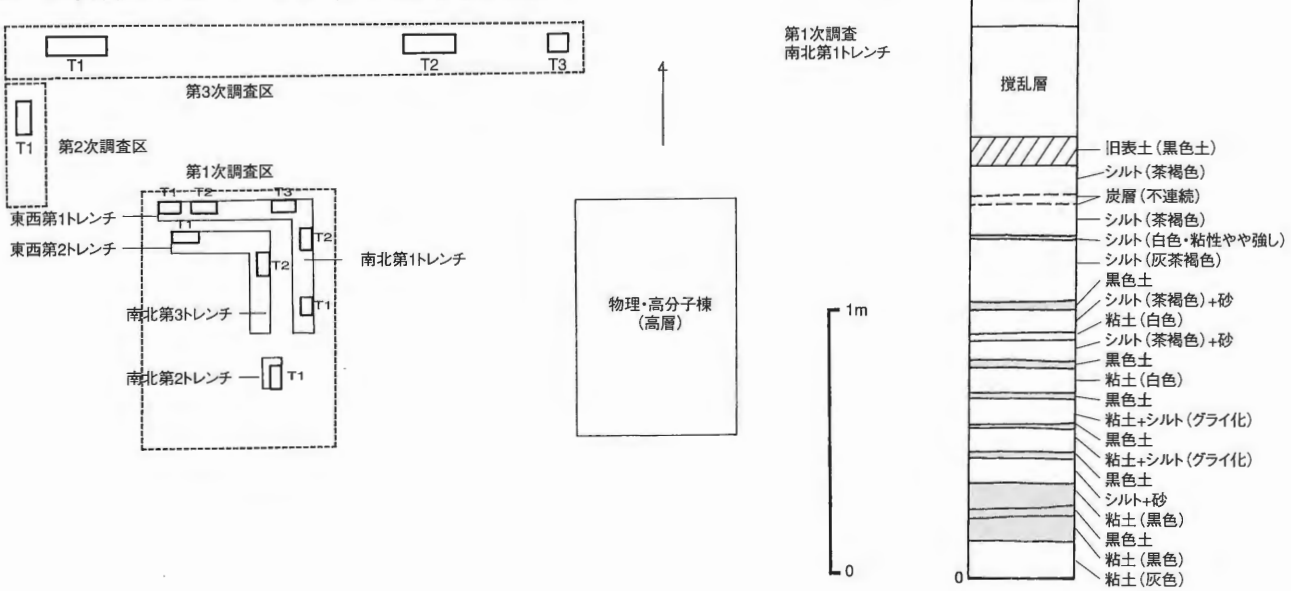


図28　理学部校舎新営工事予定地（大学院理学部研究部）（つづき）

テストトレンチ柱状図

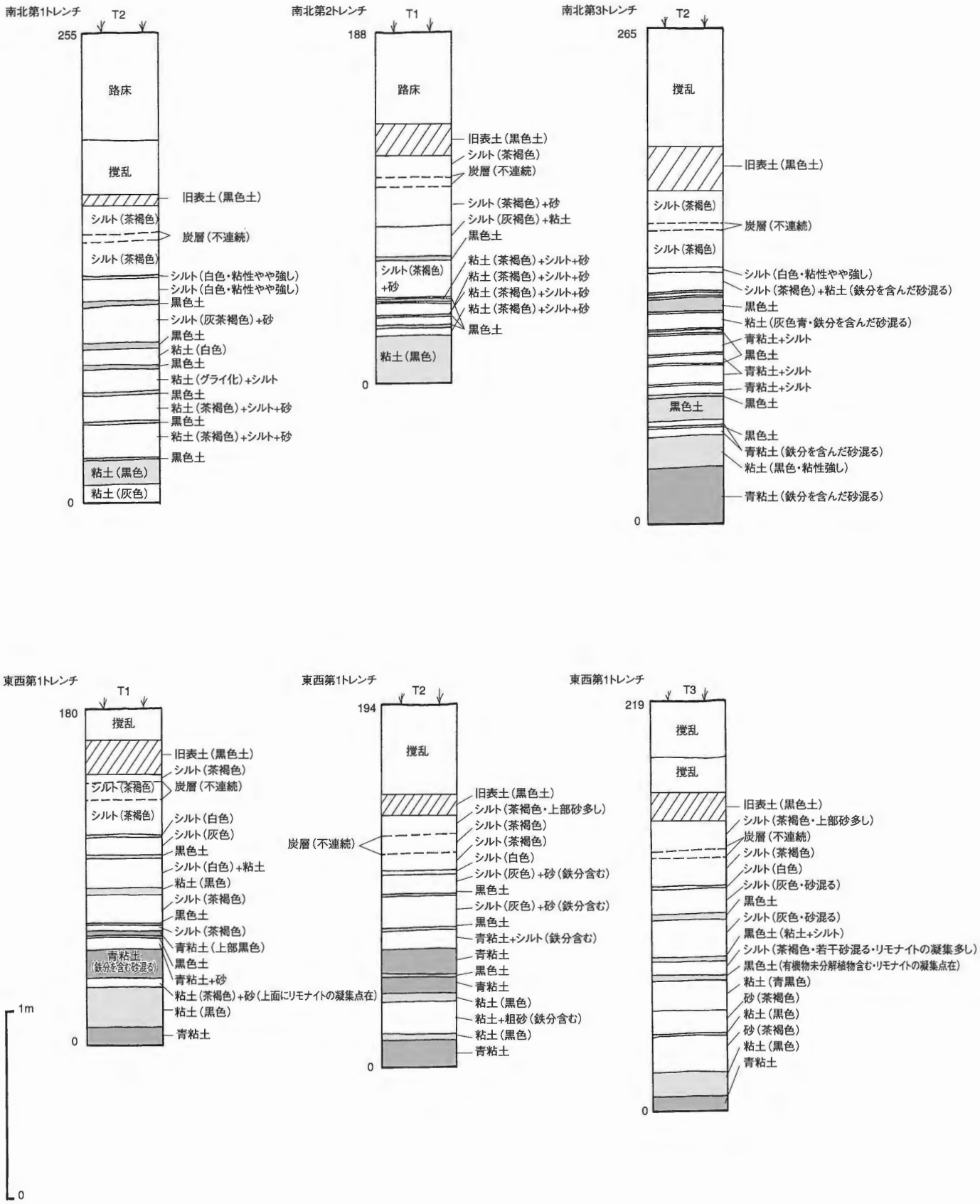


図29　理学部校舎新営工事予定地（つづき）

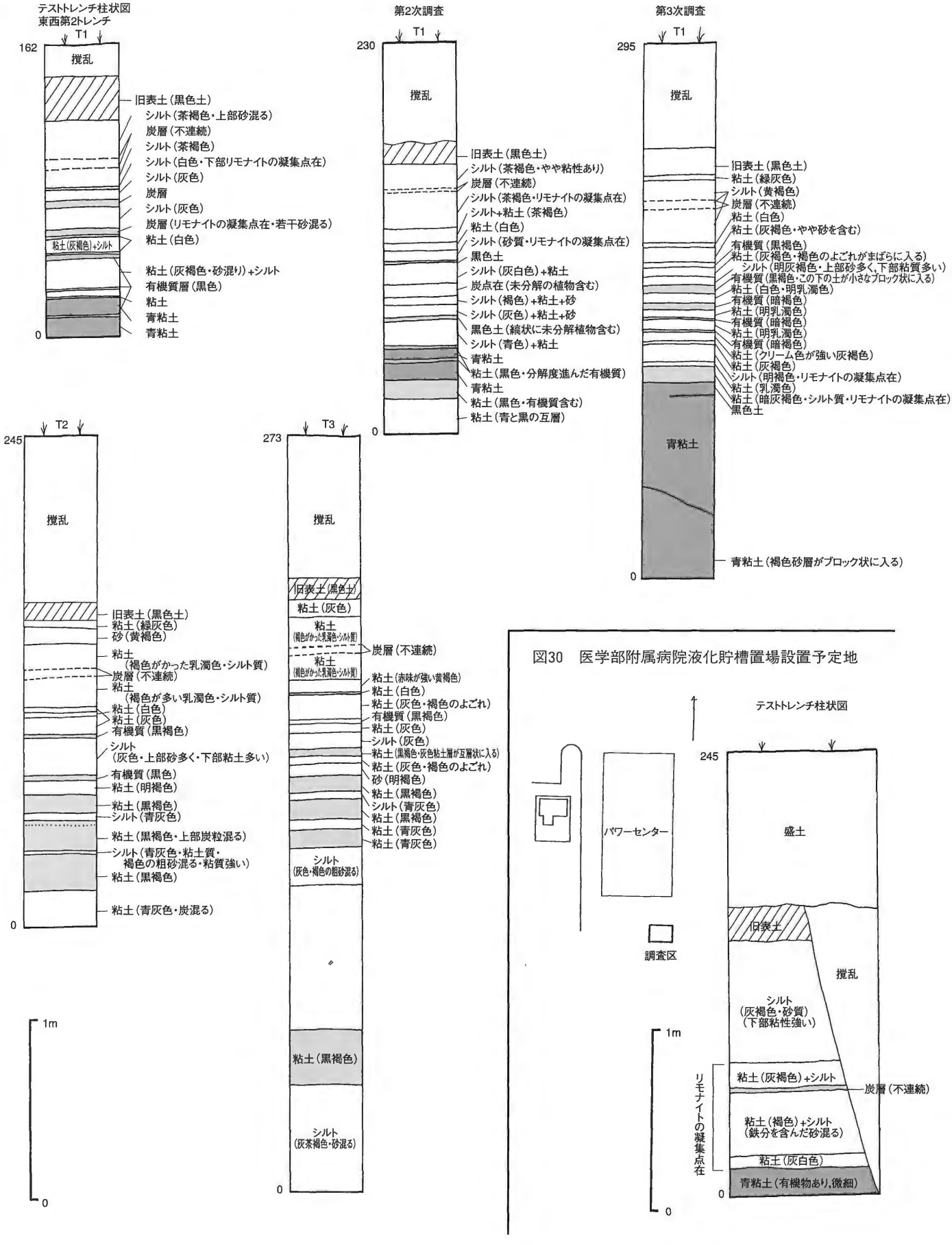


図30　医学部附属病院液化貯槽置場設置予定地

I-5　平成10年度に実施した試掘調査

1．総合メディア交流棟新営工事予定地

調査日時　平成10年8月10日
調査面積　1,340 m²
調 査 区　高等機能開発総合センター南側

調査方法

調査区は附属図書館北分館と高等教育機能開発総合センターE棟の間で，現在は樹木林になっている箇所である．調査区内には樹木や地下埋設物などがあるため，それらを避けてテストトレンチを4箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

各テストトレンチの上部の大部分は，河川堆積層で埋められ，擦文時代の包含層は確認できなかった．また，現地表下2.5 m前後の黒色粘土層の下位は青粘土化しており，未分解の有機質層（ピート層）と粘土層の互層となる．各テストトレンチとも，現地表下3.5 m前後まで掘り下げたが堆積状況に顕著な変化が見られないので，調査を打ち切った．

調査所見

遺物・遺構は検出されなかった．

この地区の中央道路よりの部分で厚い砂層が検出されたが，これは隣接する学生部福利施設「はるにれ」建設の際の試掘調査では検出されておらず，それ以前の調査でも薬学部薬品庫用地で検出されたに留まる．この砂層が構内基本層準のどこに位置するのか明らかでない．(図31)

2．獣医学部焼却炉上屋新設予定地

調査日時　平成10年8月11日
調査面積　257 m²
調 査 区　獣医学部敷地内

調査方法

建物新設予定地内にテストトレンチを3箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

遺物・遺構は検出されなかった．

各テストトレンチの上部は，地下埋設物などの撹乱を受けていた．現地表下1.5～2.0 mの範囲に文化層と思われる2枚の炭化物層が確認されたので，人力による精査を行った．さらに現地表下2 mのところに炭化物土層が4枚検出された．その下は厚さ約5 cmの有機質層(木材含む)，青粘土層となる．各テストトレンチとも現地表下3.2 m前後まで掘り下げたが，堆積状況に顕著な変化が見られないので調査を打ち切った．(図32)

3．工学部研究実験棟新営工事予定地

調査日時　平成10年8月12日,13日
調査面積　1,481 m²
調 査 区　工学部敷地内

調査方法

建物新設予定地は，現在，取り壊し予定の建物，地下埋設物などの障害物があるために，それらの支障をさけながら5箇所にテストトレンチを設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

遺構・遺物は検出されなかった．

各テストトレンチの現地表下1 m前後は埋設物，埋め土などによる撹乱層であった．現地表下1.8 m前後に黒色粘土層が検出され，多量の炭化物の集積が確認されたので人力による精査を行った．さらに現地表下4 m前後まで掘り下げたが，グライ化した粘土とシルト・砂の互層となり，その下は砂礫層となる．堆積状況に顕著な変化が見られないので，調査を打ち切った．(図33)

4．医学部附病院消防用防火水槽新設予定地

調査日時　平成10年10月22日
調査面積　81 m²
調 査 区　医学部敷地内

調査方法

建物新設予定地内にテストトレンチを1箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果

遺構・遺物は検出されなかった．

現地表下1m前後まではガスの埋設管などで撹乱を受けていた．さらに3m前後まで掘り下げたが，既設物周辺の砂が崩落したため，調査を打ち切った．(図34)

5．医学部附属病院自家発電装置上屋新設予定地

調査日時　平成10年10月22日
調査面積　110m²
調 査 区　医学部附属病院パワーセンター北側

調査方法
建物新設予定地内にテストトレンチを南北に1箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果
遺構・遺物は検出されなかった．
土壌堆積の保存状態は比較的良く残っていた．現地表下0.5〜1mの範囲に構内基本層序のⅠ層（旧表土)が確認され，さらに現地表下1〜2.6mの範囲に3枚の黒色土層が検出され，いずれも上面に炭化物の集積が見られる．それぞれ，基本層序のⅢ・Ⅳ・Ⅴ層に対比できよう．現地表下3mからは青粘土層となり，4mまで掘り下げたが，堆積状況に変化が見られず，調査を打ち切った．(図34)

6．総合メディア交流棟工事に伴う樹木の移植

調査日時　平成10年10月30日
調査面積　33.8m²
調 査 区　農学部附属第一農場苗場

総合メディア交流棟新営工事に伴い，樹木を他地区に移植することとなった．

調査方法
樹木移植予定地内にテストトレンチを東西に1箇所設定し，重機による掘り下げを行い，部分的に2箇所の深掘りを行った．

調査結果
遺構・遺物は検出されなかった．
深掘1，2の箇所に現地表下2m前後まで掘り下げ土層堆積の観察を行った．耕作土の直下はシルト層と細砂が堆積し，部分的に炭化物が混じる．その下位は粗砂と小礫の混じる砂礫層となり調査を打ち切った．深掘2も同様の堆積層であった．(図36)

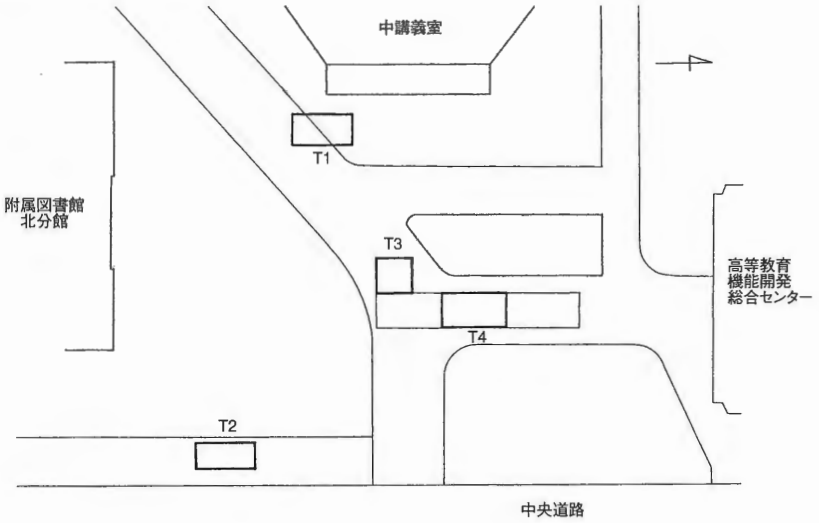
7．総合メディア交流棟工事に伴う樹木の移植

調査日時　平成10年10月30日
調査面積　11m²
調 査 区　学生部福利施設（はるにれ）南西角

調査方法
樹木移植予定地内にテストトレンチを東西に1箇所設定し，重機による掘り下げを行った．

調査結果
遺構・遺物は検出されなかった．
現地表下4.8mまで掘り下げ土層堆積の観察を行った．約1mの盛土層に覆われていた．盛土層の直下に黒色土層（旧表土層）が確認され，その下位は河川洪水の堆積層で埋められ，現地表下3mの位置からは流木が検出された．洪水堆積層の下位にはシルト層と粘土層の互層となり，その直下には未分解の有機質層（ピート層）が確認され，以下，青粘土層となる．堆積状況に顕著な変化が見られないので，調査を打ち切った．(図35)

図31　総合メディア交流棟新営工事予定地



テストトレンチ柱状図

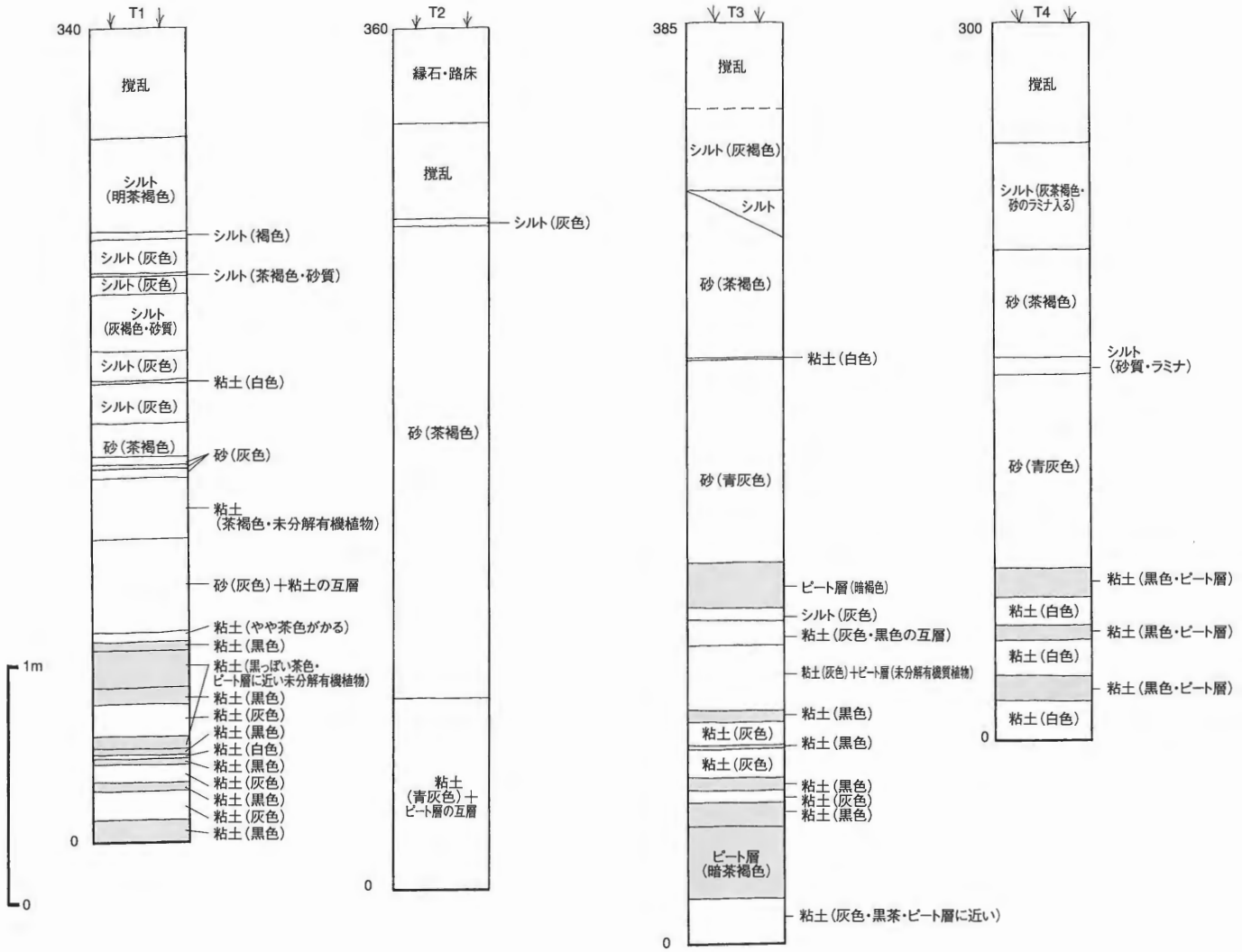
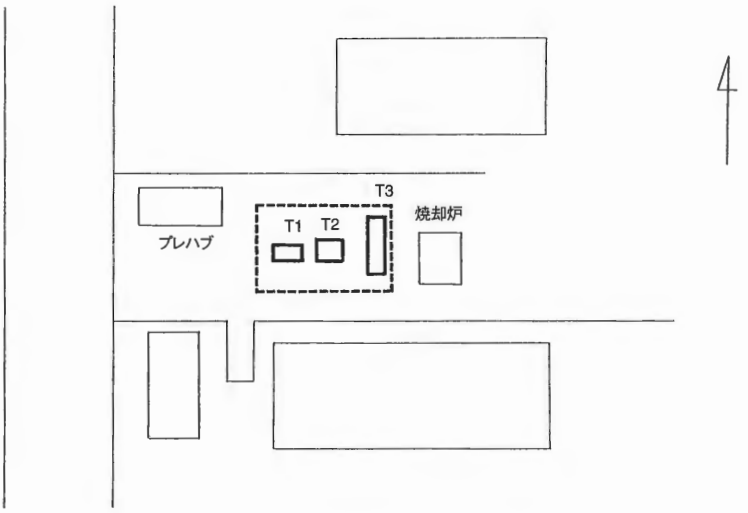


図32　獣医学部焼却炉
上屋新設予定地



テストトレンチ柱状図

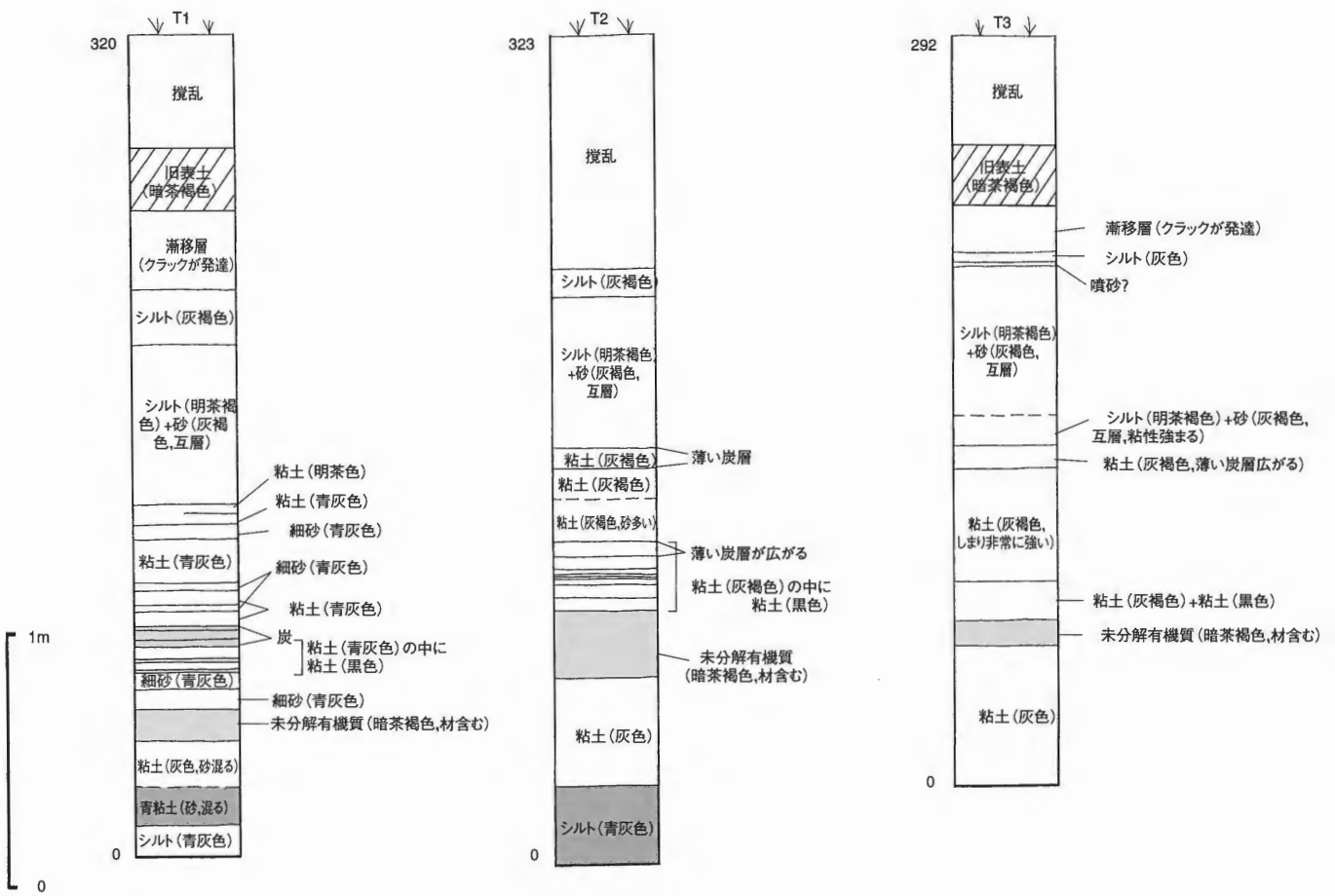
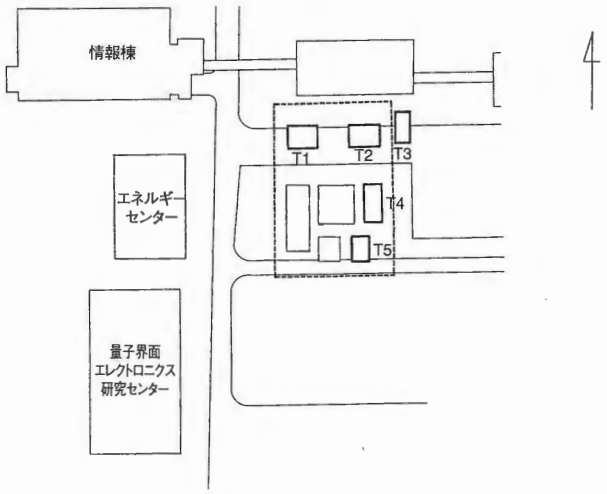


図33　工学部研究実験棟
新営工事予定地



テストトレンチ柱状図

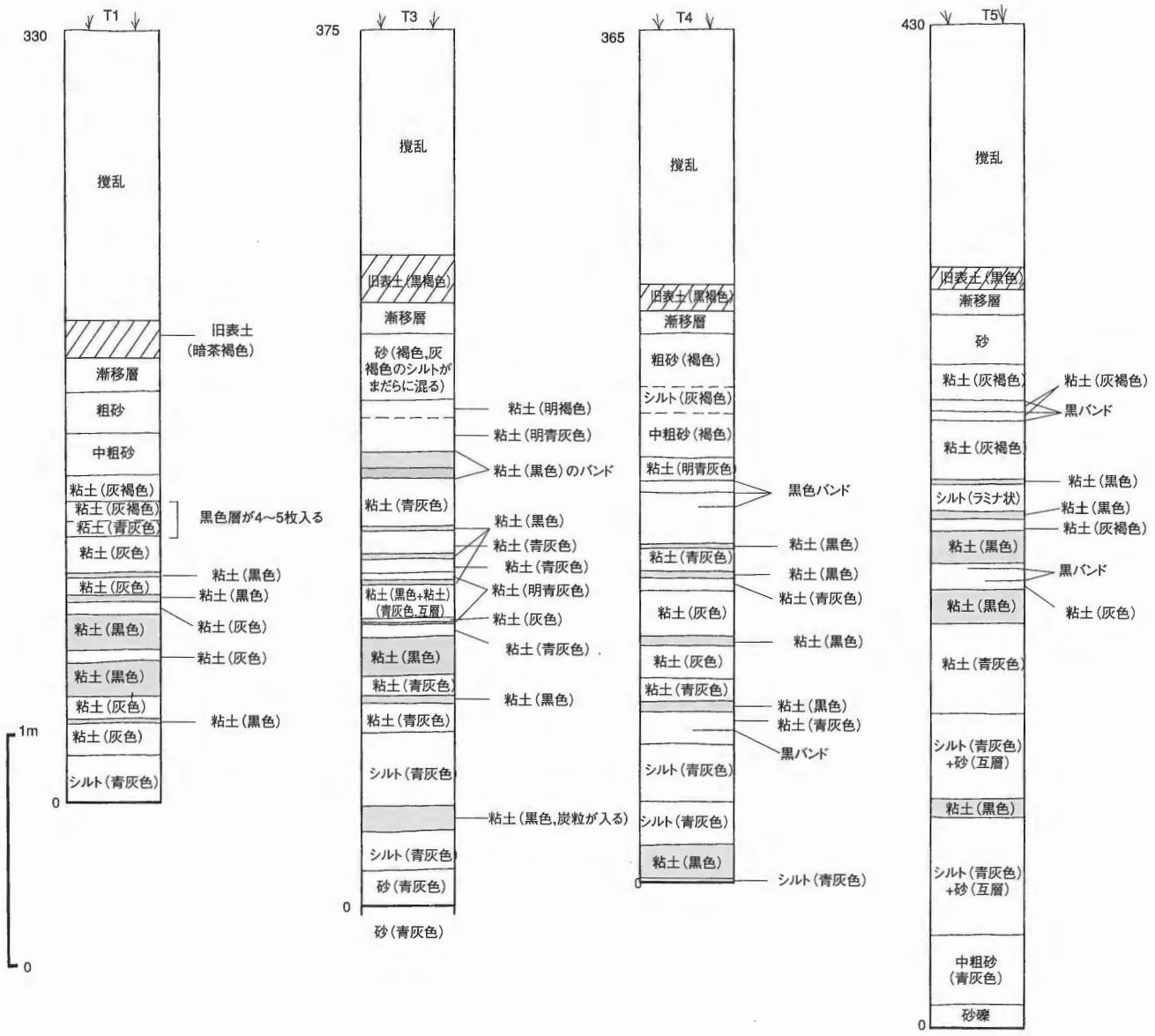


図34　医学部附属病院
消防用防火水槽新設予定地・
医学部附属病院自家発電装置上屋新設予定地

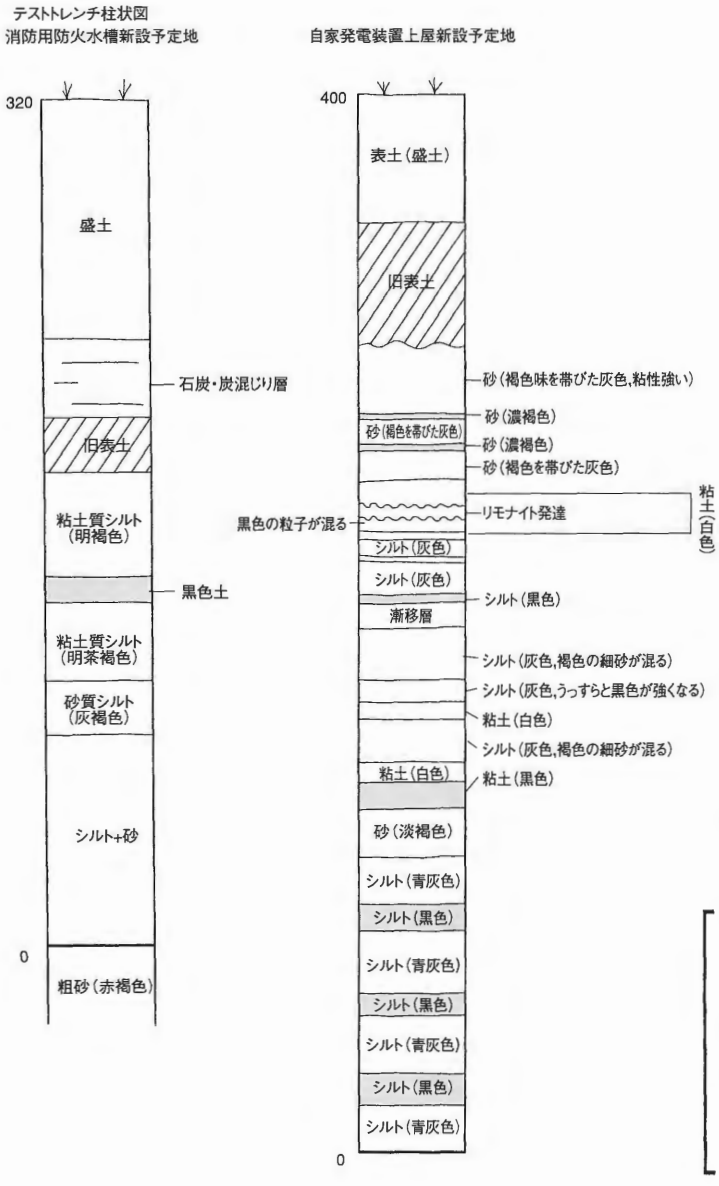


図35　総合メディア交流棟工事に伴う樹木の移植
学生部福利施設（ハルニレ）

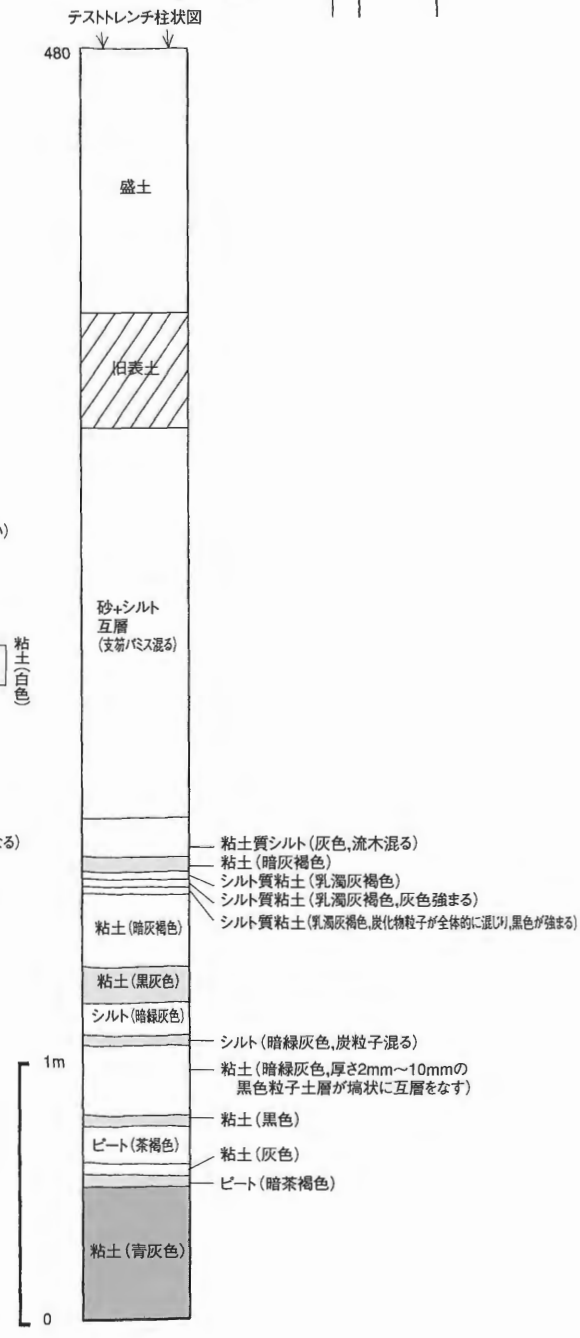
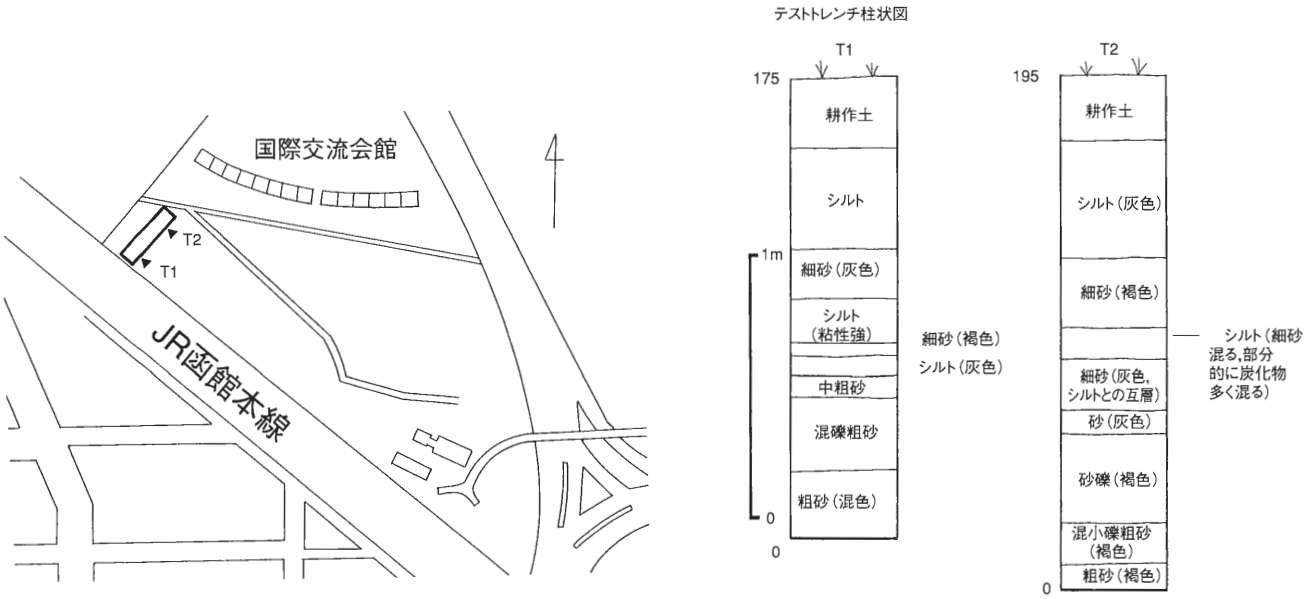


図36　総合メディア交流棟工事に伴う樹木の移植（農学部附属第Ⅰ農場苗場）



付編-1　北海道大学札幌団地構内埋蔵文化財関係調査リスト　平成7年～10年度（1995-4-1～1999-3-31）

表1　北海道大学札幌団地構内埋蔵文化財関係調査リスト

調査日時	工事名称・地点	調査の種類	調査面積	時代	遺構・遺物	備考
'95 4・17～4・18	北海道大学地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地	試掘調査	700m²	擦文	土器片10点	図3・4・37・38
'95 5・29～6・8	北海道大学地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地	発掘調査	700m²	擦文	土器破片103点，紡錘車破片1点，礫6点 焼土1箇所，小ピット1箇所	図3・4・37・38
'95 4・19～4・20	北海道大学工学部パワーセンター新営工事予定地	試掘調査	1,100m²	― ― ―	遺構・遺物なし	図5・6
'95 4・21	北海道大学工学部実験棟増築工事予定地	試掘調査	900m²	― ― ―	遺構・遺物なし	図7
'95 4・21	北海道大学医学部附属病院中央診療棟新営工事予定地	試掘調査	30m²	― ― ―	遺構・遺物なし	図8
'95 4・24～4・25	北海道大学国際交流会館新営工事予定地：農学部附属農場三角地	試掘調査	1,100m²	?	表面採集黒曜石剝片他24点 土器片1点	図9・10・11
'95 6・12～6・17	同地区	試掘調査		?	土器破片1点，黒曜石剝片他9点 テストトレンチ3箇所，畝跡（粗起し）	れき条跡(昭和48-50) 図9・10・11
'95 8・21～8・22	北海道大学薬学部校舎改修（プレハブ）新営工事予定地	試掘調査	1,000m²	擦文	土器破片6点，礫3点	図12・39
'95 8・22	北海道大学薬学部動物舎新営工事予定地	試掘調査	200m²	― ― ―	遺物・遺構なし	図12
'95 8・14	北海道大学生協前駐車場簡易舗装工事	立会		― ― ―	盛り土の範囲　遺物・遺構なし	
'95 10・18	北海道大学薬学部動物舎電気・ガス管埋設工事	立会		― ― ―	遺物・遺構なし	
'95 10・23～10・28	北海道大学地球環境科学研究科研究棟ガス管埋設工事	立会		― ― ―	遺物・遺構なし	
'95 10・18～10・31	北海道大学基幹整備給水管埋設工事：農学部附属第一農場	立会		― ― ―	砂混じりシルト層 遺構・遺物なし	
'95 10・24	北海道大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟新営工事予定地	試掘調査	600m²	― ― ―	4箇所テストトレンチのうち3箇所河川内T-3のみ大地上の堆積物層確認．5枚も黒バンド層確認，精査したが遺構・遺物なし	樽前a火山灰層確認 図13・14
'95 10・25	北海道大学獣医学部校舎新営工事予定地	試掘調査	30m²	― ― ―	湖沼堆積物層の直下位は青粘土層 遺構・遺物なし	図15
'95 10・25～10・27	北海道大学学生部福利施設新営工事予定地：第二体育館南西側	試掘調査	500m²	― ― ―	盛土約1.70cm．(旧表土削平し盛り土) 河川堆積層で埋められている． 遺構・遺物なし	樽前a火山灰層確認 図16・17
'95 11・20	北海道大学農学部附属農場実験実習棟新営工事予定地	試掘調査	180m²	― ― ―	遺構・遺物なし	図18
'95 11・1～12・13	北海道大学基幹整備給水設備工事：モデルバーン・馬術部・パワーセンター地点	立会		― ― ―	遺構・遺物なし	
'95 12・12～12・15	北海道大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟給排水工事	立会		― ― ―	遺構・遺物なし	
'96 1・12～1・24	北海道大学札幌団地情報ネットワーク設備工事：附属図書館北分館・高等教育機能開発総合センター・獣医学部・電子科学研究所地点	立会		― ― ―	遺構・遺物なし	
'96 4・4～4・6	北海道大学基幹整備給水設備工事：農学部附属第一農場	立会		― ― ―	遺構・遺物なし	
'96 4・4～4・6 '96 6・6	北海道大学工学部パワーセンター給排水・電気・ガス埋設工事	立会		― ― ―	遺構・遺物なし	
'96 4・8～4・10	北海道大学基幹整備共同溝設置予定地：工学部パワーセンター地点	試掘調査	200m²	― ― ―	テストトレンチ4箇所 遺構・遺物なし	図19
'96 5・8	北海道大学工学部新世代先端材料研究実験棟新営工事予定地	試掘調査	500m²	― ― ―	遺構・遺物なし	図20・21

調査日時	工事名称・地点	調査の種類	調査面積	時代	遺構・遺物	備考
'96 5・9～5・10	北海道大学低温科学研究所研究棟新営工事予定地	試掘調査	800m²	――	遺構・遺物なし	図22・23
'96 5・11	北海道大学基幹整備共同溝設置予定地：低温科学研究所地点	試掘調査	200m²	――	遺構・遺物なし	図24
'96 5・18	北海道大学工学部パワーセンター共同溝設置予定地	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 6・1～6・2	北海道大学国際交流会館家族棟新営工事予定地 農学部付属農場三角地	試掘調査	1,000m²	――	遺構・遺物なし	図25
'96 6・6	北海道大学工学部パワーセンター　下水・水道・ガス電気埋設工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 6・19	北海道大学北13条通り新設桝工事	立会		――	埋土の範囲 遺物・遺構なし	
'96 7・1	北海道大学中央道路ガス管新設工事：中央食堂～旧教養部	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 7・23	北海道大学中央道路ガス管新設工事：北13条通り	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 7・23	北海道大学工学部パワーセンター衛生設備工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 7・30	北海道大学獣医学部研究棟ガス設備工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 8・1	北海道大学福利施設学生食堂電気設備工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 8・24	北海道大学工学部パワーセンター下水管埋設工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 8・30	北海道大学福利施設学生食堂給水工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 9・11	北海道大学低温科学研究棟仮設電柱設置工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 9・19	シマバチの巣取り上げ：遺跡保存庭園内	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 9・30～10・2	北海道大学工学部パワーセンター：配水桝工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 10・16	北海道大学基幹整備工事（給水設備）モデルバーン地区	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 11・19	北海道大学農学部附属農場高圧配電線路工事：第一農場	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 12・20	北海道大学外国人宿泊施設給水装置工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'96 12・20	北海道大学農学部附属植物園便所新営工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 3・5	北海道大学自動車部部室取設工事：Bグラウンド西側	立会	45.5m²	――	遺構・遺物なし	
'97 5・6～5・7	北海道大学先端科学技術共同研究センター新営工事予定地：農学部付属第二農場	試掘調査	700m²	――	遺構・遺物なし	図26
'97 5・9～12 5・19～20	北海道大学理学部校舎新営工事予定地（第1次）	試掘調査	760m²	――	遺構・遺物なし	図27・28・29
'97 6・26	北海道大学理学部生物・物理棟　電気設備工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 6・26	北海道大学理学部生物・物理棟　給水工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 7・15	北海道大学獣医学部電気工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 7・28	北海道大学理学部校舎新営工事予定地：旧2号館跡(第2次)	試掘調査	210m²	――	遺構・遺物なし	図27・29
'97 8・20	北海道大学先端科学技術共同研究センター　排水溝工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 9・5	北海道大学先端科学技術共同研究センター　電気設備工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 9・26	北海道大学理学部生物・物理棟　排水工事	立会		――	遺構・遺物なし	

調査日時	工事名称・地点	調査の種類	調査面積	時代	遺構・遺物	備考
'97 10・22	北海道大学先端科学技術共同研究センター　電気設備工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 11・ 4	北海道大学高等教育機能開発総合センター　雨水桝設置工事・駐車場拡幅工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 11・ 4	北海道大学医学部附属病院液化貯槽設置予定地：パワーセンター南側	試掘調査	51m²	――	遺構・遺物なし	図30
'97 11・12	北海道大学経済学部　雨水桝設備工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 11・13	北海道大学恵迪寮周辺環境整備工事　排水管・雨水桝・マンホール・歩道拡幅・水銀灯設置工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 11・18	北海道大学中央交換所東側外灯取り付け工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 11・19	北海道大学恵迪寮周辺外灯設備工事：体育指導センター西側	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 11・20	北海道大学構内道路補修工事：中央図書館前	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 11・25	北海道大学北13条通り　外灯増設工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'97 12・ 4	北海道大学薬学部　自転車置場新設工事	立会	280m²	――	遺構・遺物なし	
'97 12・ 5	北海道大学理学部共同利用実験棟新営工事予定地(第3次)	試掘調査	1,875m²	――	遺構・遺物なし	図27・29
'97 12・10	北海道大学中央交換所　外灯取設工事	立会		――	遺構・遺物なし	
'98 2・27～3・18	北海道大学サクシュコトニ川(大野池)改修工事：貯水槽・水路工事他	立会		――	遺構・遺物なし	
'98 8・10	北海道大学総合メディア交流棟新営工事予定地：図書分館北側	試掘調査	1,340m²	――	遺構・遺物なし	図31
'98 8・11	北海道大学獣医学部　焼却炉上屋新設工事予定地	試掘調査	257m²	――	遺構・遺物なし	図32
'98 8・12～13	北海道大学工学部研究実験棟新営工事予定地	試掘調査	1,481m²	――	遺構・遺物なし	図33
'98 10・22	北海道大学医学部附属病院消防用防火水槽新設工事予定地	試掘調査	81m²	――	遺構・遺物なし	図34
'98 10・22	北海道大学医学部附属病院自家発電装置上屋新設工事予定地：パワーセンター北側	試掘調査	110m²	――	遺構・遺物なし	図34
'98 10・30	樹木移植地：農学部附属第一農場苗圃	試掘調査	33.8m²	――	遺構・遺物なし	図36
'98 10・30	樹木移植地：福利厚生施設(ハルニレ)南側	試掘調査	11m²	――	遺構・遺物なし	図35
'98 11・24～12・14	北海道大学情報ネットワーク設備工事 先端科学技術共同研究センター南側 第二農場施設センター前 獣医学部北側,獣医学部正面,北18条通り歩道(獣医学部前) 高等教育技能開発総合センター西側 工学部工学系RIセンター前 大形計算機センター東側 情報処理教育センター北側	立会		――	遺構・遺物なし	
'98 12・21～'99 1・19	北海道大学附属農場低圧引込ケーブル配線工事 農学部附属第二農場施設南側	立会		――	遺構・遺物なし	

付編-2

表２　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地および薬学部校舎改修（プレハブ）新営工事予定地出土遺物一覧表

地球環境研究棟　出土遺物（試掘調査）

No.	グリッド	出土遺物	層位　備考	計
T1-0	D-1	坏破片　1	I層下部	1
T1-1	D-2	坏口縁部破片 1, 底部破片 1		2
T1-2	D-1	甕底部破片　1		1
T1-3	D-2	坏底部破片　2		2
T1-6	C-1	甕口縁部破片　2		2
T2-1	D-3	坏破片　1		1
T2-2	D-3	甕胴部破片　1		1

土器破片10点

地球環境研究棟　出土遺物（発掘調査）

No.	グリッド	出土遺物	層位　備考	計
001	D-2	鉢底部破片　1	I層下部	1
002	D-2	甕胴部破片　1		1
003	D-2	甕口縁部破片　1		1
004	D-2	甕胴部破片　1		1
005	D-2	甕胴部破片　1		1
006	C-2	甕口縁部破片　1		1
007	D-2	甕胴部破片　1		1
008	D-1	甕口縁部破片　3		3
009	D-1	甕胴部破片　1		1
010	D-2		礫破片　1	
039	C-2	甕口縁部破片　1		1
040	B-3	甕胴部破片　1		1
041	C-2	甕胴部破片　1		1
042	C-3	坏底部破片　1		1
043	B-2	甕胴部破片　1		1
044	B-2	甕胴部破片　1		1
045	B-2	甕口縁部破片　2		2
046	B-2	甕胴部破片　1		1
047	B-2		礫　1	
048	B-2	甕胴部破片　1		1
049	B-2	甕胴部破片　3		3
050	B-2	甕胴部破片　1		1
051	B-2	甕胴部破片　3		3
052	B-2	甕胴部破片　1		1
053	B-2	甕胴部破片　1		1
054	B-2	甕胴部破片　1		1
055	B-3	甕胴部破片　1		1
056	B-2		礫　1	
057	B-5	坏破片　3		3
058	B-2		陶磁器破片　1	
059	B-2	甕破片　1		1
060	B-2	甕破片　1		1
061	B-2	鉢破片　2		2
062	B-2	甕破片　1		1
063	B-2	甕破片　1		1
064	C-4	坏破片　2		2
065	C-4		陶磁器破片　1	
066	C-4	甕口縁部破片　1		1
011	D-2	甕底部破片　1		1
012	D-2	甕胴部破片　1		1
013	D-1		陶磁器破片　1	
014	C-2	坏破片　1		1
015	C-1		礫　1	
016	C-2	坏破片　1		1
017	B-2	甕底部破片　1		1
018	B-1	甕口縁部破片　1		1
019	B-1	甕胴部破片　1		1
020	B-1	甕底部破片　1		1
021	B-2	甕胴部破片　1		1
022	B-1	甕胴部破片　1		1
023	B-1	甕底部破片　1		1
024	B-2	坏破片　1		1
025	D-3	甕胴部破片　1		1
026	D-3	甕胴部破片　3		3
027	D-3	甕胴部破片　1		1
028	D-3	甕口縁部破片　1		1
029	D-3	甕胴部破片　2		2
030	D-3	小型甕胴部破片　1		1
031	D-3	甕口縁部破片　1		1
032	D-2	甕口縁部破片　3		3
033	D-2	紡錘車　1		1
034	C-3	甕胴部破片　2		2
035	D-2	鉢底部破片　1		1
036	C-3	甕口縁部破片　1		1
037	C-3		礫　1	
038	C-3		鉄製品破片　1	
067	D-4	坏破片　1		1
068	C-3	鉢破片　2		2
069	C-3		礫破片　1	
070	D-4	坏破片　1		1
071	D-3	甕破片　1		1
072	D-3	甕口縁部破片　1		1
073	B-1	鉢破片　1		1
074	B-4	鉢破片　1		1
075	B-4	鉢破片　1		1
076	C-4	坏破片　1		1
077	C-4	坏破片　1		1
078	C-4	坏破片　1		1
079	C-4	坏破片　1		1
080	B-4	甕口縁部破片　5		5
081	B-4	甕口縁部破片　1		1

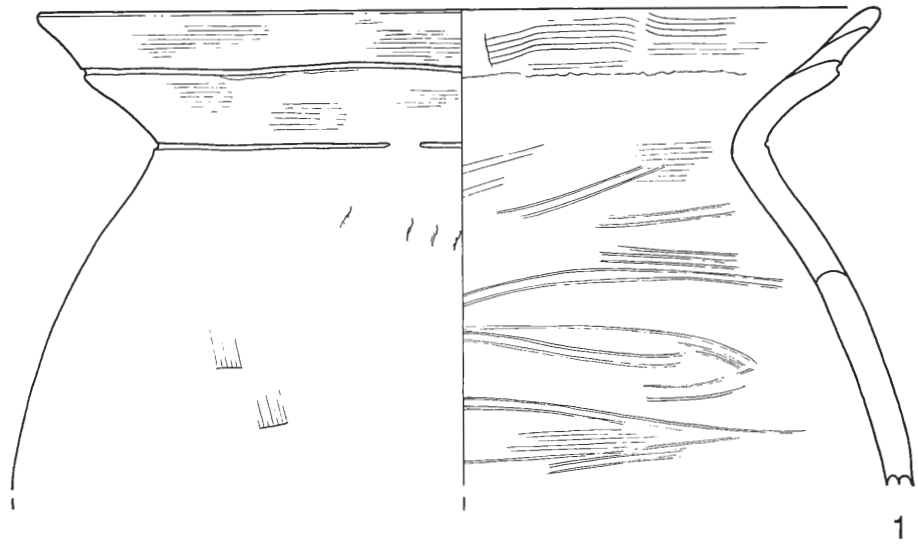
土器破片 103 点，紡錘車 1 点，陶磁器破片 3 点，鉄製品破片 1 点，礫 6 点

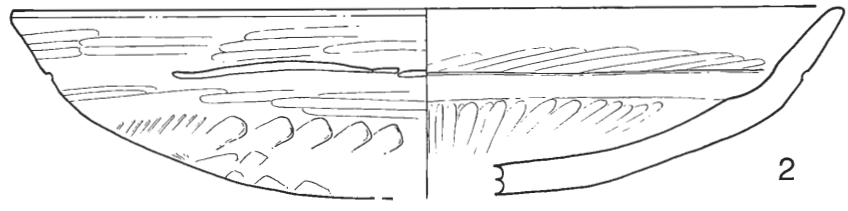
薬学部校舎（プレハブ）新営工事予定地出土遺物

トレンチ No.	遺物 No.	出土遺物	備　考
T 2	1	礫　1 点	使用痕(くぼみ)あり
	2	礫　1 点	
T 4	1	土器破片 1 点	甕破片
	2	土器破片 1 点	甕破片
	3	土器破片 1 点	坏破片内黒
T 5	1	土器破片 1 点	
	2	土器破片 1 点	
	3	土器破片 1 点	
	4	礫　1 点	
	5	陶磁器破片 1 点	

土器破片 6 点，礫 3 点，陶磁器破片 1 点

図37　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地出土遺物(1)





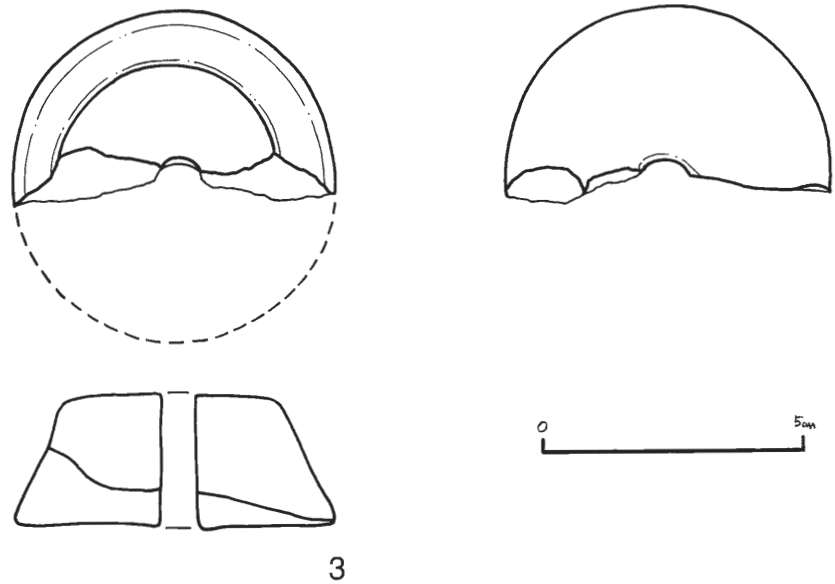


図38　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地出土遺物(2)

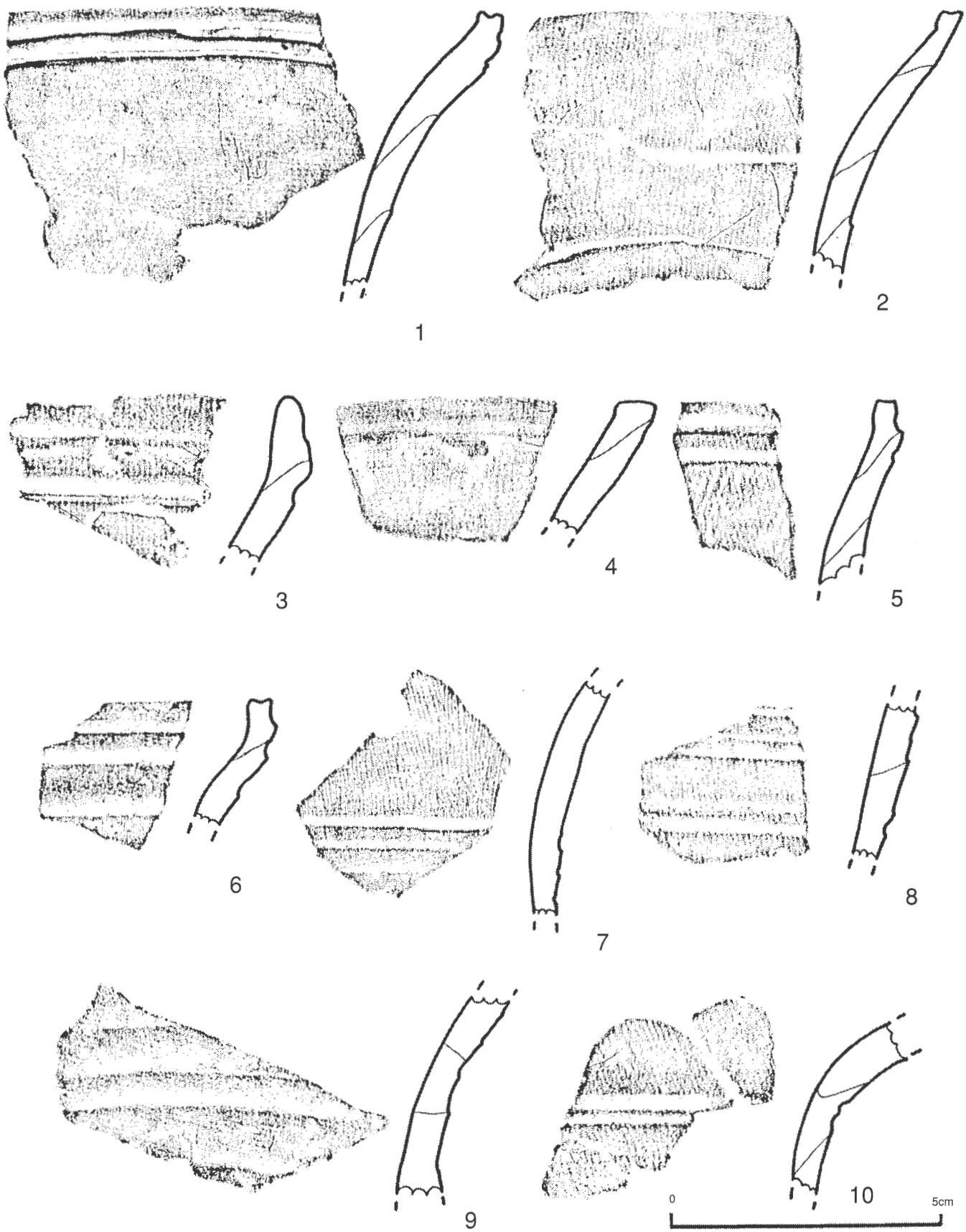
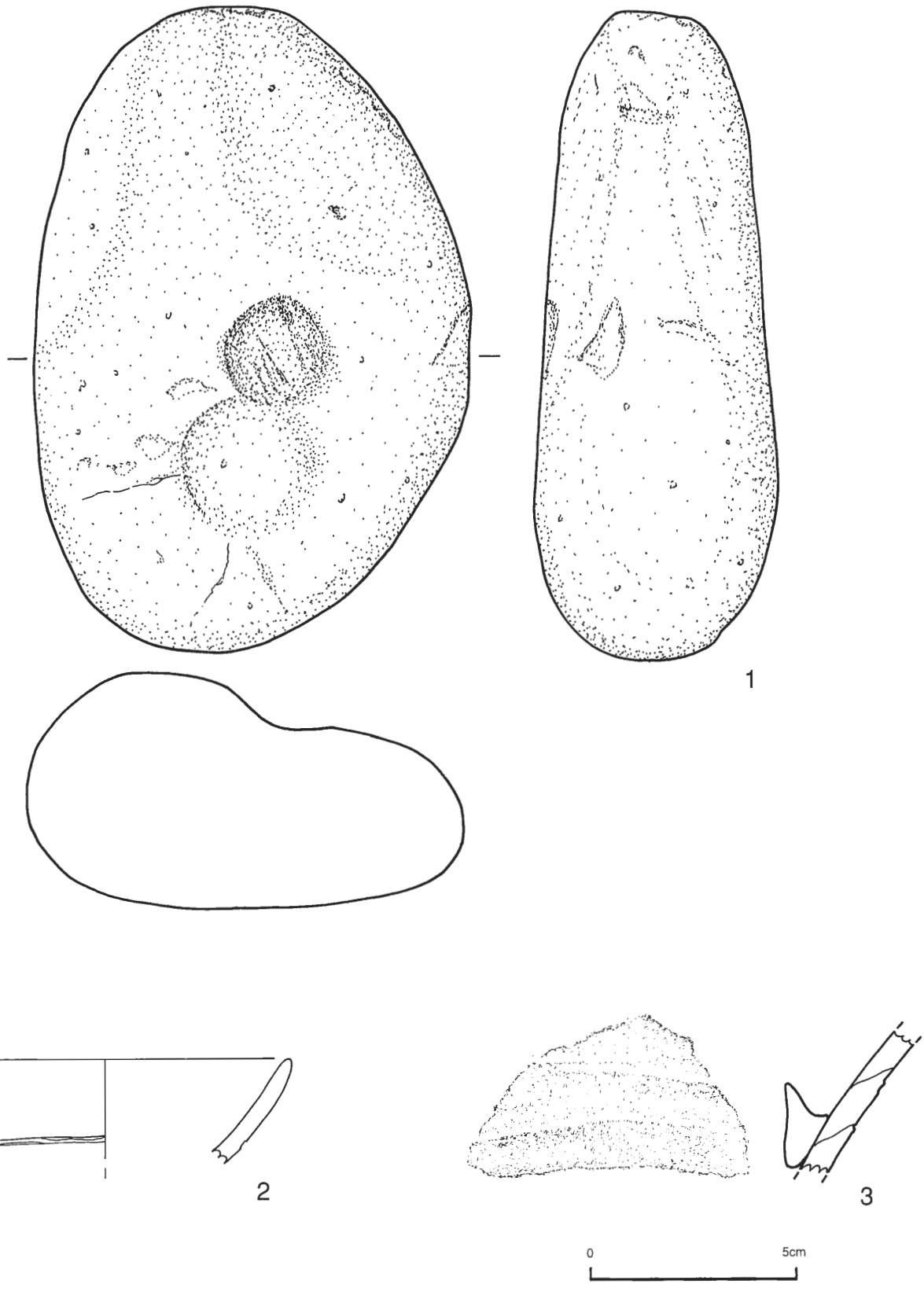


図39　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地出土遺物



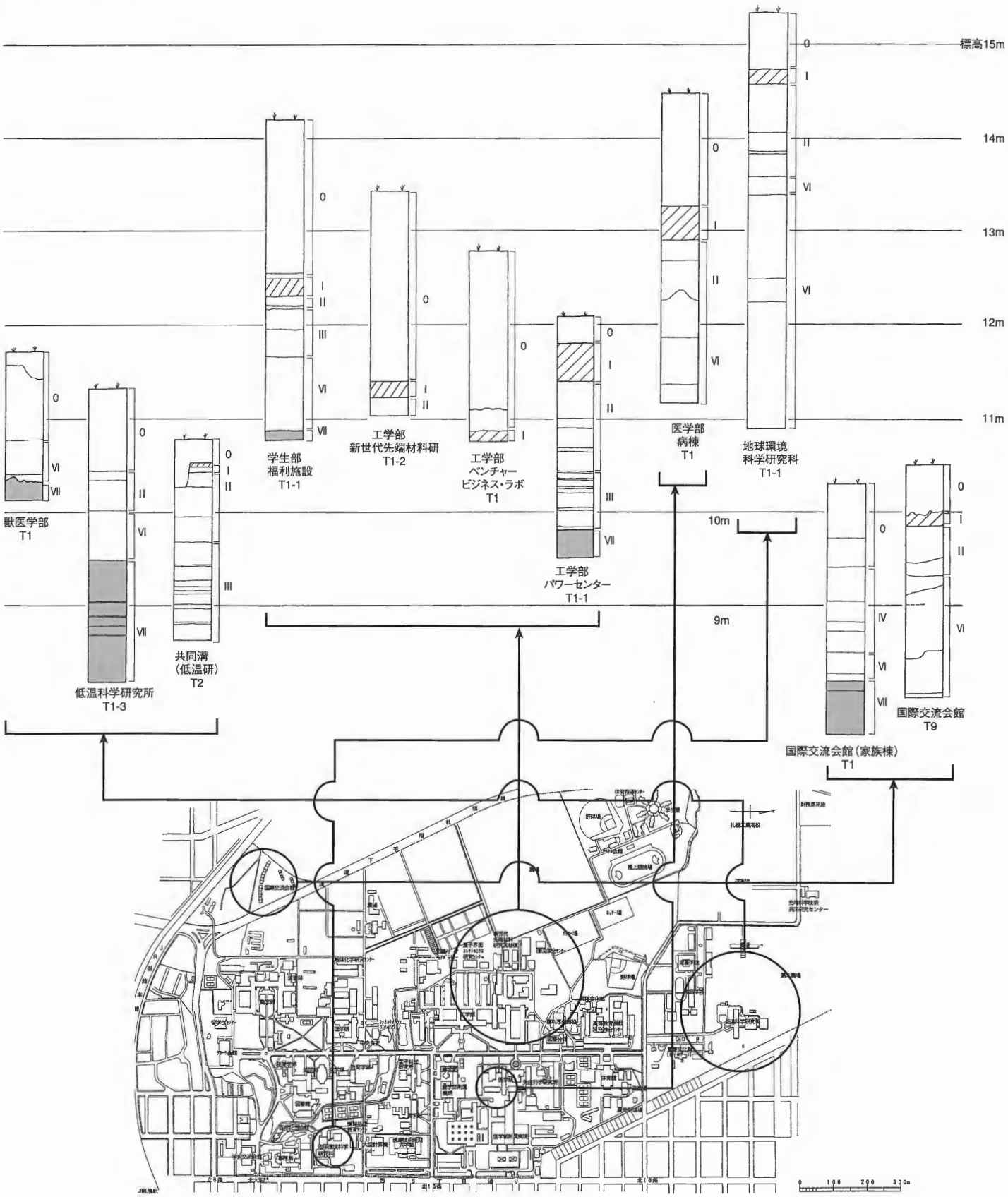
付編-3

表３　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地内出土遺物観察表

No.	図版 No.	器種	部位	調　整（外　面）	調　整（内　面）	器壁厚	成形上の特徴	胎　土	色　調	焼成	備　考
1	図37-１	甕	口縁～頸部	口縁部：横位ナデ，頸部：縦位・斜位ナデ・ハケメ	横位・斜位ナデ・ハケメ	4.9mm	内傾接合	細砂をやや多く含む	淡褐色	良好	２本の沈線，段を形成，口縁内面黒色
2	図37-２	坏	口縁～底部	口縁部：横位ミガキ，底部：斜位ハケメ→斜位ナデ	口縁部：斜位ミガキ，底部：縦位ミガキ	7.0mm		細砂をやや多く含む	淡褐色	良好	１本の沈線，段を形成，内面黒色処理
3	図37-３	紡錘車	半分残存	ナデ	ナデ	25.2mm		精良なマトリクスに粗さを少量含む	暗灰褐色	良好	側面は縦位のミガキ
4	図38-１	甕	口縁部	縦位・斜位ハケメ→横位ナデ	横位ナデ→横位ミガキ	7.6mm	内傾接合	細砂をやや多く含む	淡褐色	良好	２本の沈線，段を形成，口唇端部に１本の沈線
5	図38-２	甕	口縁部	横位ナデ→縦位ハケメ	横位ナデ・ハケメ	6.1mm	内傾接合	細砂をやや多く含む	淡褐色	良好	１本の沈線，段を形成
6	図38-３	甕	口縁部	横位ナデ	横位ナデ	6.7mm	内傾接合	細砂を多く含む	淡褐色	やや悪	２本の沈線
7	図38-４	甕	口縁部	縦位ハケメ→横位ナデ	横位ナデ	6.4mm	内傾接合	細砂を少量含む	淡褐色	良好	１本の沈線，口唇端部ハケメ調整
8	図38-５	甕	口縁部	縦位・斜位ハケメ→横位ナデ	横位ハケメ→横位ナデ	7.3mm	内傾接合	細砂をやや多く含む	淡褐色	良好	２本の沈線
9	図38-６	甕	口縁部	横位ナデ	横位ナデ	5.0mm	内傾接合	細砂をやや多く含む	褐色	良好	３本の沈線，口唇端部に１本の沈線
10	図38-７	甕	口縁～頸部	縦位ハケメ→横位ナデ	横位ハケメ→横位ナデ	4.7mm		細砂をごく少量含む	淡褐色	良好	３本の沈線
11	図38-８	甕	口縁～頸部	横位ナデ	横位ハケメ	5.2mm	内傾接合	細砂をやや多く含む	褐色	やや悪	３本の沈線
12	図38-９	甕	口縁～頸部	横位ハケメ→横位ナデ	横位ナデ→横位ハケメ	7.5mm		細砂を多く含む	淡褐色	やや悪	３本の沈線
13	図38-10	甕	口縁～頸部	縦位・斜位ハケメ	縦位・横位ハケメ	8.2mm	内傾接合	細砂を多く含む	褐色	やや悪	１本の沈線，沈線原体は凹形，内面激しく摩滅

付編-4

図40　土層対比図（基本層序との対比）



付編-5

表４　北大構内の遺跡一覧表

1999・3・31現在

遺跡名	時代	出土遺物	出土遺構	報告書 号・頁	調査年度
[１] サークル会館遺跡 （課外活動共用施設地点）	擦文時代	出土遺物総数　880点 復元土器数－甕形土器２個体，壺形土器３個体，坏形土器11個体 （土器破片837点，黒曜石製剝片14点，スクレイパー１点，砥石１点，） （礫27点）	竪穴住居址３基 焼土６箇所	１号 P12～35	1980年 （昭和55年）
[２] 応用電気研究所前遺跡	擦文時代	出土遺物総数　36点 （土器破片６点，　玉石30点）	竪穴住居址２基	１号 P７～９	1980年 （昭和55年）
[３] 環境整備（共同溝）遺跡 （埋蔵文化財調査室南側地点）	擦文時代	出土遺物総数　104点 復元土器数－坏形土器１個体，小型鉢１個体 （土器破片64点，紡錘車１点，　黒曜石製剝片16点，　礫23点）	竪穴住居址１基	２号 P24～40	1981年 （昭和56年）
[４] サクシュコトニ川遺跡 （恵迪寮地点）	擦文時代	出土遺物総数　58673点 復元土器数－甕形土器88個体，須恵器壷形１個体 坏形土器75個体，すり鉢形土器１個体 （土器破片16453点，紡錘車14点，　支脚７点，　土製玉17点，　） （フイゴ羽口２点） 黒曜石製石器 （石錐１点，スクレイパー17点，石核３点，ピエス・エスキーュ２点，剝片・砕片48点） （石斧２点，　敲石１点　，礫104点，　骨角器１点，　鉄製品１点） 「テシ」出土遺物総数　約2000点 （木製ヤス８点　，木槌１点，　杭ほか約2000点） 動物・植物遺体出土遺物総数　約40000点 動物遺体 （サケ科魚類の椎骨ほか16128点） 植物遺体 （コメ19粒，オオムギ約2000粒，コムギ約600粒，アワ，キビ，ヒエ属，アズキ，ウリ科，シソ属，アブラナ科，アサ属，タデ属，ニワトコ属，マタタビ属，ガンコウラン属ほか）	竪穴住居址５基 土壙６箇所 集石址７箇所 焼土及び炭化物集積址 139箇所 柵列（テシ） 魚類を捕獲するための施設	サクシュコトニ川遺跡 ［１］本文編 ［２］図版編	1981年～1982年 （昭和56年～57年）
[５] 農学部附属植物園遺跡 （温室地点）	擦文時代	出土遺物総数　30点 （土器破片18点，　黒曜石製剝片４点，　礫８点）	竪穴住居址１基	３号 P22～25	1982年 （昭和57年）
[６] 中講堂遺跡	擦文時代	出土遺物総数　874点 （土器破片668点，　黒曜石製剝片206点）	竪穴住居址２基	５号 P10～13	1984年 （昭和59年）
[７] ポプラ並木東地区遺跡	続縄文時代	出土遺物総数　7143点 復元土器数－甕形土器４個体，注口土器１個体 片口土器１個体 （土器破片379点，黒曜石製石鏃２点，石核11点，スクレイパー92点） （不定形石器４点，剝片・砕片5644点） （滑石製平玉750点，ガラス玉３点，琥珀４点） （原石９点，分割礫100点，　磨石１点，　石皿１点，　有孔礫２点） （礫41点，礫剝片76点，その他24点）	土壙墓７基 焼土２箇所 小ピット２箇所	５号 P15～101	1984年 （昭和59年）
[８] 工学部核磁気共鳴装置研究棟遺跡	擦文時代	出土遺物総数　201点 （土器破片159点，　黒曜石剝片・砕片42点）	焼土５箇所	６号 P19～23	1986年 （昭和61年）

遺　跡　名	時　代	出　土　遺　物	出土遺構	報告書 号・頁	調査年度
[9] 学生部体育館遺跡	続縄文時代	**出土遺物総数　1051点** 復元土器数－深鉢4個体，注口土器3個体 （土器破片569点　黒曜石剝片石器11点　，剝片・砕片396点，） （石斧5点，敲石7点，礫10点，　動物・植物遺体53点）	焼土4箇所	6号 P24～47	1986年 （昭和61年）
[10] 職員厚生施設遺跡	擦文時代	**出土遺物総数　75点** （土器破片6点，　黒曜石剝片1点，　礫68点）	竪穴住居址1基	7号 P12～14	1987年 （昭和62年）
[11] 中央道路共同溝（第4工区）地点遺跡	縄文時代晩期 ～続縄文時代	**出土遺物総数　1746点** 復元土器数－甕形土器9個体 （土器破片1356点，黒曜石製スクレイパー4点，エンドスクレイパー2点） （楔形石器1点，石核1点，剝片167点） （銛先4点，ハンマーストーン7点，礫204点） 動物遺体 サケ科魚類（歯，椎骨），シカ（角片），鳥類，　ほ乳類 エゾヒグマ（指骨） 植物遺体 タデ属，ナス科，ガンコウラン属，マタタビ属，ニワトコ属，キハダ属，ブドウ属，コナラ属，クルミ属	遺物包含文化層 Ⅴ－1層 Ⅴ－2層 Ⅴ－3層 Ⅴ－4層	10号 P8～17	1993年 （平成5年）
[12] ゲストハウス地点遺跡	続縄文時代	**出土遺物総数　882点** ［Ⅴ－1層］ 復元土器数－甕形土器4個体 （土器破片163点，黒曜石製楔形石器1点，剝片2点） （礫10点） 動物遺体 サケ科魚類（歯，椎骨），ニシン科魚類（椎骨），ほ乳類 植物遺体 ニワトコ属 ［Ⅴ－2層］ 復元土器数－甕形土器4個体 （土器破片501点，黒曜石製楔形石器3点，石鏃3点，石核1点） （ピエス・エスキーュ13点，エンドスクレイパー1点，剝片137点） （ハンマーストーン2点，礫45点） 動物遺体 サケ科魚類（歯，椎骨），シカ（指骨），ほ乳類 植物遺体 アサ属，タデ属，マタタビ属，ニワトコ属，ブドウ属，クルミ属	遺物包含文化層 Ⅴ－1層－焼土1箇所 Ⅴ－2層－焼土2箇所	10号 P18～36	1994年 （平成6年）
[13] 地球環境科学研究科研究棟遺跡	擦文時代	**出土遺物総数　110点** （土器破片103点，　紡錘車破片1点，　礫6点）	焼土1箇所 小ピット1箇所	11号 P9 P14～15	1995年 （平成7年）

出土遺物合計　71805点

復元土器　213個体

遺構総数　199基

竪穴住居址	15基
焼土・炭化物層	160箇所
土壙墓7基	7基
集石址	7箇所
土壙	6箇所
小ピット	3箇所
柵列「テシ」1基	

付編-6

表5　北大構内の遺物出土一覧表

1999・3・31現在

遺物出土地区名	時代	出土遺物	報告書号・頁	調査年度
1－工学部超伝導核磁気共鳴装置建設地区	擦文時代	遺物出土総数　8点 （土器破片6点，黒曜石製ピエス・エスキーュ1点，剝片1点）	1号 P 2～3	1980年 （昭和55年）
2－クラーク銅像脇地区	擦文時代	遺物出土総数　5点 （土器破片5点）	1号 P 6	1980年 （昭和55年）
3－中央食堂前地区	擦文時代	遺物出土総数　5点 （土器破片5点）	1号 P 7	1980年 （昭和55年）
4－理学部生物実験センター建設地区	時期不明	出土遺物総数　1点 （黒曜石製剝片1点）	2号 P12	1981年 （昭和56年）
5－外灯用ケーブル設置地区 （サッカー場東側道路）	擦文時代	出土遺物総数　2点 （土師器破片2点）	2号 P13	1981年 （昭和56年）
6－情報処理教育センター西側地区	擦文時代	出土遺物総数　20点 （土器破片19点，ハンマーストーン1点）	3号 P 7	1982年 （昭和57年）
7－福利厚生施設建設地区 （体育指導センター）	擦文時代	出土遺物総数　1点 （土器破片1点）	3号 P 7	1982年 （昭和57年）
8－医学部附属病院中央診療棟建設地区	続縄文時代	出土遺物総数　1点 （土器底部破片1点）	3号 P 7	1982年 （昭和57年）
9－附属中央図書館建設地区	擦文時代	出土遺物総数　2点 （土器破片2点）	4号 P 6	1983年 （昭和58年）
10－農学部附属演習林実験研究棟建設地区	擦文時代	出土遺物総数　29点 （土器破片26点，　黒曜石製剝片3点）	4号 P12～15	1983年 （昭和58年）
11－薬学部受水槽設置地区	擦文時代	出土遺物総数　50点 （土器破片48点，礫2点），　復元土器－坏形土器1個体	4号 P16～23	1983年 （昭和58年）
12－言語文化部建設地区	擦文時代	出土遺物総数　57点 （土器破片56点，黒曜石製剝片1点）	6号 P11～12	1985年 （昭和60年）
13－遺伝子実験施設建設地区	時期不明	出土遺物総数　2点 （土器小破片2点）	6号 P12～13	1985年 （昭和60年）
14－農学部附属演習林研究棟建設地区	時期不明	出土遺物総数　2点 （黒曜石製剝片2点）	6号 P11	1985年 （昭和60年）
15－農学部附属植物園事務所建設地区	擦文時代	出土遺物総数　95点 （土器破片50点，　黒曜石製剝片・砕片45点）	6号 P15～17	1985年 （昭和60年）
16－医学部附属大学病院パワーセンター建設地区	続縄文時代	出土遺物総数　8点 （土器破片7点，礫破片1点）	7号 P10～11	1987年 （昭和62年）
17－共同溝－理学部北側道路地点	続縄文時代	出土遺物総数　2点 （土器破片2点）	7号 P 7～9	1987年 （昭和62年）
18－教養部食堂増築地点	擦文時代	出土遺物総数　24点 （土器破片13点，礫11点）	8号 P10～11	1989年 （平成元年）
19－薬学部周辺整備 （応用電気研究所前）地区	擦文時代	出土遺物総数　276点 （土器破片178点，鉄製品破片9点，礫77点，クルミ12点） 復元土器－甕形土器1個体	8号 P16～19	1989年 （平成元年）
20－工学部材料・科学系校舎建設地区	擦文時代	出土遺物総数　158点 （土器破片143点，礫15点）	10号 P47	1992年 （平成4年）
21－農学部附属植物園保存修理 （給排水設備）地区	時期不明	出土遺物総数　1点 （黒曜石製スクレイパー1点）	10号 P49	1993年 （平成5年）
22－留学生センター建設地区	擦文時代	出土遺物総数　29点 （土器破片9点，黒曜石製剝片2点，礫18点）	10号 P48	1993年 （平成5年）
23－基幹整備共同溝理学部北側地区	続縄文時代	出土遺物総数　70点 （土器破片27点，黒曜石製剝片38点，礫5点）	10号 P49	1993年 （平成5年）
24－陸上競技場改修工事地区	擦文時代	出土遺物総数　3点 （土器破片3点）	10号 P50	1994年 （平成6年）
25－陸上競技場電気配線溝工事地区	擦文時代	出土遺物総数　274点 （土器破片270点，黒曜石製剝片1点，礫3点） 復元土器－坏形土器2個体	10号 P50	1994年 （平成6年）
26－陸上競技場水道管埋設溝工事地区	擦文時代	出土遺物総数　128点 （土器破片127点，礫1点）	10号 P50	1994年 （平成6年）
27－山小屋設置（陸上競技場北側）地区	時期不明	出土遺物総数　1点 （黒曜石製石核1点）	10号 P50	1994年 （平成6年）
28－総合便所新設地区	擦文時代？	出土遺物総数　10点 （土器破片4点，黒曜石製石核1点，剝片5点）	10号 P50	1994年 （平成6年）
29－国際交流会館新営工事地区	時期不明	出土遺物総数　35点 （表面採集　土器破片2点，黒曜石製剝片33点）	11号 P10～11 P18～20	1995年 （平成7年）
30－薬学部校舎改修（プレハブ）工事地区	擦文時代	出土遺物総数　9点 （土器破片6点，礫3点）	11号 P11，21	1995年 （平成7年）
出土遺物合計　1308点 復元土器　4個体				

第II部　考察

1．農場三角地の埋蔵文化財らしき農耕跡地の歴史考察

高井　宗宏

農学研究科生物資源生産学専攻生物生産工学講座
作物生産システム工学分野　教授
（調査当時）附属農場農機具部主任

1　発端と遺構の状況

平成７年の春に北海道大学埋蔵文化財プロジェクト委員から，「北大農場の農耕地を国際交流会館の建物敷地に転用するため，埋蔵文化財の調査を行ったところ，地表から20～60 cmの深さ（土層に傾斜や起伏があって変化）に客土層があり，その下に『プラウで反転したれき条』が樽前山の火山灰層を内挿してほぼ原形通りに発見されたが，札幌農学校開校当初の遺構でないか調査してほしい」との依頼を受けた．

まず始めに「プラウで反転したれき条」について述べる．プラウとは，作物栽培の初めに地表面にある前作や雑草等の残渣物を埋め込み，下層の新たな土を表層に上げて作物種子の発育環境を整える耕転作業機であり，三角推状の滑らかな曲面を持った作業部を土中で走らせて，図１のようにれき土を捻るように反転するものである．この反転されたれき土の列が「れき条」と言うから，課題となる「プラウで反転したれき条」は，図１の右側部の状況になる．なお，プラウの発達と伝播経過は農耕の発展経過と重なり，世界の農耕文化史を考える際の基本農具とされ，プラウを引く動力によって畜力用，スチームトラクタ用，歩行トラクタ用および乗用トラクタ用へと進化してきている．また，札幌農学校は開校当初からアメリカ式畜力農具を利用しているため，「プラウで反転したれき条は農学校当時の遺構」と推察しても矛盾はない．

写真１は発掘された土地の縦断面図であり，雑草の表層から約35 cmは農地の均平化や土地改良のために他の場所から土壌を搬入した客土層である．その下側には図１に示したと同じれき土反転状況が見られ，プラウの

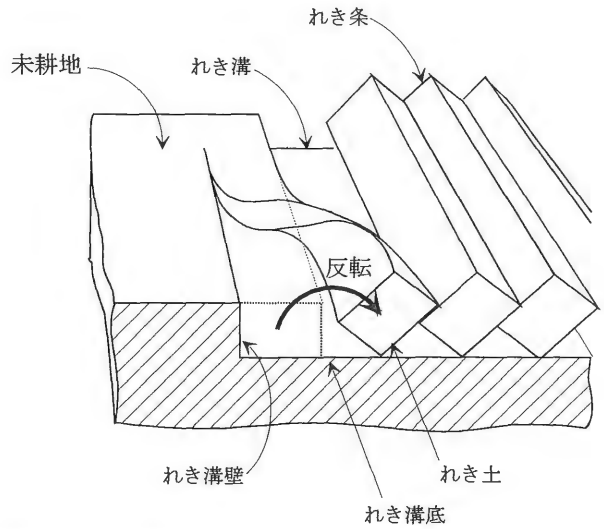


図１　プラウ耕時のれき土の動きとれき条の形態

写真１　検証地のれき土断面

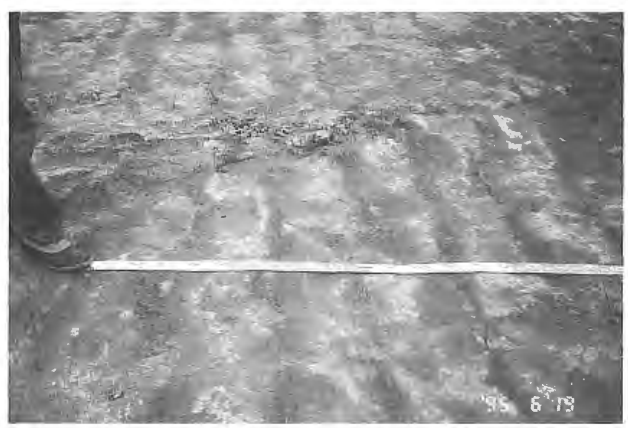


写真２　検証地のれき土平面

耕深(反転層の厚さ，客土による鎮圧相当分を見込まず)が約20 cmであると読み取れる．写真2は上層の客土層を取り除いた水平面を示すが，断面に見られたれき土によって形成するれき条が連続し，かつ，平行に約30 cm間隔に並んでプラウの耕幅が30 cm程度以上（れき土の傾斜を見込む）であることを示しており，両写真から間違いなくプラウ耕の跡であると断定される．なお，写真2の中央部を横に走る溝は，別の掘削断面から簡易暗渠掘削機であるサブソイラの作業跡であるが，客土層を突き破っていて客土後に施工されていると判断され，ほとんど検討に値しない．

したがって，発掘された場所は明らかにプラウ耕の跡であるから，ここではその作業が何時行われたかを特定することになる．

2 今日までの利用管理経過

検証した農地は，札幌市立病院の東側に隣接し，市道下手稲線に面した3角形状の1.5 haの土地であり，下手稲線新設の際に農地を割譲したために分断されて飛び地となった．それ以来，農学部附属農場では「三角地」と呼んでおり，農場管理部を始めとした作物系3部が15年以上畑作試験地として利用している．この土地は，明治9年の札幌農学校開校に当り，クラーク博士の要請によって北海道開拓使が「札幌官園」としていた農地を保管転換し，「農黌園」と名付けて研究教育主体の「第1農場」とした用地の西端に位置しているため，利用経過については札幌農学校の開校期まで遡らねばならない．

A）明治9年から昭和20年

『北大構内の遺跡〔2〕』(1983年)および『北大構内の遺跡〔10〕』(1995年)によると，検証地は河川敷に重なって極めて厳しい場所である．したがって，明治41年の図2および大正7年の図3に示す農場利用図のように，検証地は自然河川と河川敷の荒れ地であった．そのため図に湿地と樹木のマークが書かれて，明治・大正時代は低湿地のままで，ほとんど利用がされていないと考えられる．自然のままに潅木が生え，一部に「クリ」などの(強いて言えば研究用か)小果樹があった程度と推定される．しかし，大正7年の図3と図4に示した昭和7年の図を対比すると，その間に西10丁目から流入して検証地の近くで合流していた川がなくされ，さらにポプラ並木近くに連なっていた川も消されて農地の拡大が進んでいるが，栽培様式は変化がないから，川をなくしたのみで土地が乾燥するまでに至らなかったと考えられる．

次いで，図4で昭和7年と昭和12年を対比すれば，湿地が減少して果樹園が拡大しており，昭和10年頃に農学部本館側から農地として利用が進んだと推定される．しかし，検証地の開畑まで至っていない．この開畑には，旧国鉄函館本線に沿って排水溝が開削され，検証地に流入していた北5条通りから国鉄線の間の水が，他へ排水されて乾燥してきたことと無関係でないと推定されるが，排水溝の開削などの事実経過は未調査である．なお，この時代から次項の戦後までの経過を知るには，伊藤正輔氏（江別大麻在住，昭和11年農学実科卒業）に事情を聴取すれば明確になると言われるが，確認に至っていない．

B）昭和20年から昭和48年まで（田村・八鍬名誉教授に面接聴取）

両名誉教授が聞く限り，検証地は「農場の園芸第1部」の管理地で，両氏が所管の部主任として責任者であったから，昭和48年頃まで確かに管理していたと確認される．田村先生の学生時代からの記憶によると，昭和20年以降は演習林との境界に近い南方に「アンズ」など，調査場所になる北方に「グズベリ」などが起伏のはげしい土地に植えられ，現在の下手稲道路から東は平坦で「リンゴ」が植えられていたという．したがって，検証地をプラウで全面耕耘することはほとんど考えられないと断言された．また，現在のクラーク会館用地一帯にも果樹園があり，昭和33年頃に用地を本部移管するとき，表土を果樹園に運んで客土したが，現在の精密試験圃にいれるのが精一杯で，検証地には客土すら不可能であったから，この時もプラウ耕は行えない状況であったことが確認される．

C）昭和37年から50年ごろ（岡村名誉教授に面接聴取）

岡村先生が農場主任に就任した昭和37年に，農業機械化時代を前提にした農場の基盤整備が計画されたため，図4のような大きな基盤整備計画を立てた．それは逐次実行に移され，昭和42年には全面的に施工されて「農場研究報告12号」に事業経過が報告されている．しかし，検証地は施工対象から外れていて，前述の田村・八鍬両先生も同調して検証地は従前通りであると強調されるから，この時点でも荒地であったと言える．なお，現理学部数理教室等建築物と中央食堂一体にあった第1農場施設は，昭和44年に現在の形態のようにポプラ並木西に移転を余儀なくされている．

D）昭和45年から今日まで(高橋直秀元農場主任および青木元技官に電話聴取)

高橋先生は，次の経過を明言し，青木元技官も間違いないと証言した．昭和47年頃だったと思うが，札幌市より「下手稲通り開設のための用地割譲」依頼が届き，検証地が道路で分断されて飛び地になることが判明した．その後両者間で種々の交渉が行われ，結局依頼通りに割譲して現在の飛び地が出来た．この時，検証土地の利用をしていた園芸第1部は，札幌市に保証要求を行って，余市町に所有している「余市果樹園」の増反と検証地一帯の研究用樹木などの移転を進めたことから，検証地の利用法が失われて高橋農場主任に3角地の利用返上を申しでた．しかし，約1.5 haある検証地はほとんど未整備のため，いずれの部も研究用地として利用することをためらって受け手がなかった．そこで農場主任としての管理責任から，人力で石礫を搬出して利用に努めたが，自在に農業機械で作業するまでに至らないため，1年間は農場の新任職員と学部科目「農場実習」の際に学生にトラクタ運転とプラウ耕の運転実習を行わせる土地に使った．さらに下手稲通りの工事現場で残土が多く出ているのを知って検証地への捨て土を要求し，管理部技官の手で整地して農地に仕上げたところ，現在のように利用可能になった．この整備後から，3つの部で試験地として利用して来たのである．

3　検証結果

検証地は，明治初年から農場用地に含まれているが，実際には低湿地の原野で利用されていなかったと推定される．昭和時代に入って函館本線に沿って排水溝が開削された頃から，検証地は乾燥し始めて徐々に農地化するが，本格的な農地になるのは昭和48年頃の下手稲通り開設の機会に残土を客土してからである．

発掘されたプラウ耕の痕跡は，おそらく昭和48年頃に学生実習で農用トラクタを用いたプラウ耕を行った跡であると判断される．その理由は，残された「れき条」の寸法から，耕深20 cm以上で刃幅30 cm以上のプラウを使用しており，明治期の馬の能力から見て畜力プラウとは考え辛く，トラクタプラウによる作業結果と見られること，さらに一般耕作地であれば，プラウ耕の後にハロー類で砕土整地を行って播種等を行うため，プラウによって形成された「れき条」は少なくとも上半分が破壊混和されねばならないが，発掘結果は攪拌跡がなくてれき条が明確に残っている．すなわち，プラウ耕実習のみで済ませたから，れき条がそのまま残ったのである．また，薄い樽前火山層が破壊されずに「れき条」に挟まっていることから，過去には一度も耕されたことがなく，開闢以来最初のプラウ耕と推察させるものであり，高橋元主任の回顧録を採用するのが妥当である．

次に，プラウ耕跡を覆う上部の客土層は，高橋回顧録を根拠にして，主に周辺農地の心土からなり，下手稲通り開設時の残土を整地したものであるといえる．なお，暗渠排水を施工した痕跡が見られるが，施行時期が客土以降であるため，そこまで調査していない．以上より，発掘された農耕痕跡は昭和48〜50年ごろのれき条跡であると判定する．

4　補足

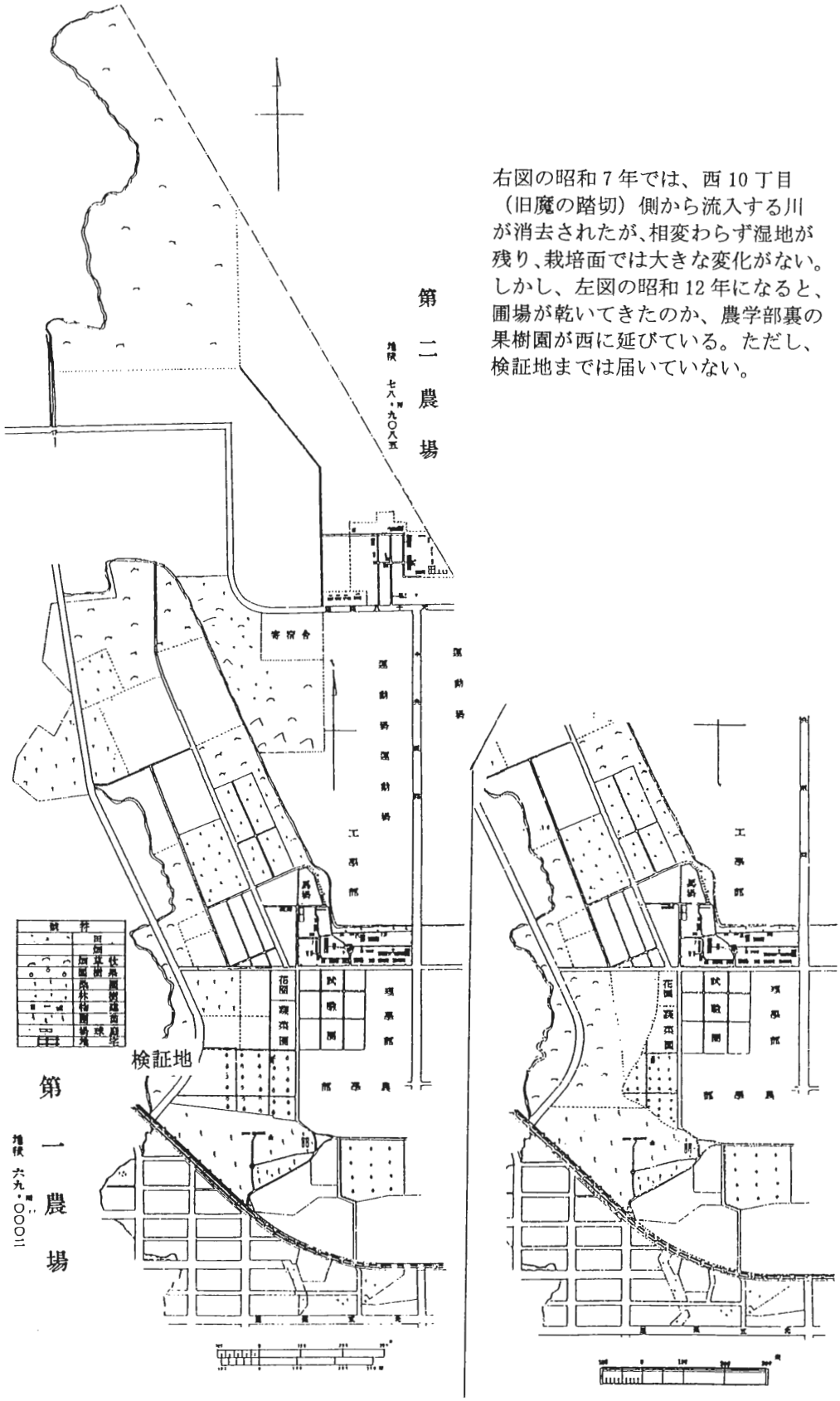
本文では，記述年代をいずれも「年頃」としているが，これらはそれぞれの事業年次を現在のところ特定していないためであり，これらについて農学部附属農場の庶務・会計記録を精査すれば限定できるであろう．また，引用した図は下記のものであり，いずれも北大農学部附属農場で保管する本より収録している．

図2　東北帝国大学農科大学農場演習林植物園一覧　明治41年1月1日現在
図3　東北帝国大学農科大学農場演習林植物園一覧　大正7年1月1日現在
図4　北海道帝国大学農学部附属農場一覧　昭和7年および昭和12年版
図5　昭和37年度概算要求手（別冊）農学部附属農場整備
図6　北大農学部附属農場報告　第19号収録「北大農学部附属農場概要」1974

図2　明治41(1908)年の農場概要図

図３　大正７(1918)年の農場概要図

図4　昭和12(1937)年の農場概要図　右に昭和7(1932)年を一部挿入



右図の昭和7年では、西10丁目（旧魔の踏切）側から流入する川が消去されたが、相変わらず湿地が残り、栽培面では大きな変化がない。しかし、左図の昭和12年になると、圃場が乾いてきたのか、農学部裏の果樹園が西に延びている。ただし、検証地までは届いていない。

図 5　昭和 37(1962)年の農場整備計画図　同 42 年にほぼ計画どおり完成

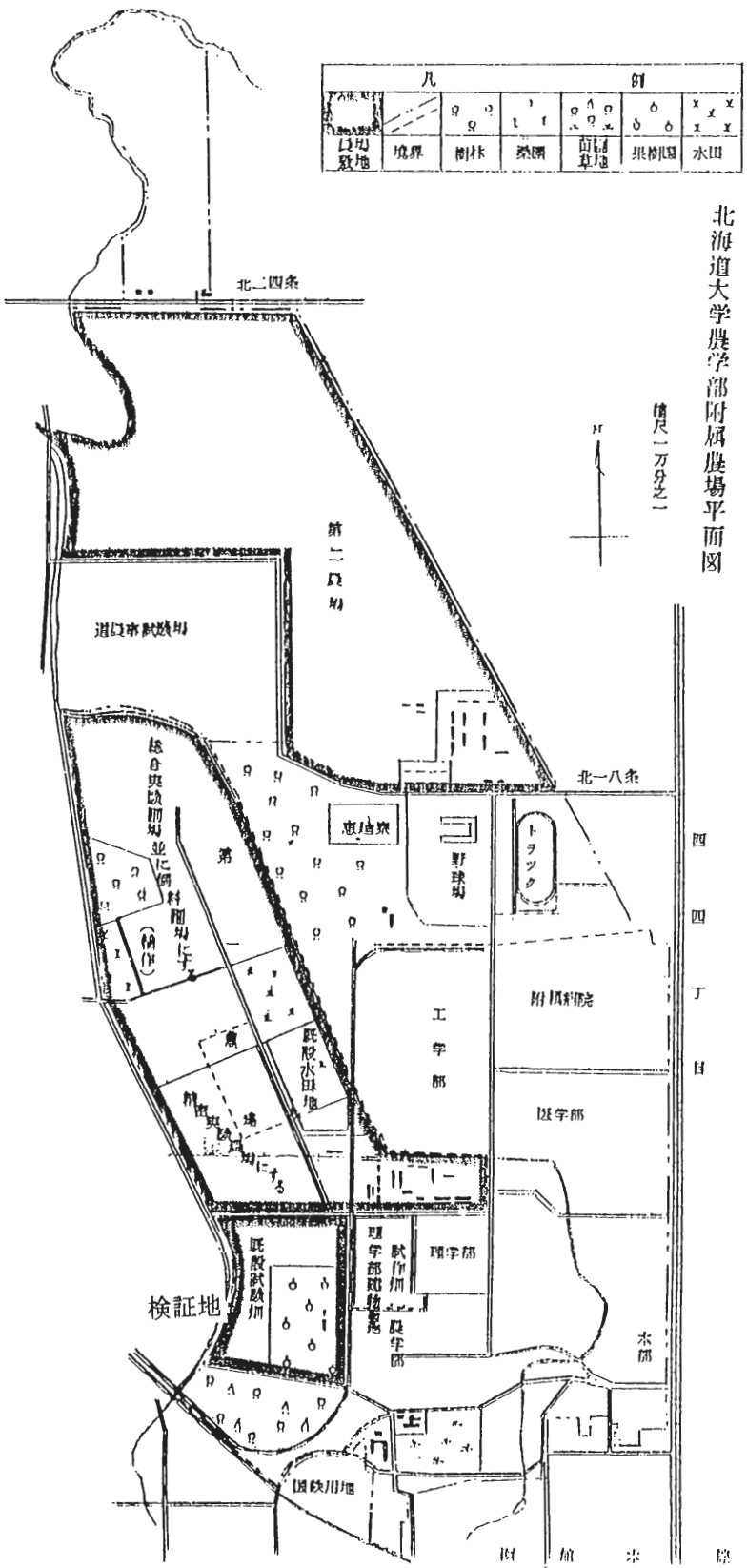
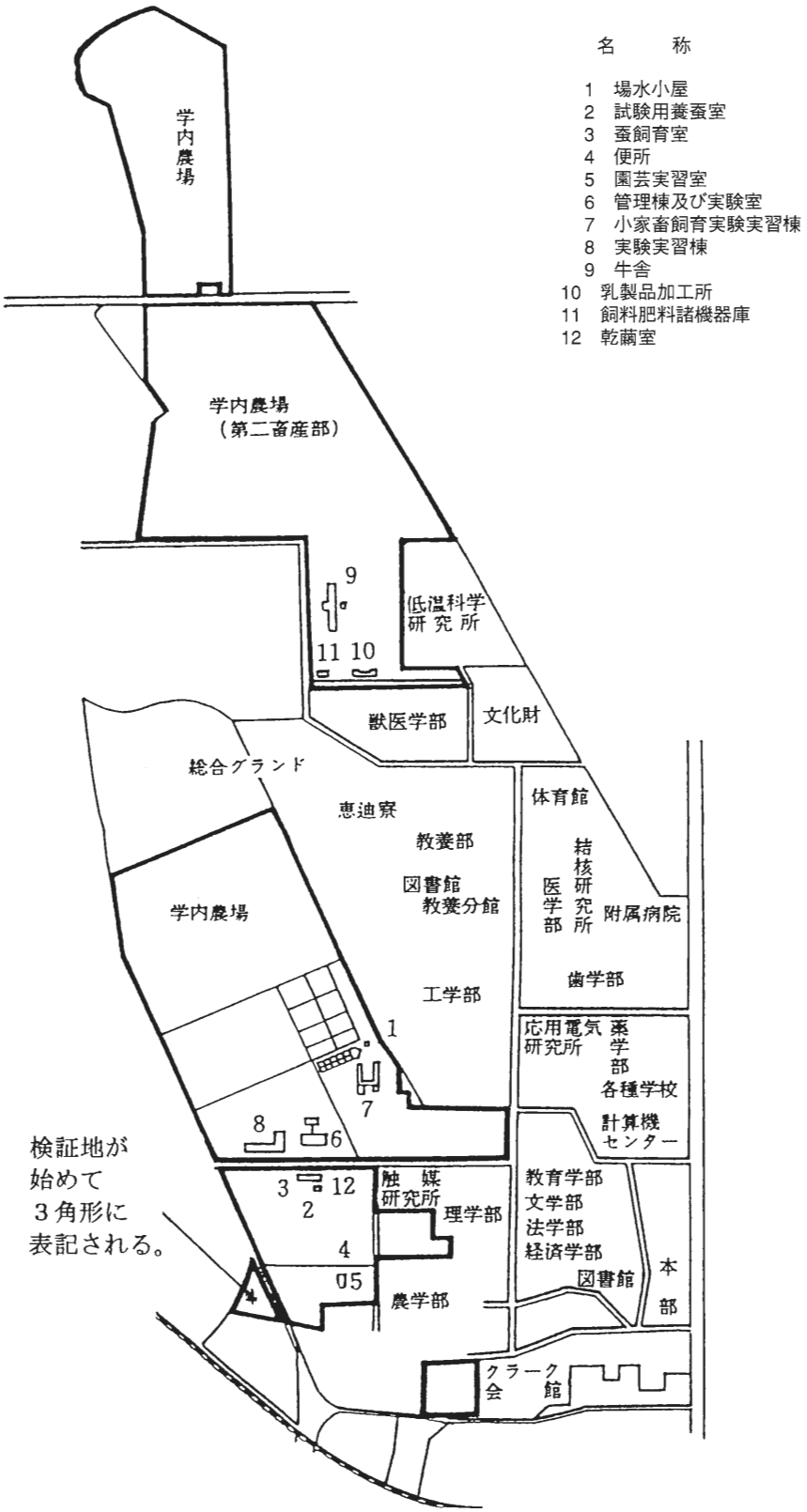


図6　昭和49(1974)年の農場概要図



2．擦文期の北大構内遺跡群

北大文学部北方文化論講座　小野　裕子

北大構内遺跡群は，その大部分が続縄文後半期から擦文文化期のものである．これらのうち，平成元年度までに調査された遺跡群については，その時間的位置ならびに分布上の特色について，横山英介氏による報文（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1989，p.19・同 1990，p.21-22）がある．小論では，その後を受けて，平成2年度から平成10年度の間に明らかにされた遺跡のうち，遺物が得られている平成7年度調査の薬学部校舎改修工事地点と地球環境研究科増設地点の資料を加え，改めて北大構内における擦文文化期の遺跡群について論じることにしたい．

Ⅰ　平成7年度資料の位置づけ

【薬学部校舎改修工事地点出土資料】同地点（fig.1-17）から得られた資料は土器片6点，礫3点と極めて僅かである．ここでは胴部細片を除き，内面に受部を持つ甕と内黒の坏について取り上げる．

［甕：本文39図3］口頸部にかけて数条の極浅い段状沈線が施され，内面に受部を持つ甕である．類例としてはユカンボシＥ4遺跡（北海道埋蔵文化財センター 1992）やサクシュコトニ川遺跡第2文化層（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1986）の資料がある．後者の場合は，口唇並びに受部外端部に刻文が施されており，受部の貼付位置がかなり上部にくるため，上面観は二重口縁を呈するなど，特異な印象を与えるものである．頸部縮約部内面に受部を持つものとしては，南島松4遺跡Ｂ地点（松谷　1992）や丸子山遺跡（田村俊之編　1994）出土資料がある．

口縁部ないし頸部内壁に受部を持つ甕は，現時点では擦文文化期の千歳，恵庭，札幌という石狩低地帯においてのみ出土しており，それが付される甕は頸部に空白部を挟んで口縁部と肩部に数条の横走沈線文を持つ「寡条沈線分離型」か，口頸部に多条沈線を持つ「多条沈線型」であって，所謂刻文土器にはこうした事例は知られていない．従って，サクシュコトニ川遺跡出土資料は，こうした受部を持つ甕のほぼ下限を示すものと言えよう．

薬学部校舎改修地点出土の受部を持つ甕は，サクシュコトニ川出土資料より時間的に遡るのは勿論，浅く，広い間隔の段状沈線が施されるものであることから，ほぼ8世紀後葉頃に位置づけられよう．

［坏：本文39図2］ロクロ未使用の内黒坏で，内彎気味に開く小型のものである．このタイプの平底坏は，青森県や岩手県北部の8世紀後半代の遺跡に認められるもので，李平下安原遺跡（三宅他　1988）や虚空蔵遺跡（滝沢他　1978），二戸市中曽根Ⅱ遺跡（関　1981）などでは横走沈線文を持つ土師器との供伴例も知られている．薬学部校舎改修地点の坏は小型であることから，多少時間的に下がる8c後葉頃に比定できる．

【地球環境研究科増設地点出土資料】

同地点（fig.1-16）からは100点余の土器片か得られており，器種は深鉢形の甕，球胴甕，坏である．遺物は旧建物跡に重なる北半部からの出土が多く，土器片のほとんどは小破片で接合度も低い．しかしながら，明治期のものと見られる若干の遺物を除くと，「北大Ⅰ・Ⅱ式」や「後北C_2・Ｄ式」土器は全く認められず，全体としては，擦文文化期としてのまとまりを持つものである．調査を担当されたシン技術コンサル（当時）の宮塚義人氏からも，これらの遺物群は基本的に *in situ* なものと考えて良いと伺っている．

［深鉢形の甕：38図1・2・5・7・8・9・10］口唇部断面が角形で外反するものが多く，軽い立ち上がりを示すものも若干含まれる．口唇部に刻みを持つものはない．いずれも小破片のため必ずしも全体の文様構成が明らかではないが，「寡条沈線分離型」と，肩部のみに沈線や段をもつ無文タイプとにほぼ2分でき，「多条沈線型」の甕は，初原的なものを除き含まれない．

この無文タイプの甕には，角形口唇で，口縁部を縦にハケメ調整した後，口縁部上端をヨコナデする特徴的な調整が見られる（本文38図2・4）．このような特徴を持つ甕は，札幌市Ｋ435遺跡（上野他　1993）の「Ⅱ群」にも認められる．

［球胴甕：図無し］胴部破片と，これとは別個体と見られる底部があり，いずれも球胴形と推定される．底部は縦のケズリにより厚さ1cmほどの円盤状に作り出されている．先の中曽根Ⅱ遺跡50号住居址やＫ435遺跡「Ⅱ群」の球胴甕が近い特徴を持つ．

［坏：図無し］主なものとして，口縁部破片3点が挙げられる．全て非ロクロ調整のもので，内面に黒色処理が施されている．うち2点は口縁部が外傾してほぼ平底に近くなるタイプと見られ，「国分寺下層式」の前半期に比定できる．

さて，以上の甕と坏からなる土器群は，全体としては札幌市Ｋ435遺跡の「Ⅱ群」土器に近い内容を持つ．同群は「8c前葉」に位置づけられているが，11号竪穴のカマド火床からは，初原的な「多条沈線型」の甕が1点出

fig.1 北大構内の遺跡群

土しており，増設地点にも若干認められることから，これらの時間的位置は8c前半でもその後半部分，第2四半期に中心を置くものと思われる．

さて，同地点の資料には，これ以外に道外からの搬入を考えて良い資料が3点ある．

[坏・図37-2]器高3cmほどの浅い皿状タイプで沈線や段を持たないものである．体部外面はヨコミガキ，底部はハケメ後，ヨコ～ナナメのケズリに加え，ヘラによるナデツケが見られる．黒色処理は，内面から体部外面まで及ぶ．特徴的なのは，内面の底面円周沿いに指押さえによる凹みが巡ることで，器高の浅さと合わせ，八戸市丹後平古墳15号墳（工藤他　1990）出土の「BII類」タイプの坏や，下田町阿光坊遺跡遺構外出土の坏（下田町教育委員会　1990)を類例として挙げることができる．これらは体部外面にミガキ調整を施すことから,「国分寺下層式」前半の在地タイプとして理解されているものである．

丹後平古墳周辺の馬淵川流域の集落には「BII類」タイプの坏が殆ど認められない一方，15キロほど北の下田町阿光房遺跡には器形的にかなり近いタイプのものが存在する．増設地点出土の坏は，こうした地域からの搬入品である可能性を考えて良かろう．その時間的位置については，皿状で段を持たない点をやや時間的に遅れる要素とすると，ほぼ8世紀中葉頃に比定できる．

[球胴甕：図37-1]当資料は，①口縁は比較的短めの「くの字」状で，球胴ないし胴張り形である．②口唇部は薄手で丸くおさまる．③口縁部中程にヨコナデ調整に伴う筋が残る．④胴部は縦から斜めの軽いヘラケズリ仕上げ．⑤口縁部内面の調整はヨコナデ．⑥胴部内面の基本的な調整は横方向のハケメ．⑦細粒砂を含む胎土で焼成は良好だが，堅緻ではない．

今のところこのような特徴をもつ土師器甕は，道内には見あたらない．東北地方では球胴甕は，「塩釜式」から「国分寺下層式」にいたるまで認められるが，「栗囲式」以前の集落は岩手県南半部を大きく越えておらず，仮にこの時期の土器が道内へもたらされるとすると，東北北部にはその時期の在地の土師器はまだ存在していないことから，東北南部地域で製作されたものがストレートに入ることが考えられる．それ故，類例が東北南部の土器群に高い確率で認められると予想されるが，今熊野遺跡（丹羽　1985），宮前遺跡（丹羽　1983），大橋遺跡（太田1980），西大畑遺跡(島他　1981)，善性遺跡(高橋　1982)などから出土している，「塩釜式」から「住社式」に至る球胴甕を実見比較した結果では，それらの胎土，焼成，器厚，口唇部形状，口縁部に見られる調整痕などの点で違いが大きく，当資料をそれらのうちに位置づけることは困難である．しかも，既述のように続縄文期に属する資料は全く含まれていないことから，この甕が「栗囲式」以前の土師器に該当する可能性は除外して良いと思われる．

そこで胴部外面の調整法にまず注目すると，ナデに近いような軽いケズリで，7c末から8c代の東北北部地域の甕に一般に見られるケズリ調整とは異なっている．これに近いと思われるケズリ調整が認められる遺跡としては，「国分寺下層式」段階の糠塚遺跡（宮城県教育委員会1978）や御駒堂遺跡「第4群土器」（宮城県教育委員会1982）を挙げることができる．甕類には「くの字」状口縁を持つ球胴甕も含まれるが，これらの器面調整は口縁部ヨコナデ，胴部縦のケズリ，口縁部内面はヨコナデ，胴部内面は横のハケメというのが大半である．この調整パタンは増設地点出土の甕に見られる器面調整と同様であり，しかも，胴部外面のケズリがナデに近いような「軽いケズリ」である点でも共通性を持つ．

次に，付随的な沈線様の調整痕が口縁部に残る点について検討してみよう．これとよく似た整形・調整法は，水沢市の熊之堂遺跡北地区のSD102溝跡（池田他1995）出土の甕に認められる．口縁部のこのような調整法は，北上川上流以北の東北北部において比較的多く認められ，北部的な特徴である．

しかしながら，北部地域である安比川流域から馬淵川流域における「国分寺下層式」段階の土器群は，口縁部が角形を呈するものが一般的であり，しかも既述のように器面調整において東北南部とは異なる地域的な独自性を示している．それ故，これらの地域からのダイレクトな搬入を考えることはできない．

つまり，これまでの検討から，当資料は，口唇部形状を含めた器形や全体的な器面調整においては東北南部のものに類似し，口縁部に見られる調整に東北北部的な手法が看取できるのである．そしてこの双方の特徴を共に土器製作の際に付与しうる地域としては，宮城県北部以北から北上川中流域にかけての地域が最もその蓋然性が高い．時間的には，宮城県北部の上記の2遺跡の資料から，「くの字」形口縁の胴張形の甕の普及が「国分寺下層式」の後半にあることが押さえられ，他方で北部的な影響を持つ甕が南部において製作される時期は,「国分寺下層式」の後葉を下限とすると見られることから，当資料は8c世紀後半代に位置づけられよう．

[紡錘車　本文図37-3]無文タイプの紡錘車が所謂刻文土器の盛行以前に多数を占め，その分布が石狩低地帯とその周辺部に限られることは既に指摘（中田　1989）

されているが，当資料のような断面が明瞭な台形で，厚みがあり，上下両面が平滑で，全体を丁寧なミガキ仕上げする紡錘車は，田面木平遺跡38号や50号住居址（藤田他　1988），櫛引遺跡第3号住居址（坂本他　1999），あるいは中曽根II遺跡145号住居址（前出）など，8c中葉を前後する時期の東北北部，殊に馬淵川水系周辺の遺跡のものに非常に近い．これに比して，道内のものは厚みが少なく，上底の軸孔周辺に凹凸を残すものが多数を占め，しかも全面をミガキ仕上げするものも少数であることなどから，当資料が東北北部からの搬入品である蓋然性は極めて高いと思われる．

既述のように，これら土器群の主要な部分はK 435遺跡C地点の「II群」に近いが，同群は竪穴住居址に伴うものである．一方，増設地点の土器群は，包含層の削平や攪乱を挙うじて免れた僅かな点数でありながら，深鉢形の甕，坏，球胴甕，紡錘車など多彩である．それが元の母集団を反映しているとして良いなら，同地点の土器群がK 435遺跡C地点同様，竪穴住居に伴うものである可能性は少なくない．増設地点は，サクシュコトニ川の古河道から直線距離にして東約110mの位置にある（fig.1参照）．この上流蛇行部の右岸側を見ると，遺物あるいは何らかの遺構の可能性を持つものが発見されている箇所は，情報教育センター西側地区（No.15）から上流側に2カ所あり，平均すると古河道から35mの位置にある．また，同センター西側地区の東30mに自転車置き場があるが（fig.1白星印），かつてこの設置に際して，竪穴住居址と見られる落ち込みが確認されている[1]．この位置は古河道から約65m東に当たる．これらはすべて古河道に沿って分布しており，殊に竪穴住居址と目される自転車置き場をこの蛇行部周辺の住居構築地点の一つのメルクマールとすると，増設地点周辺に住居址が存在したとすれば，調査区のさらに西を走る道路の東側沿い，つまり既存の地球環境研究科研究棟当たりになろう．

確かに，現時点まで増設地点周辺に竪穴住居址は確認されていない．しかしながら，得られている資料は，搬入品と見られるものは勿論，他の甕類なども道央的な変容は生じているものの「土師器」に分類されるものである．これらには在地の「十勝茂寄式」土器群や，それとの融合化を示す資料が全く含まれないことから，「土師器」を伴うグループによってこの場所に残されたものであり，それらは居住に伴う生活廃棄物であった蓋然性が高い．時間的には，既に論じたところから，8c第2四半期から第3四半期にかけての時期となろう．

II　擦文期の北大構内遺跡群

擦文文化が，続縄文系グループの土師器文化による変容であることは既に周知のことだが，その変容過程は，続縄文系グループと土師器を伴うグループとの併存・接触段階と，融合完了段階に分けられる．これについては既に横山氏の論考があるが（横山　1984），北大構内の擦文期の遺跡群についてはこうした理解が生かされておらず，異なった整理の仕方が必要である．ここでは前章の結果を含め，改めて北大構内の擦文期の遺跡群の位置づけを行いたい．

【併存・接触段階－A．在地グループ】

「十勝茂寄式」（大沼　1989）の甕に土師器坏という組み合わせの成立を，擦文文化への第一歩とすることは今日異論がない．構内におけるこの段階の遺跡は薬学部受水槽予定地（fig.1-10）と国際学術交流会館遺跡（fig.1-9）である．

薬学部受水槽予定地では「十勝茂寄式」の甕と体部下半に沈線を1条持つ椀形平底坏，およびやや間隔をおいた数条の段状沈線や沈線文を持つ甕が一括と見なされる状態で出土している（北海道大学埋蔵文化財調査室編1985）．このような鋸歯文や烈点文を持つ「十勝茂寄式」土器群と「多条沈線型」の土器群との時間的併行関係から，両者が融合した刻文土器が成立することは既に指摘されている（横山前出）．

この受水槽予定地から得られている椀形平底坏は，K 435遺跡の「II群」よりやや新しい特徴を備えているが，「III群」では既に定型的な深めの椀形平底坏に移行していることから，「II群」と「III群」の間に位置づけられる．報告では「III群」は，「II群」に続く「8c中葉～後葉」とされているが，「III群」には平行叩き目の須恵器甕と回転ヘラ切りおよび回転糸切りの須恵器坏が伴うことから，同III群はむしろ8c後葉に中心を置くと思われる．それ故，受水槽予定地資料は8c第3四半期頃に比定できる．

学術交流会館からは性格不明の小竪穴が2基検出されており（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1987），1軒の竪穴埋土から「十勝最寄式」土器片が得られている．時間的には，受水槽予定地に併行するか，乃至は多少遡る可能性がある．さらに上流の扇状地末端面に位置するK 135遺跡西4丁目地点（上野他　1987）最上層もほぼ同時期の遺跡であるが，周辺での雑穀栽培が推定されているものの，竪穴住居址は未検出である．

このように「十勝茂寄式」段階の遺跡はサクシュコトニ川上流部に散点的に認められるのみであり，そこでは竪穴住居を伴う形での定着が確認されていない．

この段階では，彼らは土師器を伴うグループと併存・接触しつつも，依然として上流部側の扇状地末端面周辺において，続縄文的な社会・経済システムを維持していたものと思われる．

【併存・接触段階－B．土師器を伴うグループ】

8c第2四半期には先の増設地点周辺に土師器を伴うグループの，恐らく竪穴住居を伴う進出が始まる．下流部のサークル会館遺跡（fig.1-13）は，竪穴住居に共伴する資料が極僅かだが，埋土の資料も含めると（北海道大学埋蔵文化財調査室編 1981），K 435 遺跡「II群」から「III群」にかけての時間的位置を持つ．このことから，土師器を伴うグループが上流蛇行部の増設地点に進出してまもなく，下流部のサークル会館遺跡においても居住が開始されていたことが窺える．同遺跡の北にある陸上競技場では，平成6年度の立会調査で竪穴住居が確認されており（北海道大学埋蔵文化財調査室編 1995），出土した坏から見てこれらの遺跡とほぼ同時期の住居の可能性がある．また，工学部裏でも土師器を伴う竪穴住居址が検出されており（後藤　1937，上野　1979），サクシュコトニ川左岸沿いの農場内にも同グループの住居址の存在が知られる．上流部では，中央道路共同溝（第4工区）（fig.1-1）青粘土層から土師器甕が出土しており（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1995），この周辺にも住居址が存在する可能性がある．これら土師器を伴うグループは，上述のように受水槽予定地や学術交流会館遺跡などの「十勝茂寄式」グループと時間的に併行し，接触が開始されるが，上記のグループと同様，相互的な影響が依然限定的な範囲に止まっている段階である．

【融合開始段階】

併存段階から進んで，両グループが擦文文化へ歩み出した段階が，教育学部北広場遺跡（fig.1-18），薬学部校舎改修工事地点（fig.1-17），薬学部周辺整備工事地点（fig.1-20）などである．

教育学部北広場遺跡では2軒の竪穴住居址が調査されているが（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1983），1号竪穴埋土や3号住居出土の甕は「十勝茂寄式」に由来する特徴を持つことから，融合化に踏み出した段階であることが捉えられる．これら住居群から得られた資料は，サクシュコトニ川第2文化層の前半部に比定できる．同様の段階は，薬学部周辺整備工事地点から得られている甕にも認められる（北海道大学埋蔵文化財調査室編 1990）．前章で検討した薬学部校舎改修工事地点の甕もその特徴から融合段階初期に含められるが，上の2例より多少時間的に遡り，受水槽遺跡にやや遅れる時間的位置が与えられる．

【融合完了段階以降】

この段階の好例はサクシュコトニ川遺跡（fig.1-6）第2文化層後半である．原初的な農耕を組み入れた複合的な生業体系を基盤とする本格的な擦文文化の確立が明らかになっている（北大埋蔵文化財調査室編 1986）．同段階としては，先の教育学部北広場遺跡遺構外出土の甕や，あるいは職員福利厚生施設出土資料（fig.1-11）も含められよう．

これに続く段階は工学部核磁気共鳴装置棟敷地内遺跡（fig.1-19）で，サクシュコト二川遺跡の第1文化層併行である（北海道大学埋蔵文化財調査室編　1988）．

さらに後れる段階は，先の薬学部周辺整備工事地点の新しい時期の土器群や，応用電気研究所前遺跡（fig.1-23）の竪穴住居址埋土資料（北海道大学埋蔵文化財調査室編 1981）が該当する．竪穴住居址は未検出だが，下流部のK 39 遺跡北18条道路地点ではこの段階の住居群も検出されているので（藤井　1998），上流部のこれらの資料も竪穴住居に伴う可能性が高い．fig.2 はこれらの遺跡群の関係概念図である．

以上のように，北大構内遺跡群においては，社会・経済システムの完全な脱続縄文化を完了した段階は，その遺跡立地，生業内容，刻文土器の成立などから，サクシュコトニ川遺跡第2文化層や教育学部北広場遺跡に求められる．これ以降は土師器系のグループと在地グループとは完全に同化して，まさに擦文集団としてのグループのみが存在することになる．刻文土器の成立はこうした集団的な統合化のプロセスを雄弁に物語るものである．

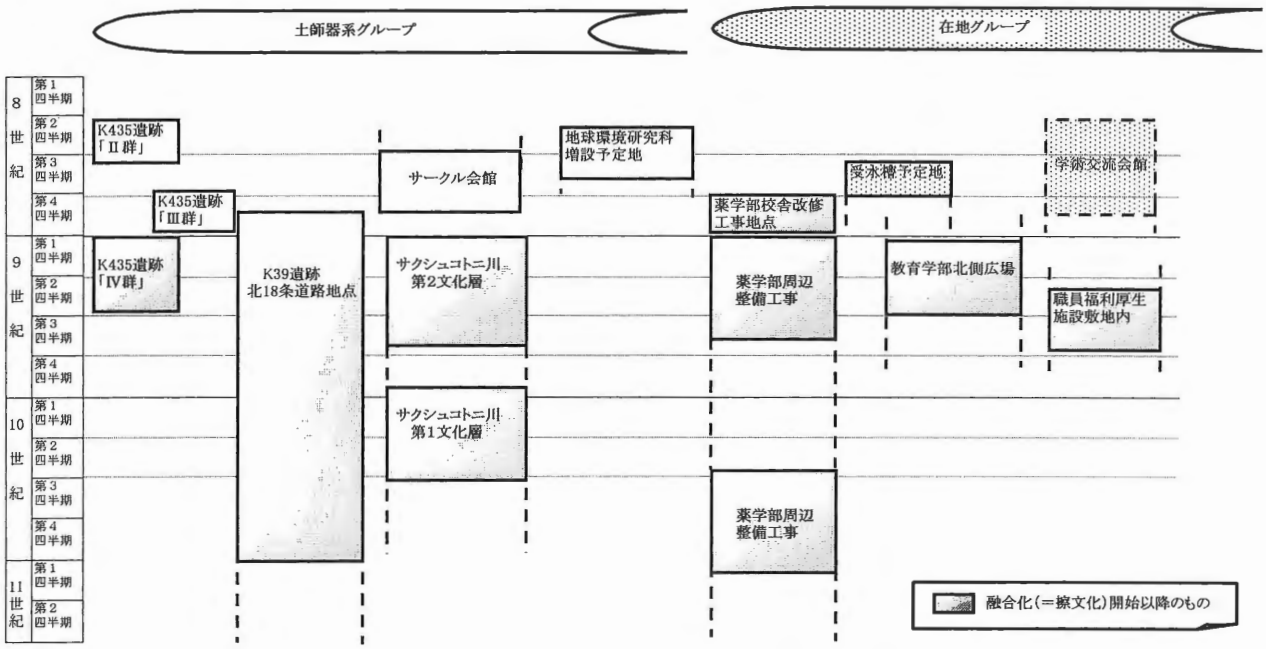
本稿は依頼者側のご都合により，当初予定した論文の部分的な要約に止まった．論文の作成に当たっては資料の実見などで多くの方々にお世話になっている．機会を改めて責めを果すことにしたい．

以下の方々に深謝申し上げる．恵庭市教育委員会上屋真一氏，松谷純一氏，札幌市教育委員会仙庭伸久氏，八戸市教育委員会宇部則保氏，東北歴史資料館阿部博志氏，岩手県埋蔵文化財センター高橋与右衛門氏，岩手県立博物館女鹿淳哉氏，水沢市埋蔵文化財センター伊藤博幸氏，佐藤良和氏，青森県埋蔵文化財センター相馬信吉氏，アジア航測宮塚義人氏御夫妻．

註

1）この落ち込みが竪穴住居址であることについては，工事に立ち会われた当時の文学部附属北方文化研究施設の大井晴男・天野哲也両先生からそれぞれ御教示を頂戴した．感謝の意を表したい．

fig.2 擦文期の構内遺跡群の関係概念図



引用・参考文献

藤井誠二
1998「札幌市K 39 遺跡北 18 条道路地点」『1998 年度遺跡調査報告会資料集』北海道考古学会 pp 26-31

藤田亮一・宇部則保
1988『八戸市新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書V－田面木平遺跡(1)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 20 集

後藤壽一
1937「札幌市及其附近の遺跡・遺物の二三に就て」『考古学雑誌』pp. 585-619

北海道大学埋蔵文化財調査室編
1981『北大構内の遺跡 昭和 55 年度』[1]
1983『北大構内の遺跡 昭和 56 年度』[2]
1985『北大構内の遺跡 昭和 58 年度』[4]
1986『サクシュコトニ川遺跡―北海道大学構内で発掘された西暦 9 世紀代の原初的農耕集落―』
1987『北大構内の遺跡 昭和 59 年度』[5]
1988『北大構内の遺跡 昭和 60－61 年度』[6]
1989『北大構内の遺跡』昭和 62 年度・63 年度 [7]
1990『北大構内の遺跡』昭和 64 年度・平成元年度 [8]
1995『北大構内の遺跡 平成 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 年度』[10]

北海道埋蔵文化財センター
1992『恵庭市ユカンボシE 4 遺跡―般国道恵庭バイパス建設工事及びユカンボシ川小規模改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―』北埋調報 75

池田明朗・佐々木千鶴子他
1995『水沢遺跡群範囲確認調査熊之堂・跡呂井館・中平館・梨畑・二ツ渕遺跡 平成 6 年度発掘調査概報』岩手県水沢市文化財調査報告書第 29 集

工藤竹久・藤田亮一他
1990『丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 4 集

松谷純一
1992『中島松 1 遺跡 南島松 4 遺跡 南島松 3 遺跡 南島松 2 遺跡』恵庭市教育委員会

宮城県教育委員会
1978『宮城県文化財発掘調査略報 (昭和 52 年度分)』宮城県文化財調査報告書第 53 集
1982『東北自動車道遺跡調査報告書』VI 宮城県文化財調査報告書第 83 集

三宅徹・坂本洋一
1988『李平下安原遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 111 集

中田裕香
1989「擦文時代の紡錘車について」『古代文化』Vol.41 pp 307-324

丹羽 茂
1983『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第 96 集
1985『今熊野遺跡・一本杉・馬越遺跡』宮城県文化財調査報告書第 104 集

大沼忠春
1989「北海道の文化」『古代史復元』 9 講談社 pp 174-187

太田昭夫
1980『大橋遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第 71 集

坂本真弓他編
1999『櫛引遺跡―東北縦貫自動車道八戸線 (八戸～八戸) 建設事業に伴う遺跡発掘調査報告―』青森県埋蔵文化財調査報告書第 263 集

島隆・相原康二他
1981『東北自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 IX (水沢地区)』岩手県文化財調査報告書第 60 集

下田町教育委員会編
1990『阿光房遺跡発掘調査報告書』下田町埋蔵文化財調査報告書第 2 集

高橋与右衛門編
1982『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書 水沢市膳性遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第 34 集

滝沢幸長・工藤竹久
1978『虚空蔵遺跡発掘調査報告書』名川町教育委員会

田村俊之編
1994『丸子山遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書 IX

関 豊
1981『仲曾根II遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会

上野秀一
1979『K 446 遺跡』札幌市文化財調査報告書 XX

上野秀一・加藤邦夫
1987『K 135 遺跡 4 丁目地点 5 丁目地点』札幌市文化財調査報告書 XXX

上野秀一・仙庭伸久
1993『K 435 遺跡』札幌市文化財報告書 XL II

横山英介
1984「北海道におけるロクロ使用以前の土師器―擦文時代前期の設定―」『考古学雑誌』第 70 巻第 1 号 pp 52－75

まとめにかえて

平成7年度から平成10年度までの4年間にわたる北海道大学構内における埋蔵文化財調査の結果をまとめて報告することができた．関係機関と各位に感謝いたします．

北海道大学の構内は，昭和59年(1984年)に札幌市埋蔵文化財「K 39遺跡（北大遺跡群)」として登録されているために，構内におけるあらゆる土木工事を実施するに当たって，事前にその地区の埋蔵文化財包蔵の有無・性格などを確認し，破壊される可能性のある埋蔵文化財が認められるか否かの予備的な調査をする必要がある．

昭和55年(1980年)に発足した北海道大学埋蔵文化財調査室は，構内に多くの遺跡が存在することを明らかにしてきた．この調査室は事務局施設部企画課が窓口となっているが，学内における教官組織としての位置づけが明確に位置づけられていなかった．しかし，平成11年度に施設・環境委員会施設計画専門委員会「埋蔵文化財調査検討部会」として学内において公式に認知された．

発掘調査によって得られた埋蔵文化財は，整理作業の終了したものから，順次，埋蔵文化財調査室に付設されている「展示室」に陳列され，学内外者を含めて，誰でもが見学できるようになっている．研究者のみならず，一般市民やこの地を訪れる観光客にとっても，地域の歴史を実地に学習する場としての意義は大きいのである．

一方，平成11年に「北海道大学総合博物館」が設置されたので，この「展示室」が総合博物館に取り込まれ，北海道大学の歴史に関する埋蔵文化財が今後とも大切に保管・管理，展示されるばかりでなく，研究教育の活動のために有意義に活用されることが望まれる．

また，平成11年度の総長裁量経費「札幌キャンパスの自然と文化史」において，これまでの埋蔵文化財調査によって確認されたサクシュコトニ川のほとりに存在した先史時代の集落の状況を復元し記録する予定である．

我々は日々，周囲にある生活空間を自然環境や人文環境の中でとらえ，その関係と意味を見いだしながら生きているので，先人達が生活した証拠である埋蔵文化財が明らかにした歴史を知ることの意義は大きいし，理解する必要がある．

小　泉　　格

平成10年度
北海道大学埋蔵文化財プロジェクト委員構成

留　任
小泉　　格（大学院理学研究科・理学部　教授）
　　（埋蔵文化財調査室　室長）
林　　謙作（文学部　教授）
島本　義也（大学院農学研究科・農学部　教授）
渡邉　暉夫（大学院理学研究科・理学部　教授）
新　任
三田地利之（大学院工学研究科・工学部　教授）
(1996年4月より)
小杉　　康（文学部　助教授）
(1997年4月より)
退　任
梅田　安治（大学院農学研究科・農学部　教授）
(1996年3月定年退職)

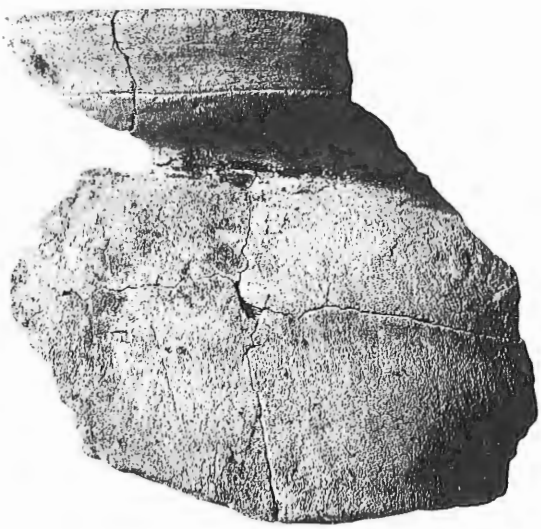
写　真　図　版

写真 2　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地全体写真（北より）

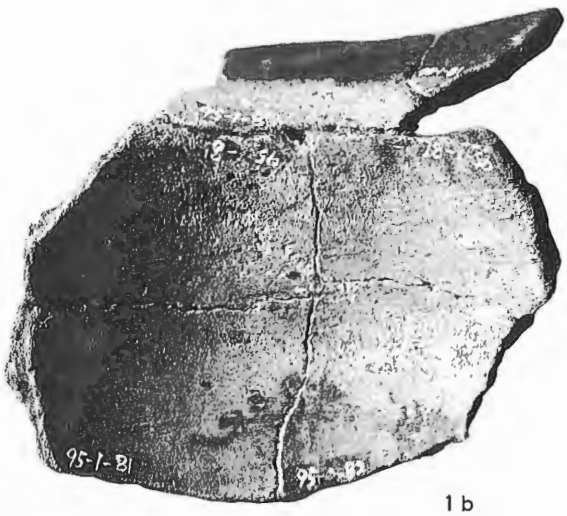
写真 3　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地セクション（東より）

写真 4　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地セクション（南より）

写真 5　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地遺物出土状況



1 a

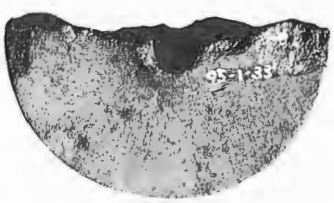


1 b

2 a

2 b

3 a



3 b

写真６　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地出土遺物(I)

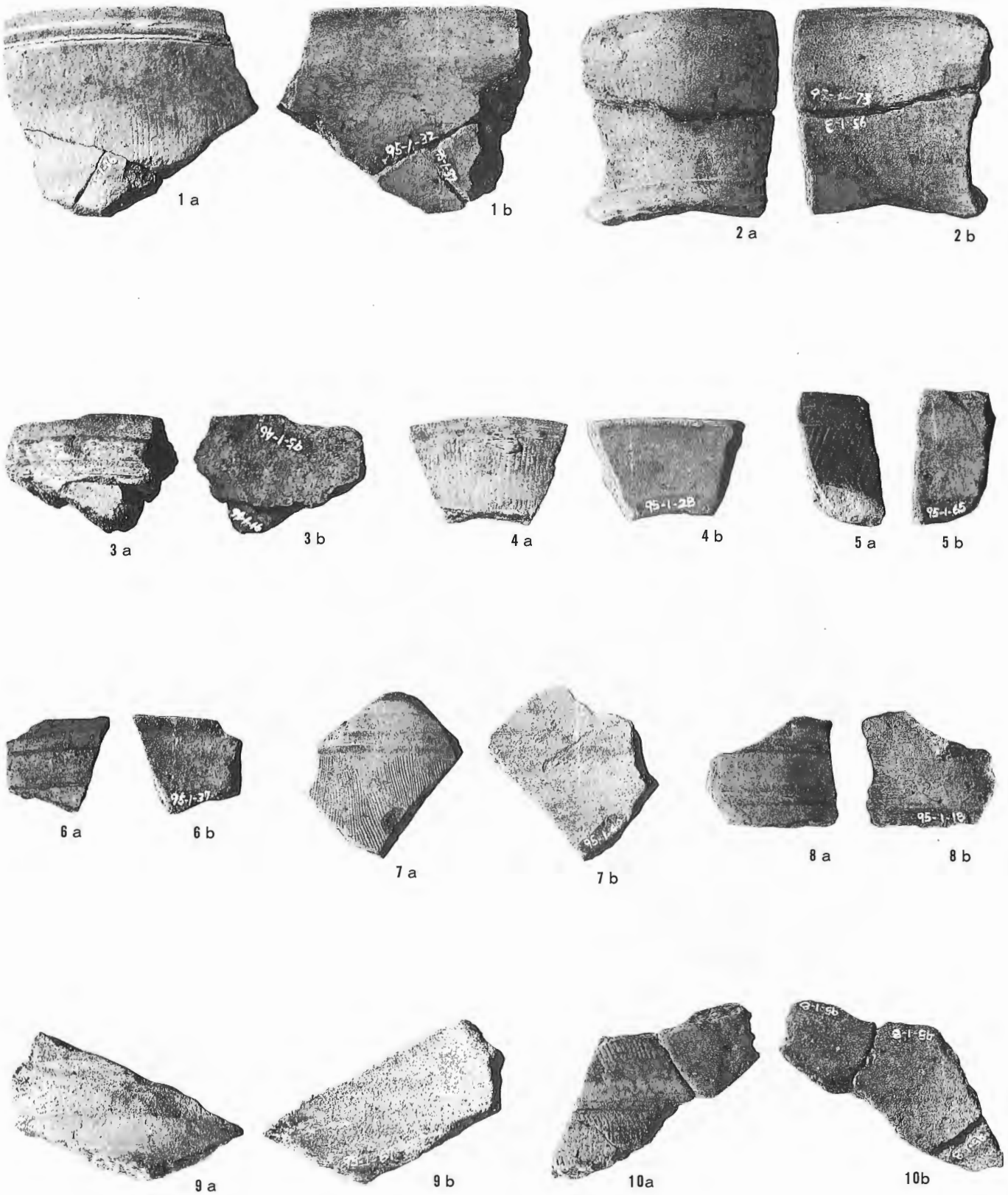
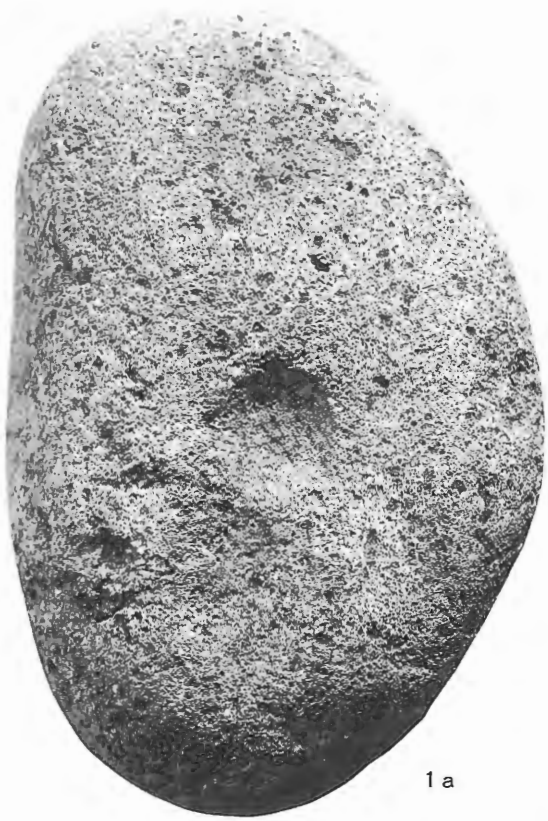


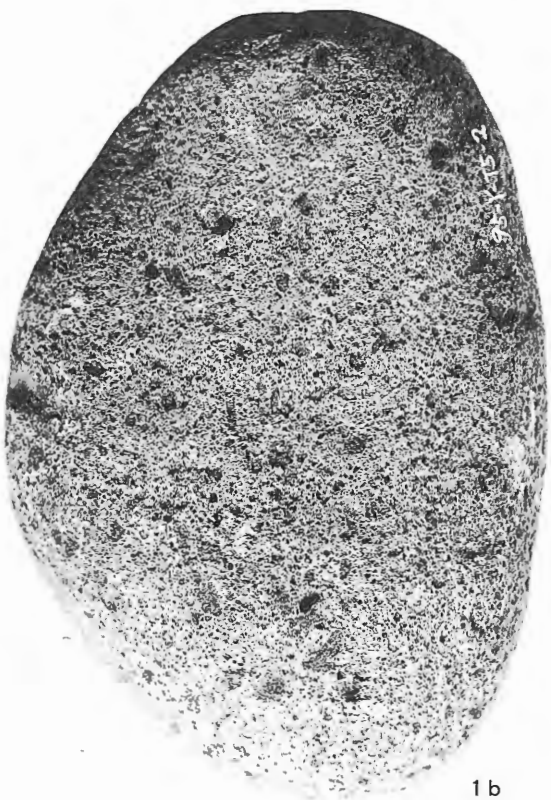
写真 7　地球環境科学研究科研究棟新営工事予定地出土遺物(2)

写真 8　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地（東より）

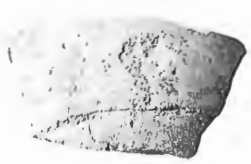
写真 9　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地遺物出土状況（北より）



1 a



1 b



2 a

2 b

3 a

3 b

写真 10　薬学部校舎改修（プレハブ）工事予定地出土遺物

写真 11　国際交流会館新営工事予定地気球写真

写真 12　国際交流会館新営工事予定地耕作跡

写真 13　理学部校舎新営工事予定地（北より）

写真 14　理学部校舎新営工事予定地（北より）

北大構内の遺跡[11]

「平成7・8・9・10年度」

2000年3月　発行

発行所　北海道大学
札幌市北区北8条西5丁目

編集者　小泉　格・林　謙作

印刷所　㈱アイワード
060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目
011－241－9341

北大構内の遺跡[11]

HOKKAIDO UNIVERSITY
CAMPUS SITES／2000

北海道大学